

広島市安佐北区口田1丁目所在

大久保遺跡 発掘調査報告

1992・3

I は じ め に

広島市教育委員会は、1991（平成3）年2月、広島市安佐北区口田一丁目における宅地造成計画を知り、計画区域内の埋蔵文化財の分布調査を行った結果、その存在を確認した。そこで事業主である株式会社浅沼組と遺跡の取扱いについて再三協議を重ねたが、現状保存は困難であり、記録保存によることもやむを得ないとの結論に達した。

株式会社浅沼組は、財団法人広島市歴史科学教育事業団に調査を委託して行うこととし、1991（平成3）年5月から発掘調査の準備にかかり、6月3日に調査を開始し、12月6日に終了した。

調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者	株式会社浅沼組
調査主体	財団法人広島市歴史科学教育事業団
調査担当係	財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課事業係
調査関係者	片岡寿一 常務理事 若野健二 文化財課長 幸田 淳 文化財課事業係長 若島一則 文化財課主査 岡野孝子 文化財課嘱託
調 査 者	大崎尚吾 文化財課主事（逝去） 松岡美緒 文化財課学芸員

調査補助員（順不同）

石原 正行，石原 光江，川手 京子，宗近 幸子，戸井 逸子，久都内一男，
香川 一之，宗近 正，植木 真澄，岩田貴代子，檜崎 節郎，坪木 征子，
大田 松野，土橋 武司，宮田 政子，柿田美也子，河合 俊篤，石田 孝子，
高本すが子，田中 範昭，河合 淳子，河瀬 陽子，中本 智子，栗林 隆幸，
住川香代子，山本 都，黒田 千景，小野 圭，原口 敦彦，小松 宏昭，
佐伯ひとみ，柳本 竜雄，新田 浩治，中田 妙子

株式会社浅沼組，三和建設株式会社，広島市教育委員会，口田公民館，真亀公民館ほか多くの方々には，調査を円滑に進めるため，多大な御配慮と御協力をいただいた。また，調査中，広島大学文学部考古学教室潮見浩教授（文学部長），川越哲志助教授，河瀬正利助教授，古瀬清秀助手から貴重な御指導，御助言をいただいた。さらに，報告書の作成にあたっては，大阪大学文学部都出比呂志教授ほか多くの方々から広範な御教示をいただいた。記して謝意を表したい。

調査担当者であった文化財課主事，大崎尚吾氏におかれては，現地調査終了直後の1992年12月22日に急逝されました。ここに記してご冥福をお祈りします。

Ⅱ 位置と環境

大久保遺跡は、広島市安佐北区口田一丁目（旧高陽町）の所在する。この地域は、太田川下流域の東岸、広島デルタの頂部に位置しており、標高483.2 の二ヶ城山から北西にむかって低丘陵群が発達している。今回報告する大久保遺跡は、これらの低丘陵群からさらに南西に派生した丘陵上に営まれており、太田川によって形成された沖積平野を広く望むことができる。

旧高陽町域の丘陵上では、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く発見されている。弥生時代前記の遺跡は発見されていないが、中期のものとしては弘住遺跡^(注1)の配石遺構、大明地遺跡^(注2)の住居跡などが報告されている。大明地遺跡については弥生時代終末まで継続したとされている。

一般的に、広島市域においては、弥生時代後期以降遺跡の数が急激に増加する傾向がみられるが、この地域もその例外ではない。

弥生時代後期の集落遺跡については、上深川式土器^(注3)を指標とする編年をもとにみてゆけば以下のとおりとなる。上深川Ⅰ式の段階のものとしては、真亀C地点遺跡^(注4)、真亀D地点遺跡^(注5)、末光遺跡群A地点・B地点・E地点^(注6)で1軒ないし2軒の住居跡が検出されている。上深川Ⅱ式の段階の住居跡は、真亀A地点遺跡^(注7)、真亀B地点遺跡^(注8)、真亀F地点遺跡^(注9)、真亀G地点遺跡^(注10)、末光遺跡群A地点・D地点などで確認されている。上深川Ⅲ式（古）の段階になると、真亀G地点遺跡^(注11)、大井遺跡群^(注12)、山手遺跡群^(注13)、寺迫遺跡^(注14)、西山・北山遺跡群^(注15)、末光遺跡群E地点^(注16)、岩上山田遺跡などの遺跡で2～3軒の住居跡が確認されている。上深川Ⅲ式（新）の段階では、山手遺跡群^(注17)、寺迫遺跡^(注18)、金川遺跡^(注19)、岩上山田遺跡^(注20)では1軒ないし2軒の住居跡が確認されている。基本的にこれら集落遺跡は、1～3軒程度の住居を1単位とした集落が尾根上に点在するという在り方をみせている。

このように弥生時代後期のものとして数多くの集落が検出されているわけだが、墳墓を検出した遺跡もいくつかある。

末光遺跡群A-2地点では、11基の墳墓が確認されている。そのうち10基が土壙墓で1基が土器蓋土壙墓である。供献土器など遺物の出土はなかったが、土器蓋として使用された壺形土器が上深川Ⅱ式の特徴を有しているため、墳墓全体の時期も上深川Ⅱ式からⅢ式の時期が考えられる。

寺迫遺跡では、土壙墓2基、土器棺墓3基が確認されている。土壙墓については末光遺跡群A-2地点同様遺物の出土はなかった。しかし、土器棺として使用された土器は上深川Ⅱ式・Ⅲ式の特徴を有しているとされており、墳墓全体の時期も上深川Ⅱ式からⅢ式の時期が考えられる。

西願寺北遺跡^(注21)では、太田川を見下ろす尾根の背後に溝を掘り込んで断ち切り、他の三方を削り落とした区画した墳丘に竪穴式石室1基が確認されている。副葬品として鉄斧と碧玉製の管玉が出土しているほか、供献用の土器が多数検出されている。

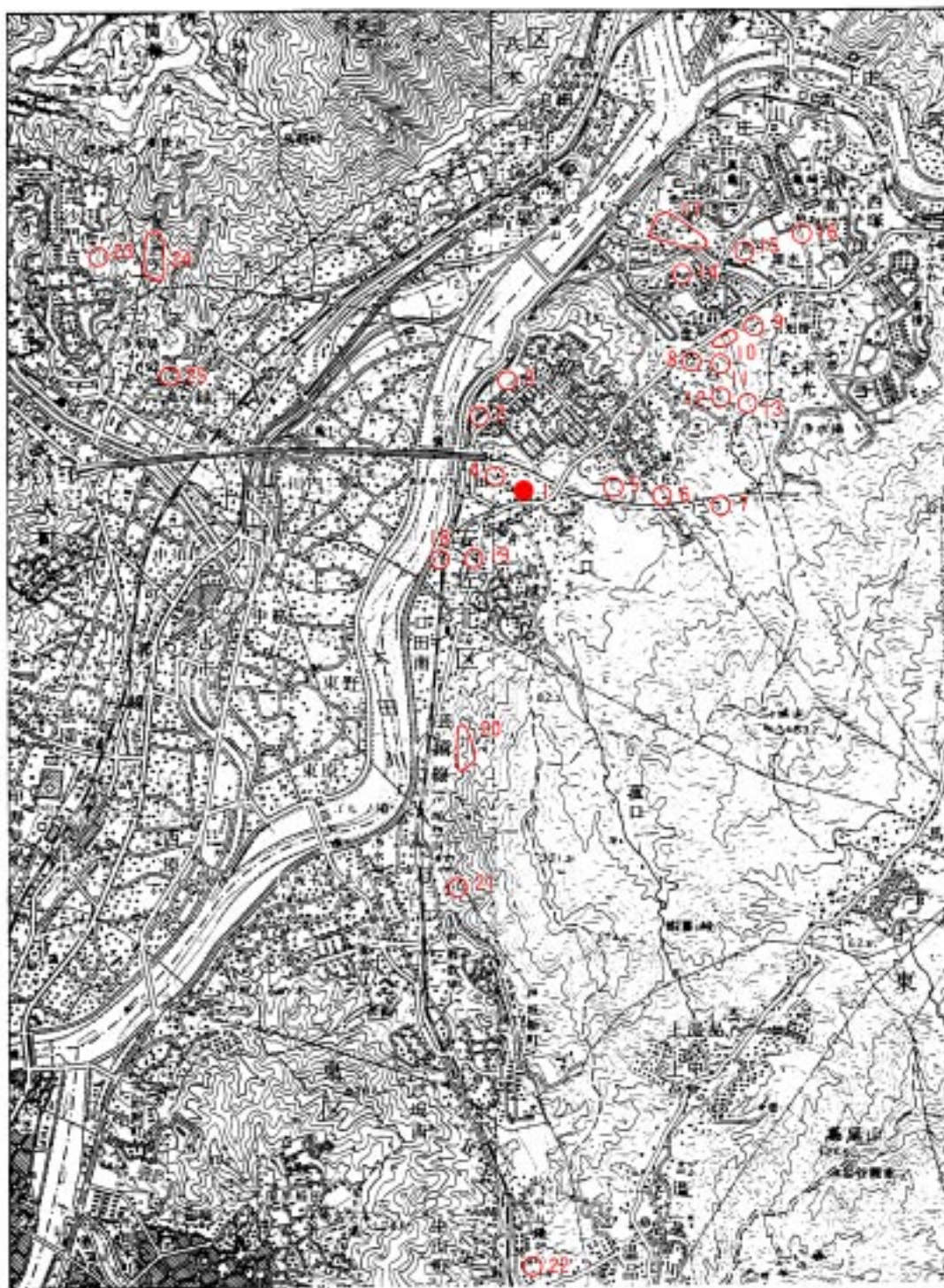
西願寺山墳墓群^(注22)は、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群であるとされている。遺跡の最高所に位置するA地点では42基の土壙墓群が確認されており、土壙墓の大部分は尾根に直交するように掘り込まれている。表面採集による弥生土器の細片以外に遺物は検出されていないが、西願寺山墳墓群のなかでは最も古い時期に位置づけられている。C地点では太田川を見下ろす尾根の背後を溝で区画した墓域から14基の土壙墓と4基の竪穴式石室が混在した形で確認されている。埋葬施設の大部分が尾根に直交して営まれており、4基の竪穴式石室はいずれも墳丘をもたない。遺物としては、供献用とされる一括土器が検出されている。D地点では、2基の竪穴式石室と1基の小型箱式石棺が確認されている。2基の竪穴式石室には、武器・農具・工具など多くの鉄器が副葬されていた。西願寺山墳墓群は、土壙墓から石室墓へという埋葬施設の構造の変化を追うことができる遺跡として評価されている。

古墳時代にはいると、太田川を望む丘陵上に古墳が営まれるようになる。代表的なものをあげると、大久保遺跡からよく見渡すことのできる弘住遺跡^(注23)の第3号古墳^(注24)をはじめとして、三角縁神獸鏡を出土した中小田第1号古墳^(注25)、弘住第1号古墳^(注26)、中小田第2号古墳^(注27)などをあげることができる。特に、中小田第1号古墳以下にあげたものは、太田川下流域の首長墓に想定されている。

今回報告する大久保遺跡では、弥生時代後期の集落と墳墓群が検出されており、太田川下流域の弥生時代から古墳時代へかけての社会のありかた、特に墓制について考える際の良好な新資料が得られた。

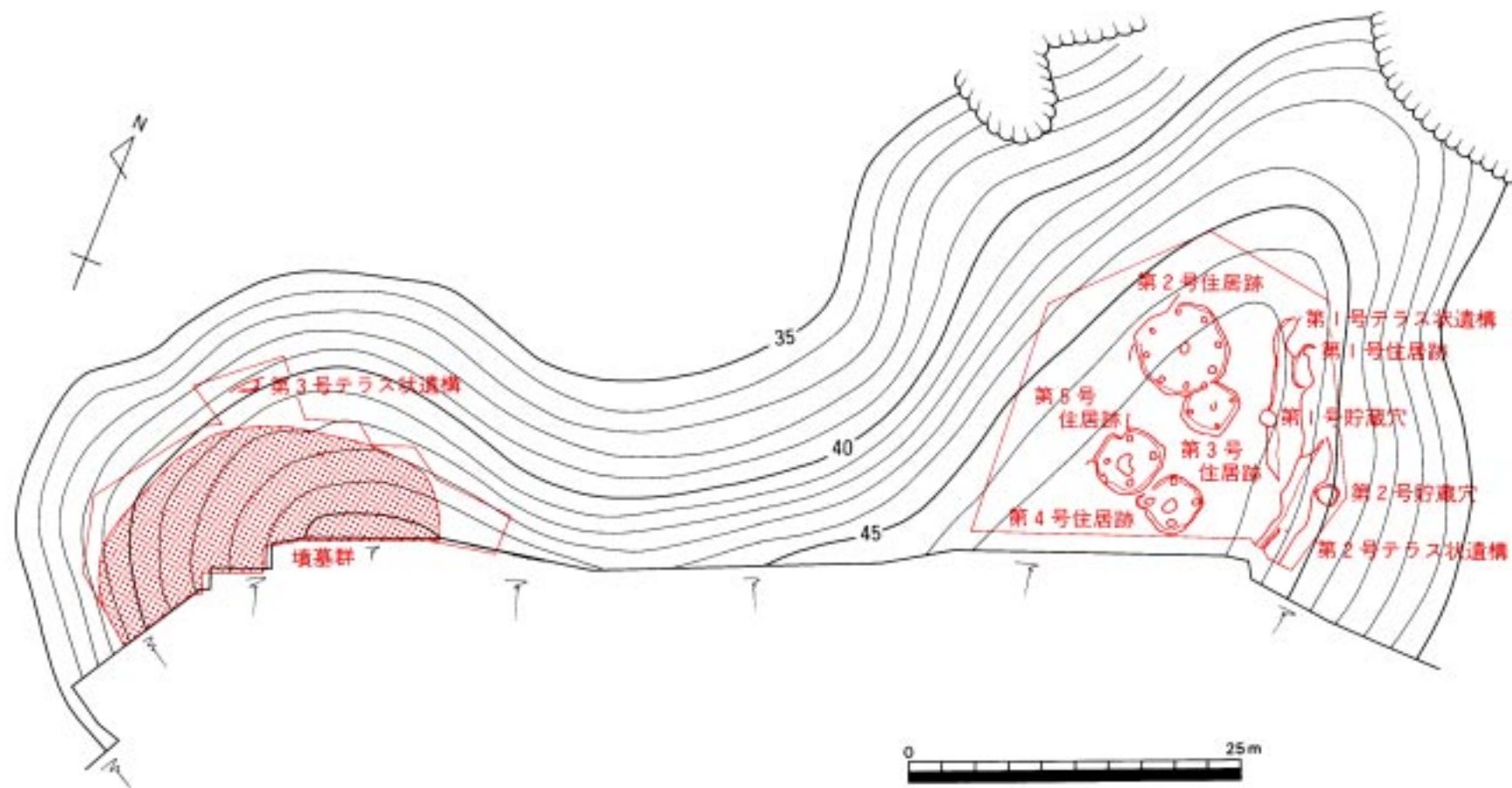
注

1. 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983
2. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」『山陽児童車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
IV 1987
3. 松崎寿和「広島県安佐郡上深川遺跡」『日本考古学協会年報』5 1957
広島市教育委員会『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1957
4. 広島市教育委員会『岩上山田遺跡発掘調査報告』1988
5. 広島県教育委員会「恵下山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
6. 広島市教育委員会『末光遺跡群発掘調査報告』1984
7. 広島県教育委員会「大井遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
8. 広島県教育委員会「山手遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
9. 広島県教育委員会「寺迫遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
10. 広島県教育委員会「西山・北山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
11. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金川遺跡群」『山陽児童車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
IV 1987
12. 石田彰紀「中山の歴史のあけぼの」『中山村史』1991
13. 広島県教育委員会『西願寺遺跡群』1974
14. 広島県教育委員会『中小田古墳群』1980
15. 注1に同じ
16. 注1に同じ
17. 注1に同じ



1. 大久保遺跡、2. 西願寺山墳墓群、3. 西願寺北遺跡、4. 大明地遺跡、5. 高陽台A地点遺跡、6. 城前遺跡、7. 金川遺跡、8. 岩上山田遺跡、9. 末光遺跡群C地点、10. 末光遺跡群A地点、11. 末光遺跡群D地点、12. 末光遺跡群E地点、13. 末光遺跡群B地点、14. 山手遺跡群、15. 寺迫遺跡、16. 西山・北山遺跡群、17. 恵下山遺跡群、18. 弘住遺跡群、19. 弘住第1号古墳、20. 中小田古墳群、21. 禅昌寺西遺跡、22. 中山貝塚、23. 毘沙門台遺跡、24. 毘沙門台東遺跡、25. 神宮寺山第1号古墳

第1図 周辺遺跡分布地図



第2図 大久保遺跡遺構配置図 (1)



第3図 大久保遺跡遺構配置図（2）

Ⅲ 遺 構 と 遺 物

1. 遺跡の概要

大久保遺跡は、南西に延びる丘陵上に立地している。丘陵の南東側は、道路建設工事のため削り取られ、旧地形は失われていたが、昭和3年当時の地形図によると、南西方向に延びる丘陵の先端付近で東側の入り込んだ谷に向かって南東方向への枝尾根が派生していたようである。本遺跡の遺構は、調査の結果、北東側に残る尾根上と南西側に残る丘陵先端部の斜面に分布していることを確認した。

このうち北東側に残る尾根から、尾根の東側の谷を望むかたちで営まれた竪穴住居跡5軒、貯蔵穴5基、テラス状遺構2か所を、丘陵先端部の太田川を望む斜面からは、土壇墓35基、土器棺墓4基、テラス状遺構1か所を検出した。遺構内及びその周辺からは、弥生土器、鉄器及び石器が出土した。

2. 遺 構

(1) 住 居 跡

第1号住居跡（第10図）

第1号住居跡は、本遺跡の北西縁辺部に位置し、東向き斜面を掘り込んで造られている。西側で壁が遺存し、検出面までの壁高は西側中央部で最も高く32cmであるが、東側の壁及び床面は流出している。土層の観察より、壁から1.5mの幅で張り床が確認できた。平面プランは1.5m×3.1mの長方形が推定できる。本住居跡に伴うと考えられる柱穴は検出されていない。床面の中央と推定される部分では、炭化物が少量出土し、焼土も検出されているので炉跡と考えられる。

なお、本住居跡からは、遺物は出土していない。土層の観察によって後述する第1号テラス状遺構とは切り合い関係がないことが確認できたため、同時併存の可能性が考えられる。

第2号住居跡（第4図）

第2号住居跡は、尾根上の平坦部北に位置し、第3号住居跡の北西側床面と部分的に切り合っている。第3号住居跡との新旧関係は土層観察の結果、第Ⅲ号住居跡より先行するものと考えられる。

平面プランは円形を呈し、規模は径6.7m（南北）である。

壁溝は、崩れて失われたと考えられる北西部分と第3号住居跡に切られた南東の一部を除くとほぼ全周し、幅4～17cm、深さ3cm程度で、壁高は最高（南側）で43.2cmである。

柱穴と考えられるピットは8か所（P1～P8）ある。いずれも主柱穴と考えられ、底径は18～32cm、ピットの底のレベルは45.03～44.80mである。

床面中央付近からは、深さ44cmの不整形の掘り込みが検出された。周囲の炭化物がみられることやその位置から炉跡と考えられる。

なお、本住居跡に伴うと考えられる遺物は出土していない。

第3号住居跡（第5図）

第3号住居跡は、第2号住居跡の東側に位置し、床面の北西部分が第2号住居跡と切り合っている。

平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は1辺約3mである。壁溝は、第2号住居跡と切り合っている北西部分をのぞくとほぼ全周しており、幅4～15cm、深さ2～6cmである。壁高は最高（南側）で84.2cmである。

柱穴と考えられるピットは4か所（P1～P4）ある。いずれも主柱穴と考えられ底径は15～30cm、ピットの底のレベルは45.06～44.98mである。

床面中央付近からは、深さ6cmの浅い不整形の掘り込みが検出された。掘り込みの埋土中に炭化物がみられることやその位置から炉跡と考えられる。

本住居跡の床面からは、土器（No. 1, No. 2, No. 3, No. 4, No. 5, No. 6, No. 7）、鉄器（No. 47, No. 48）及び石器（No. 52, No. 53）が出土しており、その特徴から本住居跡は、上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。

第4号住居跡（第6図）

第4号住居跡は、尾根上の平坦部最高所に位置している。

平坦プランは、ややいびつであるが隅丸方形を呈し、その規模は1辺2.4m（南西―北西）である。壁溝は、西側と南側に見られ、幅4～11cm、深さ4cm程度で、壁高は最高（南側）で33.8cmである。

柱穴と考えられるピットは4か所（P1～P4）ある。いずれも主柱穴と考えられ、底径は20～33cm、ピットの底のレベルは46.17～46.07mである。

床面中央付近からは、深さ12.8cmの楕円形の掘り込みが検出された。掘り込みの埋土中に炭化物がみられたことやその位置から炉跡と考えられる。

本住居跡の床面からは、土器（No. 8）が出土しており、その特徴からこの住居跡は上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

第5号住居跡（第7図）

第5号住居跡は、第4号住居跡の北西に位置している。

北西側で壁及び床面が一部流失している。平坦プランは隅丸方形と考えられ、規模は1辺4.5m（北東―南西）である。

壁溝は、西側を除く部分に見られ、幅3～11cm、深さ7～11cm程度で、壁高は最高（南側）で30.6cmである。

柱穴と考えられるピットは4か所（P1～P4）ある。いずれも主柱穴と考えられ、底径は15～17cm、ピットの底のレベルは45.87～45.79mである。

床面中央付近からは、深さ15.2cmの不整形の掘り込みが検出された。周囲に炭化物が見られることやその位置から炉跡と考えられる。本住居跡の床面からは土器が出土しているが細片のため図示しえなかった。

(2) 貯蔵穴

第1号貯蔵穴（第8図）

本遺構は、尾根線をはずれた第1号テラス状遺構中に位置する。

底径は1.34～1.45mとなり、底の方が広く断面形は袋状を呈している。この形状から貯蔵穴と考えられる。

本遺構の底部からは、土器（No. 9）が出土しており、その特徴から本遺構は上深川Ⅱ式の時期が考えられる。

第1号テラス状遺構との新旧関係については、本遺構がテラスの壁を意識したと考えられる位置に掘り込まれており、かつテラス床面とのレベル差が約90cmと深くテラスによる削平が想定しがたいため、同時併存の可能性が高いと考えられる。

第2号貯蔵穴（第9図）

本遺構は、尾根線を南東にはずれた第2号テラス状遺構の東側に位置する。

底径は1.38～1.57mであり、断面形が袋状を呈している。この形状から貯蔵穴と考えられる。

なお、本遺構に伴うと考えられる遺物は出土していない。第2号テラス状遺構との新旧関係については、第2号テラス状遺構の埋土が貯蔵穴の検出面にまで延びていたことから、同時併存あるいはそれより先行すると考えられる。

(3) テラス状遺構

第1号テラス状遺構（第10図）

第1号テラス状遺構は、丘陵尾根上平坦面の第3号住居跡から東に約2.5mの位置に立地している。本遺構は、東向き斜面を10～45cm掘り込んで造られており、現状で、北西―南東12.3m、奥行き2.0mの規模を有する。

平坦面からは、6個のピットを検出した。底径は11～38cm、ピットの底のレベルは45.59～44.85mとばらつきがあり、その性格を明らかにすることはできなかった。なお、本遺構に伴うと考えられる遺物は出土していないが、本遺構中には同時併存の可能性が考えられる第1号住居跡と第1号貯蔵穴が営まれている。

第2号テラス状遺構（第11図）

第2号テラス状遺構は、尾根上平坦面を東にはずれた斜面を50～80cm程度掘り込んで造られており現状で、南北10.0m、奥行き約2.0mの規模を有する。

平坦面からは、4個のピットを検出した。底径は18～48cm、ピットの底のレベルは44.27～44.05mであ

る。テラスの壁と位置関係からはP 1－P 3とP 2－P 4の組合せが考えられるが、いずれも底面レベルが不揃いであり規模も異なるため、その性格を明らかにすることはできなかった。

なお、本遺構の床面からは、土器（No.13, No.14, No.15）と砥石（No.50）が出土しており、その特徴から上深川Ⅱ式の時期の遺構であると考えられる。

（4）弥生墳墓群

墳墓は、遺跡の南西側の丘陵先端斜面に密集している。確認できた墳墓は総数39基をかぞえ、うち4基が土器棺墓、その他が木棺葬も含めた土壙であった。なお、墳墓群に伴うと考えられるテラス状遺構が1か所検出されている。

土壙（第12図～第38図）

土壙個々の計算値等については、土壙計測表（表1）に委ねるが、規模によって土壙は大きく2つに分類することができる。Ⅰ類は大型の土壙で、土壙底面の長さ2.00mから2.82mの間で2.5mあたりを中心としたものである。Ⅱ類は小型の土壙で、土壙底面の長さが0.69mから1.40mの間で1.25mあたりを中心としたものである。この土壙の2つのタイプの違いは何を意味しているのか若干の考察を加える。

まず、墳墓群における占地に着目してみると、Ⅱ類の小型の土壙が特定の場所にかたまっているというような状況は認められない。むしろ、Ⅰ類とⅡ類は混在するというあり方を示している。また、Ⅰ類とⅡ類も同じ土壙にあって基本的な構造上の違いはなく、その規模の相違という点にのみ差異を認めることができる。よって、土壙の2つのタイプの存在は、単純に被葬者の体格の違いにもとめられるのではないかと考えられる。つまり、大型のものは大人用の埋葬施設であり、小型のものは小児用の埋葬施設であったと推察される。

土壙のなかには木棺葬が想定できるものがある。D 8では土壙底面より2つの小口穴が検出されている。小口板が側板をはさむタイプの木棺が組まれていたと考えられ、木棺の長さは内法で1.5mと推定される。D 1では、土壙底面より長方形を呈する赤色顔料の分布を観察しており、加えて土壙床面付近の観察によって1.6m×0.4m程度の木棺の痕跡が確認できた。なお、先に分類したⅠ類の大型土壙のなかには、長さが2.5mを越えるようなものがあり、D 1、D 8以外にも木棺葬が行われた可能性は非常に高いと考えられる。

次に、土壙のうち数基からは供献されたと考えられる土器を検出したので簡単にふれておく。D18では、壺形土器（No.25）が土壙北東隅の掘方上面より出土した。壺形土器は、下方へ向けての土圧で割れてはいたものの口縁部はきれいに上を向いたままのほぼ全形を復元できるかたちで出土しており、原位置を保っていたと考えられる。D24では、壺形土器と甕形土器（No.26, No.27, No.28, No.29）が土壙南西側の覆土中より出土した。D38では、壺形土器、甕形土器、鉢形土器（No.33, No.34, No.35, No.36, No.37）が土壙東北側の掘方のラインに沿ったかたちで土壙掘方上面より出土した。大部分が完全に原形をとどめて出土しており原位置を保っていると考えられる。以上のものについては、いずれも各土壙に対して供献された土器であると考えられる。なお、D 9の上面からも原位置のままと考えられるいくつかの土器（No.21, No.22, No.23, No.24）を検出した。これらの土器は、土圧で割れた状態ではあったもののいずれも口縁部が上を向いて出土しており、原位置のままでの出土と考えられる。しかし、土器のレベルがD 9の土壙底面より140cmとかなり高いため、D 9への供献土器とは断定しがたい。

各土壙は密集しており、重複しているものも多い。重複しているものすべてについて新旧の関係を明らかにすることはできなかったが、土層観察によって判断できた部分がある。D 8～D13はそれぞれ重複しているがD13をD12が切っており、そのD12をD11が切っている。D11はD10も切っている。そして、D11とD 8をD 9が切っている。以上をまとめると、D13→D12→D11→D 9の順序で営まれており、D10はD11以前に、D 8はD 9以前に営まれたと考えられる。つまり、D 8～D13の一連の土壙の中ではD 9が一番新しいということになり、かつこの土壙上面からは、出土状況だけでは判断しがたいが供献用と思われる土器を検出している。

土壙のうち2基では、その埋土中から河原石が検出された。D 3では、土壙中央付近の検出しえた掘方上面のレベルから土壙埋土中に13cm埋まる形で、長さ27cmの細長い形の河原石を直立した状態で検出した。D14においても、D 3と同様の河原石が、検出しえた掘方とほぼ同レベルの土壙中央付近から検出された。墳墓群の周囲からの河原石の出土は皆無であり、他からの流れ込みの可能性は極めて低いと考えられる。これらの河原石はその出土状況から墓標石であった可能性が考えられる。

土器棺墓（第39図～第42図）

D 4 は、壺形土器 1 個体（No.40）と器種不明の別個体の胴部から底部にかけて（No.41）を用いた土器棺墓である。壺形土器を棺とし、別個体の胴部下半の破片 1 を内蓋として複合口縁の内側にかぶせ、さらに内蓋と同一個体の胴部から底部にかけての部分を外蓋として口縁全体にかぶせていた。外蓋については、検出時点では土圧で割れていたものの、埋納時には大型の 1 つの破片であったと考えられる。

棺に納められたのは 69cm×43cm の小型の土壙であるが、底面的一部分を楕円形に 7 cm 程度掘り込み、棺の口を若干上に向けて固定するための工夫をこらしている。なお、内蓋と外蓋の間、及び棺の内部からは赤色顔料を検出した。内蓋と外蓋の間の赤色顔料については、内蓋を閉めた段階で直接内蓋に散布されたものと考えられる。

D 15 は、完形の壺形土器 1 個体（No.42）を棺として用いた土器棺墓である。蓋として使用されたと考えられる土器については検出されなかった。棺が納められた土壙については、北西側が流失しているためその規模を明らかにすることはできなかった。土壙底面は、不整円形に十数 cm 掘り込んでおり、D 4 同様に棺に口を若干上向きにして固定するための工夫がみられる。なお、棺の内部からは赤色顔料を検出した。

D 17 は、壺形土器 2 個体（No.43, No.44）を用いている。地山を不整円形に掘り込み、土器の小片を土壙の底部に敷き、その上から比較的大型の破片を蓋としてかぶせる構造になっていた。使用された土器は 2 個体ともに任意の部分が土壙の底部に敷き込まれており、土器の使用部位と使用状況に規則性がみられないことから、2 個体の土器を破碎した後に小型の破片を下に敷き、大型の破片を蓋として使用したと考えられる。

D 35 は、ほぼ完形の壺形土器 1 個体（No.45）を用いた土器棺墓である。口縁部はわずかに複合口縁の屈曲部が存在しているのみであり、埋納時に打ち欠かれた可能性も考えられる。棺は、地山を不整円形に掘り込んだ土壙に据えられており、棺の口を若干上に向けて固定するために大型の礫を用いていた。

なお、D 38 の北西斜面から土器 No.38, No.39 が互いに接するように出土している。ともに壺形土器で胴部の半分が失われている。地山に掘り込むかたちの土壙は検出できなかったが、その出土状況より土器棺の棺材としての使用の可能性が考えられる。

第 3 号テラス状遺構（第 43 図）

第 3 号テラス状遺構は、墳墓群の分布する北西向き斜面上 D 15 より約 4.6m 下方に位置している。本遺構は、斜面に掘り込んで造られており、現状で 1.5m×0.6m の規模を有する。西側は斜面のため流出している。

本遺構の床面からは、土器（No.18, No.19）が出土しており、いずれも丁寧なつくりの壺形土器である。それらの土器に関しては、頸部径が小さいとはいえほぼ完形に復元可能であり土器棺としての使用の可能性が考えられなくはない。しかし、本遺跡で確認された土器棺墓には共通して棺を固定させる工夫がみられるが本遺構にそのような形跡はみられない。このような点から、土器棺墓と断定できないものの何らかの葬送儀礼に関連した遺構であると推定される。

本遺構は、土器の特徴から上深川Ⅲ式（古）の時期の遺構であると考えられる。

3. 遺 物

本遺跡からは、弥生土器、鉄器、石器が出土した。弥生土器の器種は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高坏が確認された。鉄器は、鍬、鎌、斧、石器は、砥石、石斧、石錘である。

(1) 弥生土器・土製品（第 44 図～第 50 図）

弥生土器

個々の土器の詳細については後掲する土器観察表に委ねることとし、ここでは代表的なものについて若干の考察を加えることとする。

集落出土の弥生土器

本遺跡の弥生集落からは、上深川Ⅱ式と上深川Ⅲ式（古）に属すると考えられる土器が出土した。

上深川Ⅱ式の段階のものとしては No.8, No.9, No.10, No.11, No.12, No.13, No.14, No.15 が検出された。口縁端部を平らにおさめ、胴部外面の削りの痕跡が底部付近にみられるなどの特徴を示している。しかし、No.10 以外については、No.9 で代表されるように丸胴化がすすみ、胴部と底部で器厚に

差がなくなるなど形態的には上深川Ⅱ式の中でも上深川Ⅲ式に近い特徴を示している。

上深川Ⅲ式（古）の段階のものとしては、No. 2, No. 3, No. 4, No. 5, No. 6, No. 7が検出された。口縁端部はより薄くなって丸くおさめられ、胴部は丸く張り、全体的な器厚も薄くなっている。

この他に、大型の壺形土器No. 1を検出している。胴部最大径は胴部の中位よりも高い部分に位置し、胴部外面には底部付近にまでヘラ削りが施されている。この土器は、第3号住居跡からNo. 2, No. 3, No. 4, No. 5, No. 6, No. 7と一括で出土したものである。

以上はすべて集落の遺構に伴うものであるが、他に遺構に伴わない土器No. 16, No. 17を第5号住居跡西側斜面より検出している。いずれも口縁端部が粘土貼り付けによって肥厚しており、外面頸部にヘラ状工具による「ノ」の字状の押引紋が施されている。加えて、土器No. 16は肥厚した口縁端部に凹線がめぐっている。このような点はすべて上深川Ⅰ式の特徴である。

墳墓出土の弥生土器

本遺跡の墳墓群からは、多くの土器を検出した。特に大型の壺形土器がまとまってみつかり注目される。以下、大型の壺形土器とその他の土器に分けて検討を加えてみたい。

まず、大型の壺形土器以外の土器をみると、その構成は、集落から多数出土をみる日常用の土器と、当初から墳墓に備えるための目的でつくられたと考えられる精製土器から成ることがわかる。

日常用の土器としては、No. 22, No. 23, No. 24, No. 26, No. 29, No. 33, No. 34, No. 35, No. 36, No. 37が検出された。このうち、No. 22, No. 23, No. 29, No. 33, No. 35に関しては器厚を減じつつ口縁端部を丸くおさめたり、丸胴化したプローションであるなど上深川Ⅲ式（古）の特徴を示している。No. 24, No. 26, No. 34, No. 36, No. 37に関しては、底部の胴部外面にヘラ削りの痕跡が見られたり、口縁端部を平におさめるなど上深川Ⅱ式の特徴を示しているが、いずれもかなり丸胴化がすすんでおり、上深川Ⅱ式のなかでも上深川Ⅲ式に近い特徴を示している。

精製土器としては、No. 20, No. 21, No. 27, No. 28が検出された。これらの土器は器厚が非常に薄く仕上げられ、外面にはヘラ磨き内面にはハケ目がみられる。このうちNo. 27については、櫛歯状工具による平行沈線紋を基調として鋸歯紋や半截竹管によるS字紋で構成されており、装飾法や全体的なプローションも含めて西願寺北遺跡の供献土器との共通性が指摘できる。

精製土器のうち、No. 20, No. 21についてはD 9の土壌上より、日常用のNo. 22, No. 23, No. 24と一括で検出しており上深川Ⅲ式（古）の段階の時期が考えられる。No. 27, No. 28についてはD 24の覆土より日常用の土器No. 26, No. 29と一括で検出しており、上深川Ⅱ式の末から上深川Ⅲ式（古）の段階の時期が考えられる。

以上、日常用の土器と精製土器について時期を検討してみた。次に大型の壺形土器について考えてみたい。

大型の壺形土器については、これまで出土例が極端に少なく、他の種類の土器と一括で出土することが極めて稀であるため、上深川式土器を用いた土器編年における位置付けは明らかにされていない。これまでの例にもれず、本墳墓群で出土した大型の壺形土器においてもその他の土器を共伴したものはなかった。しかし、合計11個体と多くの大型の壺形土器を検出することができた。そして、それら11個体を観察してみると、大きく2つのタイプに分けられることがわかった。

Aタイプ 底は平底で厚く、胴部最大径が胴部の中位より上にあるもの。複合口縁の場合は、口縁屈曲部外面に下垂がみとめられる。（土器No. 30, No. 40, No. 42, No. 43, No. 44, No. 45）

Bタイプ ほとんどが丸底で丸胴化しており、胴部と底部付近の器厚の差がほとんど認められず、胴部最大径はAタイプより低めの胴部中位付近に位置するもの。複合口縁の場合は、口縁立ち上がり部が擬口縁の上に完全に乗るかたちになる。（土器No. 18, No. 19, No. 25, No. 38, No. 39）

このA, B 2つのタイプの特徴は、それぞれ先にふれた上深川Ⅱ式、上深川Ⅲ式の土器の特徴とほとんど合致していることから、大型の壺形土器についても、ほかの器種と同様の編年的位置づけでとらえることとした。

以上、墳墓出土の弥生土器についてその特徴を検討してみたわけだが、全体では上深川Ⅱ式から上深川Ⅲ式（古）の段階の時期と考えられよう。但し、大型の壺形土器の変遷が、その他の土器の変遷と厳密に同時進行するののかという点についてはやはり疑問がないわけではなく、今後の資料の蓄積を期待したい。

土製品

No.46は第2号貯蔵穴埋土中より出土した土製品である。ほぼ正円に近い形状で、中心より若干ずれた位置に円孔を有する。円孔は焼成前の片側穿孔によるものである。直径7.9～8.2cm, 1.3～1.8cm, 孔径9mm, 重さ135kgをはかる。紡錘車である可能性も考えられる。

(2) 鉄器 (第51図)

鋸

No.47は第3号住居跡より出土したものである。木の葉状を呈し、断面は扁平なレンズ状である。現状で身部長3.1cm, 刃部最大幅2.0cmである。茎部は先端を欠いており、残存超.3cmを測り断面は長方形を呈し部分的に木質の付着がみられる。

鎌

No.48は第3号住居跡より出土したものである。身の先端近くの部分のみの出土である。背の厚みは3mm, 残存する最大幅は2.8cmである。

斧

No.49は第3号住居跡埋土中より出土したものである。残存長3.9cm, 刃部幅2.2cmを測る鍛造の有袋鉄斧と考えられる。楕円形の袋部をもつが残存状態はあまりよくない。

(3) 石器 (第51図)

砥石

No.50は第2号テラス状遺構から出土したもので流紋岩製である。欠損した部分を除く4面に使用痕が認められる。各面の擦り減り具合からみてかなり使いこんだものらしい。

No.51は第2号住居跡埋土中から出土したもので泥岩製である。剥落面の縁部が部分的に丸みを帯びていることから、もともとは大型の砥石であったものが、割れた後に小型の砥石として再利用されたと考えられる。3面に使用痕が認められる。各面の擦り減り具合からみてかなり使いこんだものらしい。

No.52は第3号住居跡より出土したもので泥岩製である。もともとは、現在の大きさより大きい砥石として複数面使用されていたものが、割れた後も小型の砥石として再利用されたと考えられる。使用痕は3面に確認でき、そのうち再利用されたのは1面のみと考えられる。

敲石

No.53は第3号住居跡から出土したものである。花崗岩質片磨岩製で断面は丸みをもつ長円形を呈し、長さ16.7cm, 重さ1kgである。両端部がいずれも部分的に欠損しているが、敲打痕が観察でき、敲石と考えられる。

石錘

No.54は第5号住居跡西側斜面より出土した石錘で砂岩製である。平面形は5.4cm×4.0cmの扁平な楕円形を呈する。長軸の両端に打ち欠きがあり、片方の打ち欠きにはひも擦れの跡と考えられる磨減跡がみられる。最大厚1.1cm, 重さは40kgである。

石斧

No.55は墳墓群の北東斜面より出土した両刃の磨製石斧で緑色片岩製である。基部については割れて失われていた。刃部幅4.3cmで、刃部の片側に偏って使用されたと考えられる刃こぼれが観察できる。このような使用状況から、この石斧は縦斧としての使用が考えられる。

Ⅳ ま と め

1 大久保遺跡の弥生集落について

本遺跡からは、弥生集落として住居跡5軒、テラス状遺構2か所、貯蔵穴2基を検出した。以下出土土器をもとに検討を加えつつ集落の営まれた時期について考察してみたい。

第4号住居跡、第2号テラス状遺構、第1号貯蔵穴、第2号貯蔵穴は、それぞれ出土土器から上深川Ⅱ式の段階の遺構であると考えられる。そのうち第2号貯蔵穴の出土土器はやや古い特徴をもっており、同じ上深川Ⅱ式の段階でも他の遺構に先行すると考えられる。

第3号住居跡は、上深川Ⅱ式がⅢ式に移り変わる段階から上深川Ⅲ式（古）の段階にかけての土器を伴っており、本調査で確認された弥生集落遺構のなかではもっとも新しい遺構として位置づけできる。

上深川Ⅱ式の段階の様相を示す土器が出土した各遺構については、同時併存の期間があったと考えられる。また、それらの遺構と第3号住居跡とがごく短期間ではあるが併存した可能性も考えられる。

第1号住居跡、第2号住居跡、第5号住居跡、第1号テラス状遺構については、遺物も出土がなかったが、第1号住居跡と第1号テラス状遺構については、第1号貯蔵穴の同時併存の可能性が高い。また、第2号住居跡は第3号住居跡に先行するため上深川Ⅱ式以前の時期が想定できる。

大久保遺跡において確認できた集落遺構は以上であるが、いずれの遺構も尾根の東側の谷を望むように営まれている。本調査以前に尾根の南東側が道路建設工事のため失われていたが、その部分にも東側の谷を望むかたちで住居等が営まれていた可能性は高いと考えられる。

以上をまとめると、第5号住居跡西側斜面から上深川Ⅰ式の特徴をもつ土器が検出されていることもあり、本集落の上限は、遺構は確認されなかったものの上深川Ⅰ式の段階である可能性が高い。そして、上深川Ⅲ式（古）の段階まで、弥生時代後期全般にわたって継続して営まれたのであろう。

2 大久保遺跡の弥生墳墓群について

大久保遺跡では、39基もの墳墓の存在が確認され、加えて供献土器が検出された。墳墓の数では、西願寺山墳墓群A地点^(注1)の42基につぐものであり、土器によって時期検討のできる新資料を得たという点では大きな成果があり、本調査は、周辺の弥生時代後期を考えるうえでの重要な調査例のひとつとなった。以下墳墓群の営まれた時期をはじめとしたいいくつかの点について検討を加えてみたい。

まず、墳墓の時期についてであるが、供献されていた土器は上深川Ⅱ式がⅢ式に移りかわる段階のものと上深川Ⅲ式（古）段階のものであった。土器棺墓に用いられた土器はいずれも上深川Ⅱ式の特徴を示す。

以上をまとめると、墳墓群の下限は、出土土器と墳墓の切り合い関係から上深川Ⅲ式（古）の時期、弥生時代の終末となるだろう。上限については、供献土器を持たない土壌がどの時期までさかのぼるかについて断定できないが、ひとまず土器棺等に用いられた土器から上深川Ⅱ式の時期としておきたい。

さて、墳墓群のなかの個々の墳墓について注目してみると、墳墓も主軸のとり方にいくつかの傾向のあらわることがわかる。そして、その傾向ごとに墓域内での占地が分かれており、次の3つのグルーピングができる。

Aグループ 主軸を北東方向にとるグループでD1～13、D18、D19からなる。

Bグループ 主軸をAグループよりも北側にとるグループでD14、D17、D20、D21、D24、D25、D27、D32～34、D37からなる。

Cグループ 主軸を北西方向にとるグループでD15、D16、D22、D23、D26、D28～31、D35、D36、D38、D39からなる。

以上の3グループの占地はD19とD20、D30とD32のようにわずかに重複するが、基本的には一定の墓域を意識したと考えられる墳墓群形成がなされている。

墳墓群におけるこれら3つのグループの成立はどのような要因によるものなのであろうか。以下、各グループごとにその内容を整理してみる。

Aグループは、大型土壌11基、小型土壌3基、土器棺墓1基からなる。D18からは供献用の土器が検出されている。またD9の上面からも土器が検出されている。

Bグループは、大型土壌7基、小型土壌1基、土器棺墓1基、規模不明の土壌2基からなる。D24からは供献用の土器が検出されている。

Cグループは、大型土壙4基、小型土壙6基、土器棺墓2基、規模不明の土壙1基からなる。D38からは供献用の土器が検出されている。

以上のように各グループとも、大・小の土壙墓及び土器棺墓で構成されており、供献土器を伴出した土壙墓が存在する。グループ形成の要因については、それぞれ弥生時代後期中葉から終末にかけて併行して営まれたと考えられるため、時期差によるとは考え難く、集団の相違を反映していると考えられる。そのような場合、それぞれ均等な構成を示しており、小児用、乳幼児用の墳墓を含んでいることから、グループを形成したのは何らかの血縁関係で結ばれた集団であったと考えられる。また、この3つの集団の関係についても、全体にまとまって1つの墳墓群を形成しており、集団間に何らかの強い結びつきが存在したことを予想させる。

最後に、集落と墳墓群の関係であるが、集落の終末を示す土器と墳墓群に供献された土器の時期が共に上深川Ⅲ式（古）の時期で重なるため集落の住人が墳墓群に埋葬された可能性は高いと考えられる。

3 太田川下流域の弥生後期の墓制について

大久保遺跡の墳墓群は、この地域の墓制のなかでどのように位置付けすることができるのであろうか。

当地域における弥生時代後期の墓制を考えた場合、墳墓の形態によって次の3種類に分けることができる。

1つめは、共同墓地としての形態をとるもので、例としては42基もの墳墓が確認された西願寺山墳墓群A地点をあげることができ太田川下流域で最も一般的な形態である。2つめは、特定集団を区別して厚葬する形態をとるもので、例としては西願寺山墳墓群C地点をあげることができる。^(注2) 3つめは、特定個人に対する厚葬する形態をとるもので、西願寺北遺跡^(注3)をあげることができる。これらは、いわゆる弥生時代の共同墓地から、古墳に代表されるような特定個人墓が析出してゆく過程をあらわしていると考えられる。

時期的にみれば、西願寺山墳墓群A地点の場合、出土遺物がほとんど検出されていないため時期を明確にとらえることができない。西願寺山墳墓群C地点では、供献土器として上深川Ⅱ式の新しい段階の土器と上深川Ⅲ式（古）の段階の土器が出土している。^(注4) これらの土器に関しては墳墓群の下限に近い時期のものであるとする指摘もなされている。西願寺北遺跡では供献用の土器が検出されており、大久保遺跡墳墓群出土の精製土器、大形の壺形土器と器形や沈線紋を用いた装飾法が類似しているものもあり、上深川Ⅲ式（古）の時期が考えられる。大久保遺跡の場合、血縁関係で結ばれていたのであろうと想定される集団を意識した墳墓形成はみられるものの、それらはあくまでも均質な集団どうしが複数集まって共同で造墓しているのであり、根本的なあり方としては、西願寺山墳墓群C地点的というよりもむしろ西願寺山墳墓群A地点的といえるだろう。

太田川下流域においては、上深川Ⅲ式（古）の段階で、墳墓に3つの形態がみられるが、次の上深川Ⅲ式（新）の段階になると、西願寺山墳墓群C地点や大久保遺跡でみられた集団墓という墳墓形態の丘陵上においては、見られなくなるようである。これらに続く時期の墳墓としては、弘住第3号古墳、城ノ下第6号古墳^(注6)などの古墳があげられるのみである。そのような状況において、今回も調査は弥生から古墳へと変化する時期の広島^(注5)の状況を知るための貴重な資料を提供したといえよう。

注

1. 広島県教育委員会『西願寺遺跡群』1974
2. 注1に同じ
3. 石田彰紀 「中山の歴史のあけぼの」
4. 妹尾周三 「広島県太田川下流域の竪穴式石室」『古文化談叢』第23集 1990
5. 広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983
6. 財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』1991

表 1 大久保遺跡土壌計測表

土壌番号	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深さ (cm)	主軸の方位	備 考
1	257	98	100	N82° W	赤色顔料散布
2	207	78	55	N76° E	
3	255	113	70	N64° E	
4	69	43	98	N72° E	土器棺墓、赤色顔料散布
5	242	97	112	N32° W	
6	119	-	36	N64° E	
7	-	59	70	N62° E	
8	217	-	-	N74° E	
9	242	100	-	N53° E	
10	256	-	-	N49° E	
11	269	110	-	N48° E	
12	137	35	-	N47° E	
13	237	70	37	N32° E	赤色顔料散布
14	248	112	90	N28° E	
15	-	-	66	-	土器棺墓
16	139	56	33	N35° E	
17	-	-	80	-	土器棺墓
18	241	103	56	N50° W	
19	282	99	97	N39° E	
20	243	91	76	N10° E	赤色顔料散布
21	140	52	44	N8° E	
22	(155)	73	56	N70° W	
23	200	89	71	N71° W	
24	270	86	98	N32° E	
25	-	-	20	N18° W	
26	101	30	58	N78° W	
27	(160)	84	69	N42° E	
28	126	64	50	N21° E	
29	-	99	50	N86° W	
30	118	62	54	N86° W	
31	-	82	36	N60° W	
32	243	88	59	N31° E	
33	206	48	56	N15° E	
34	-	-	-	-	
35	-	-	98	-	土器棺墓
36	-	-	48	-	
37	-	-	20	N62° W	
38	250	(95)	77	N33° W	
39	-	44	54	N63° W	

表 2 大久保遺跡出土器観察表

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器 形	調整・成形	備 考
1	第3号住居跡	壺	胴部最大径 36.7 底径 7.2	口縁部は外反しながら立ち上がる。 頸部には刻目格子の貼付突帯をめぐらす。 胴部は倒卵形を呈する。 底部は平底。	外面 ハケ目 内面 口縁部ナデ、以下ハケ目	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻
2	第3号住居跡	不明		口縁部は外反して立ち上がり端部は平たくおさめる。	外面 ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 褐色 胎土 粗 焼成 良
3	第3号住居跡	甕	口径 15.4 胴部最大径 17.0	口縁部は「く」の字状に立ち上がり端部は丸くおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り後磨き 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 褐色 胎土 粗 焼成 良
4	第3号住居跡	鉢	口径 10.4 底径 3.8 器高 7.1	胴部から口縁部へかけてやや内湾ぎみに立ち上がり端部は丸くおさめる。	外面 ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 赤褐色 胎土 やや密 焼成 堅緻
5	第3号住居跡	甕	口径 18.0 胴部最大径 17.3	口縁部はやや内湾ぎみに外側へ立ち上がり端部は平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 やや軟 胴部にスス付着
6	第3号住居跡	甕	口径 15.5 胴部最大径 16.9	口縁部はやや内湾ぎみに外側へ立ち上がり端部は平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 赤褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟 胴部に黒斑
7	第3号住居跡	甕	口径 22.7 胴部最大径 29.0	口縁部は丸みをおびて外反し端部は丸くおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部ナデ、以下磨減が著しく不明	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 やや軟 胴部にスス付着
8	第4号住居跡	不明	底径 3.2	底部は平底。	外面 ヘラ削り後ナデ 内面 磨減が著しく不明	色調 明褐色 胎土 やや粗 焼成 良 内部にスス付着
9	第1号貯蔵穴	壺	口径 13.0 胴部最大径 23.9 底径 7.2 器高 26.8	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。 胴部は反球状にはりだす。 底部は平底。	外面 ハケ目 内面 口縁部ハケ目、屈曲部ナデ、以下ヘラ削り	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 軟

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器 形	調整・成形	備 考
1 0	第2号貯蔵穴埋土中	壺	口径 12.4 胴部最大径 11.8 底径 4.9 器高 10.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸くおさめる。 底部は平底。	外面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 橙褐色 胎土 粗 焼成 軟
1 1	第2号貯蔵穴埋土中	不明	底径 3.0	底部は凹底。	外面 磨滅が著しく不明 内面 ヘラ削り	色調 赤褐色 胎土 粗 焼成 軟
1 2	第2号貯蔵穴埋土中	不明		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面 ナデ 内面 磨滅が著しく不明	色調 褐色 胎土 粗 焼成 軟
1 3	第2号テラス状遺構	壺	口径 13.5	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 橙褐色 胎土 粗 焼成 軟
1 4	第2号テラス状遺構	不明	底径 6.2	底部は平底。	外面 ヘラ削り後ハケ目 内面 ヘラ削り	色調 橙褐色 胎土 粗 焼成 良
1 5	第2号テラス状遺構	壺	口径 15.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。	外面 口縁部ナデ、以下磨滅が著しく不明 内面 口縁部磨滅が著しく不明、以下ヘラ削り	色調 橙褐色 胎土 粗 焼成 軟
1 6	第5号住居跡西側斜面	不明	口径 17.5	「く」の字状に外反する口縁端部を上下に拡張し、凹線2本をめぐらす。	外面 ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り 口縁下部にヘラ状工具による押引紋を施す。	色調 暗褐色 胎土 粗 焼成 堅緻
1 7	第5号住居跡西側斜面	不明	口径 22.9	「く」の字状に外反する口縁端部を上下に拡張。	外面 ナデ、頸部に指頭圧痕あり。 内面 口縁部ナデ、頸部ハケ目、以下ヘラ削り 口縁下部に櫛歯状工具による刺突紋を施す。	色調 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 堅緻
1 8	第3号テラス状遺構	壺	胴部最大径 43.6 底径 9.3	外反する口縁に内湾ぎみに立ち上がり部が接合する複合口縁。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目 内面 頸部ハケ目、以下ヘラ削り、屈曲部に指頭圧痕あり 口縁立ち上がり部に櫛歯状工具による波状紋を、肩部に3段の波状紋、櫛描紋を施す。	色調 褐色 胎土 密 焼成 良 胴部に黒斑

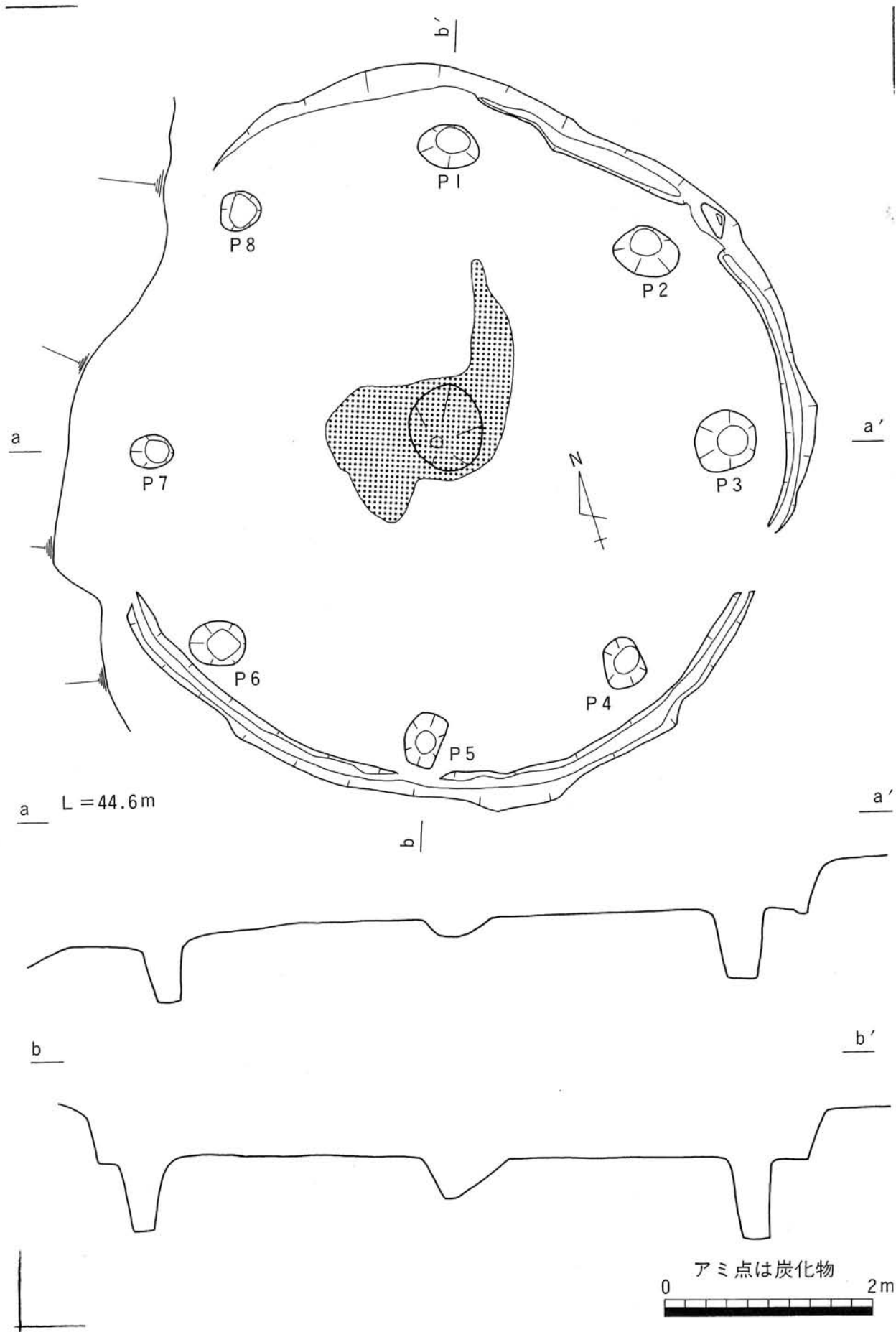
番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器 形	調整・成形	備 考
19	第3号テラス状遺構	壺	口径 16.0 胴部最大径 26.9 底径 5.2 器高 37.5	外反する口縁に内湾ぎみに立ち上がり部が接合する複合口縁で端部は丸くおさめる。 底部は丸底に近い平底。	外面 口縁部ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部ナデ、頸部に指頭圧痕あり、以下ヘラ削り 口縁立ち上がり部に櫛歯状工具による2段の波状紋を、肩部に1段の波状紋を施す。	色調 淡褐色 胎土 粗 焼成 軟
20	D3北側斜面	壺	口径 9.2 胴部最大径 12.2 器高 14.1	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はヘラ状工具で下方に肥厚させる。	外面 ハケ目後ヘラ磨き 内面 ハケ目、屈曲部に指頭圧痕あり	色調 橙褐色 胎土 密 焼成 良 底部に黒斑
21	D9上面	壺	口径 17.4 胴部最大径 18.2 器高 15.0	「く」の字状に外反する口縁端部を上下に拡張し、凹線2本をめぐらす。	外面 口縁部ハケ目後ナデ、胴部上半ハケ目後ヘラ磨き、胴部下半ヘラ磨き 内面 口縁部ヘラ磨き、屈曲部に指頭厚痕、胴部上半ハケ目、胴部下反ヘラ削り後ナデ	色調 橙褐色 胎土 密 焼成 良
22	D9上面	鉢	口径 10.8	口縁部は内湾ぎみに立ち上がり端部は平たくおさめる。	外面 ヘラ削り後ヘラ磨き 内面 ナデ、指頭圧痕あり	色調 淡褐色 胎土 粗 焼成 良
23	D9上面	鉢	口径 20.9	口縁部は内湾ぎみに立ち上がり端部は平たくおさめる。	外面 ハケ目後ナデ 内面 ハケ目後ナデ	色調 橙褐色 胎土 密 焼成 良
24	D9上面	鉢	口径 10.8	口縁部は内湾ぎみに立ち上がり端部は平たくおさめる。	外面 ヘラ削り後ナデ 内面 ヘラ削り後ナデ	色調 淡褐色 胎土 やや粗 焼成 良
25	D18堀方上面	壺	口径 35.6 胴部最大径 42.8	口縁部はラッパ状に大きく開きながら立ちあがり、口縁部を下方に拡張させ平たくおさめる。	外面 ハケ目、頸部以下ヘラ磨き 内面 口縁部ナデ、以下ハケ目 口縁部にはヘラ状工具による鋸歯紋が施されている。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 堅緻
26	D24覆土中	甕	口径 9.9 底径 4.0 器高 13.0	口縁部は「く」の字状に外反し端部は平たくおさめる。 底部は凹底。	外面 ナデ、頸部に指頭圧痕 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り	色調 褐色 胎土 やや粗 焼成 堅緻 胴部に黒斑

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器 形	調整・成形	備 考
27	D24覆土中	壺	口径 8.8 胴部最大径 16.6	口縁部は直立ぎみに上外方に開き、端部は丸くおさめる。	外面 丁寧なナデ 内面 口縁部ナデ、以下ハケ目、指頭圧痕あり 口縁部外面には櫛描紋ほか、ヘラ状工具と櫛歯状工具による鋸歯紋、櫛歯状工具による列点紋半截竹管によるS字状の施紋がみられる。	色調 褐色 胎土 密 焼成 良
28	D24覆土中	壺	口径 9.0 胴部最大径 13.5	口縁部は外反ぎみに立ち上がり端部は平たくおさめる。	外面 口縁部ハケ目、以下ヘラ磨き 内面 口縁部ナデ、以下ハケ目、屈局部はナデ、指頭圧痕あり	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良
29	D24覆土中	壺	胴部最大径 13.2 底径 3.3	胴部は強く張り出る。 底部は平底。	外面 ヘラ磨き 内面 胴部上半ナデ、指頭厚痕あり 胴部下半一部ハケ目、磨減が著しい	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 やや軟
30	D18西側斜面	壺	胴部最大径 34.1 底径 6.5	外反する口縁に立ち上がり部が接合する複合口縁。 頸部に張付突帯をめぐらす。	外面 立ち上がり部ナデ、以下ハケ目 内面 口縁部ハケ目後ナデ、屈局部指頭厚痕あり、以下胴部上半指頭ナデ、胴部下半磨減が著しい不明 頸部の貼付突帯にはヘラ状工具による押引紋を施す。	色調 淡褐色 胎土 密 焼成 堅緻
31	D18西側斜面	不明	底径 4.9	底部は平底。やや丸みをおびて胴部が立ち上がる。	外面 ヘラ削り後ナデ 内面 ヘラ削り	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻
32	D24東側斜面	高坏	口径 18.8 底径 12.0 器高 11.6	口縁部は外反し端部は丸くおさめる。 杯部には明瞭な段を有する。 脚部は緩やかに開き端部は丸くおさめる。脚部には4ヵ所の円孔が見られる。 坏部と脚部の接合は差込み手法による。	外面 杯部ヘラ磨き、脚部ハケ目 内面 杯部ヘラ磨き、脚部ハケ目	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 堅緻

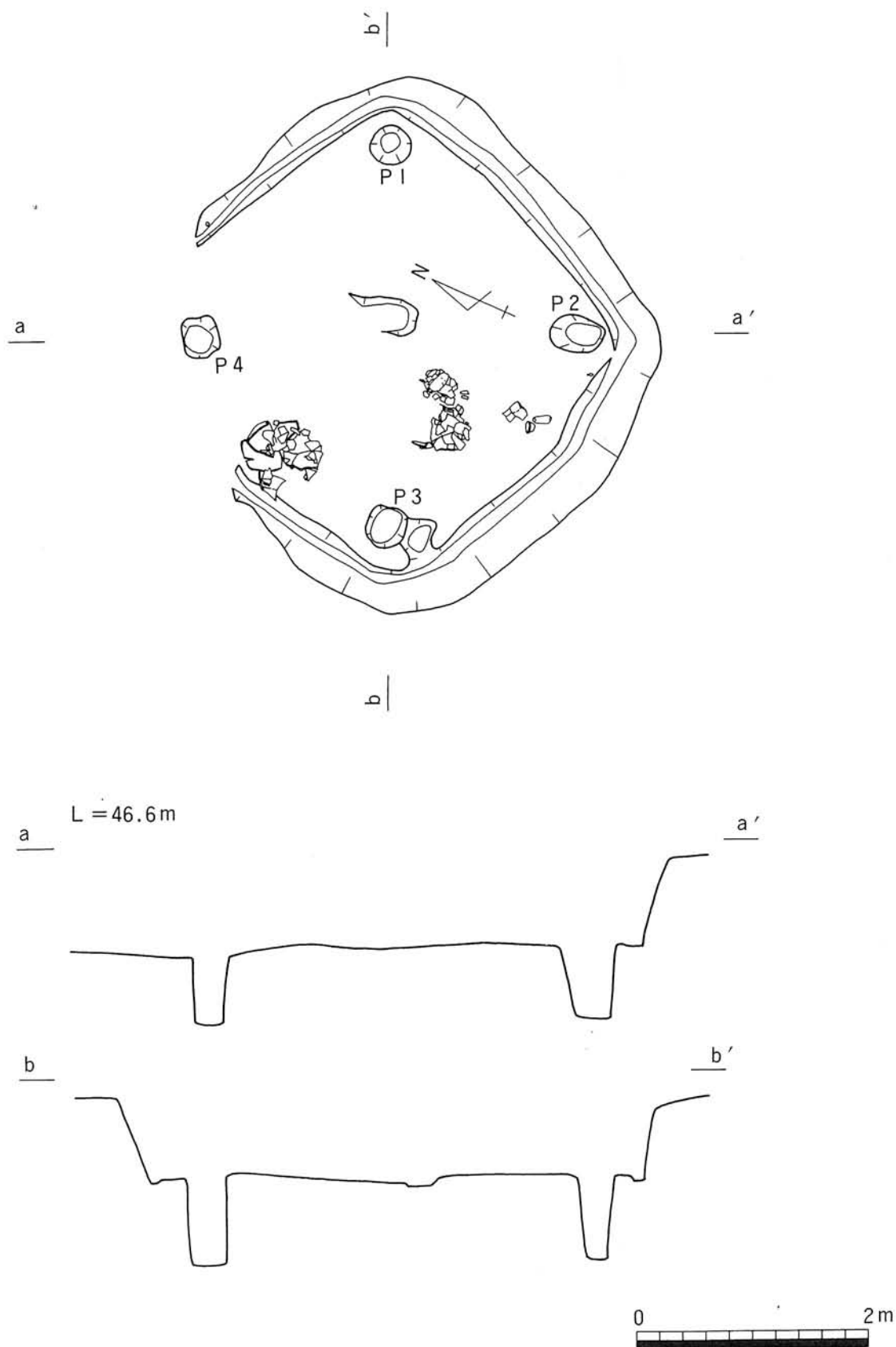
番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器 形	調整・成形	備 考
3 3	D3 8 堀 方上面	甕	口径 11.0 胴部最大径 14.0 底径 4.7 器高 15.6	口縁部は「く」の字 状に外反し、端部は 平たくおさめる。 底部は平底。	外面 ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下 ヘラ削り	色調 褐色 胎土 粗 焼成 良 内面底部にス ス付着
3 4	D3 8 堀 方上面	鉢	口径 25.6 底径 10.8 器高 18.9	口縁部は内湾ぎみに 立ち上がり端部は丸 くおさめる。 底部は平底。	外面 口縁部ヘラ削り後 ナデ、以下ヘラ削 り後ハケ目 内面 口縁部ナデ指頭圧 痕あり、以下ヘラ 削り	色調 暗褐色 胎土 やや粗 焼成 良
3 5	D3 8 堀 方上面	壺	口径 9.2 胴部最大径 12.1 器高 15.0	口縁部は外湾ぎみに 立ち上がり端部は丸 くおさめる。 底部は丸底。	外面 口縁部ハケ目、以 下ヘラ削り後ハケ 目 内面 口縁部ハケ目、屈 局部ナデ、指頭圧 痕あり胴部上半ハ ケ目、胴部下半ヘ ラ削り後ハケ目	色調 褐色 胎土 密 焼成 良 底部に穿孔あ り
3 6	D3 8 堀 方上面	不明	胴部最大径 13.2 底径 3.4	底部は平底。	外面 ヘラ削り後磨き 内面 ヘラ削り	色調 褐色 胎土 粗 焼成 良
3 7	D3 8 堀 方上面	壺	口径 9.6 胴部最大径 18.2 底径 6.4 器高 26.5	口縁部は内湾ぎみに 立ち上がり端部は丸 くおさめる。 底部は平底。	外面 口縁部ナデ、以下 ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下 ヘラ削り指頭厚痕 あり	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻
3 8	D3 8 北 西斜面	壺	口径 16.5 胴部最大径 34.9	口縁部は「く」の字 状に外反し内傾ぎみ の立ち上がり部が続 く複合口縁で端部は 平たくおさめる。 口縁屈曲部に上下2 段の刻目格子の貼付 突帯をめぐらす。	外面 立ち上がり部ナ デ、以下ハケ目 内面 口縁部端ナデ、以 下ハケ目、指頭圧 痕あり 口縁立ち上がり部にヘラ 状工具による鋸歯紋と櫛 歯状工具による4条の歯 状紋を、下段口縁端部に ヘラ状工具による刻目格 子を施す。	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻
3 9	D3 8 北 西斜面	壺	胴部最大径 41.6 底径 7.0	胴部は倒卵形を呈す る。 底部は平底。 口縁屈曲部に刻目格 子の貼付突帯をめぐ らす。	外面 ハケ目 内面 ハケ目、指頭圧痕 あり	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻

番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器 形	調整・成形	備 考
4 0	D 4	壺	口径 20.2 胴部最大径 43.2 底径 10.0 器高 62.4	外反する口縁に立ち上がり部が接合する複合口縁で端部は平たくおさめる。 口縁立ち上がり部と頸部に貼付突帯をめぐらす。	外面 立ち上がり部ナデ、以下頸部までヘラ磨き、頸部以下ナデ 内面 口縁部ヘラ磨き、以下磨減が著しく不明 口縁立ち上がり部には、櫛描紋とヘラ状工具による2条を単位とした縦方向の沈線紋、口縁立ち上がり部と頸部の貼付突帯にはヘラ状工具による刻み、頸部に櫛描紋、肩部に波状紋を施す。	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻 胴部に黒斑あり
4 1	D 4	不明	底径 10.4	底部は平底。	外面 ヘラ削りのちハケ目 内面 磨減が著しく不明	色調 褐色 胎土 やや粗 焼成 堅緻
4 2	D 1 5	壺	口径 13.2 胴部最大径 35.1 底径 9.5 器高 46.6	口縁部は「く」の字状に外反し内傾ぎみの立ち上がり部が続く複合口縁で端部は平たくおさめる。	外面 立ち上がり部ナデ、以下ハケ目、のち部分的にヘラ磨き 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り、口縁立ち上がり部と頸部に指頭圧痕あり 口縁立ち上がり部には3条を単位とした櫛歯状工具による縦方向の沈線紋、頸部の粘土つまみ出しにはヘラ状工具で刻目を施す。	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻 胴部に黒斑あり
4 3	D 1 7	壺	口径 13.2 胴部最大径 24.4 底径 6.7 器高 27.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平たくおさめる。 底部は平底。	外面 口縁端部ナデ、以下ハケ目、頸部ナデ、以下ハケ目後粗いヘラ磨き、底部ヘラ削り後ヘラ磨き 内面 ハケ目後ナデ、以下ヘラ削り、指頭圧痕あり	色調 橙褐色 胎土 やや粗 焼成 堅緻 胴部に黒斑あり
4 4	D 1 7	壺	口径 13.3 胴部最大径 26.6 底径 6.2 器高 38.8	口縁部は緩やかに外反し、端部は平たくおさめる。 底部は平底。	外面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、以下ヘラ削り、頸部に指頭厚痕あり	色調 褐色 胎土 やや粗 焼成 やや軟

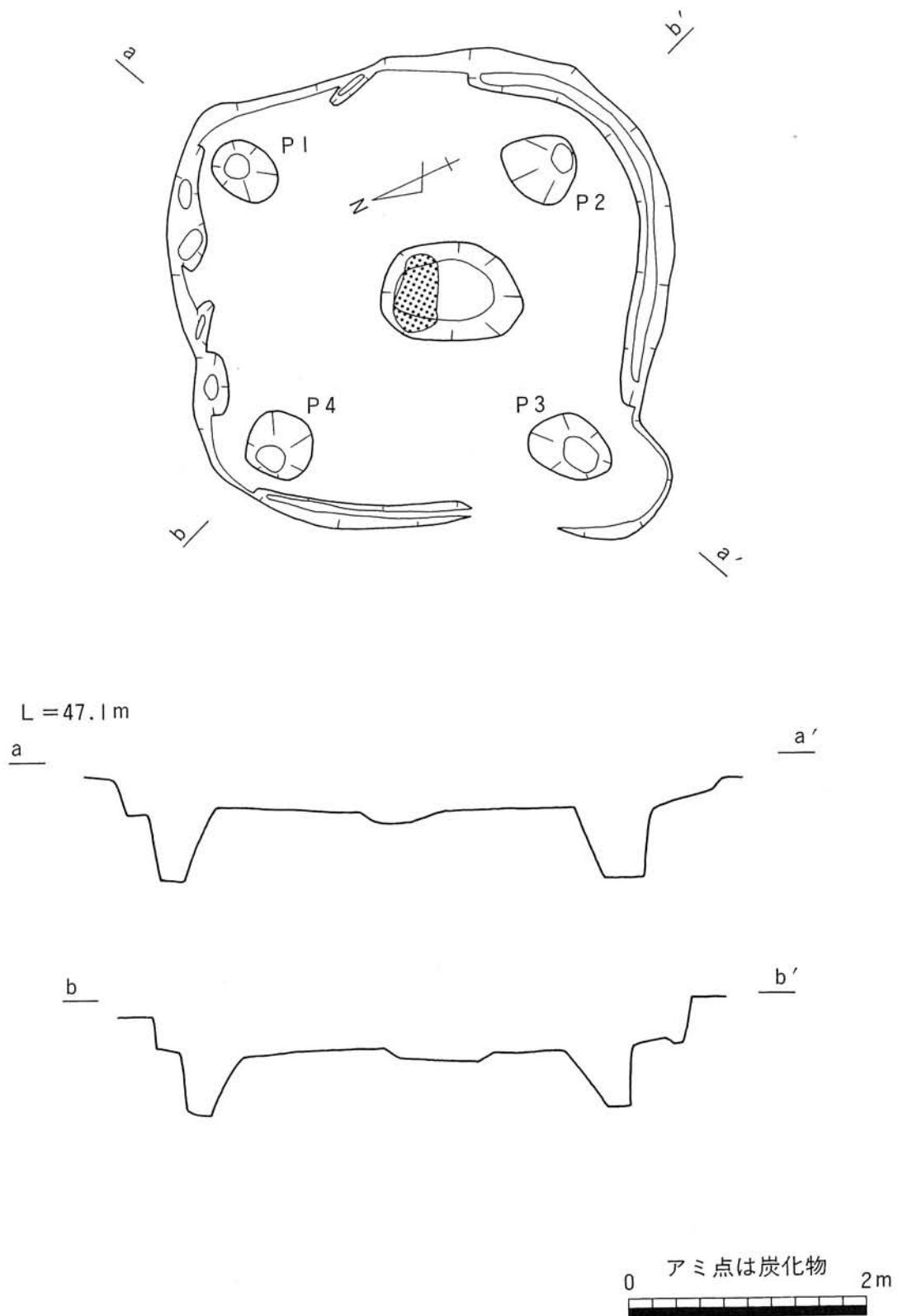
番号	出土位置	器種	法量 (cm)	器 形	調整・成形	備 考
4 5	D 3 5	壺	胴部最大径 62.2 底径 13.8	口縁部は「く」の字 状に外反する。 底部は平底。	外面 ヘラ削り後ナデ 内面 口縁部ナデ、頸部 に指頭圧痕あり、 肩部指頭ナデ、以 下ハケ目	色調 褐色 胎土 密 焼成 堅緻



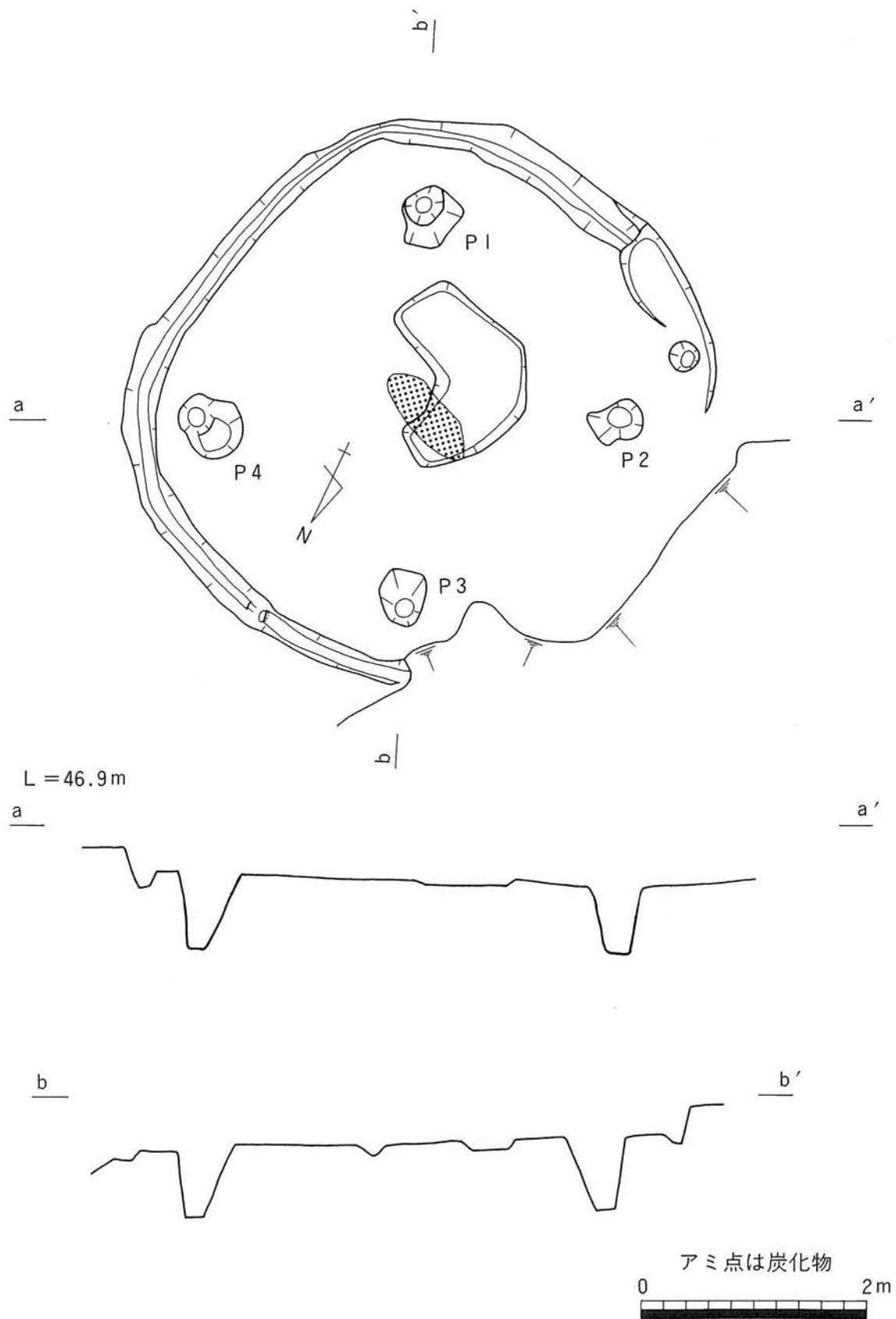
第4図 第2号住居跡実測図



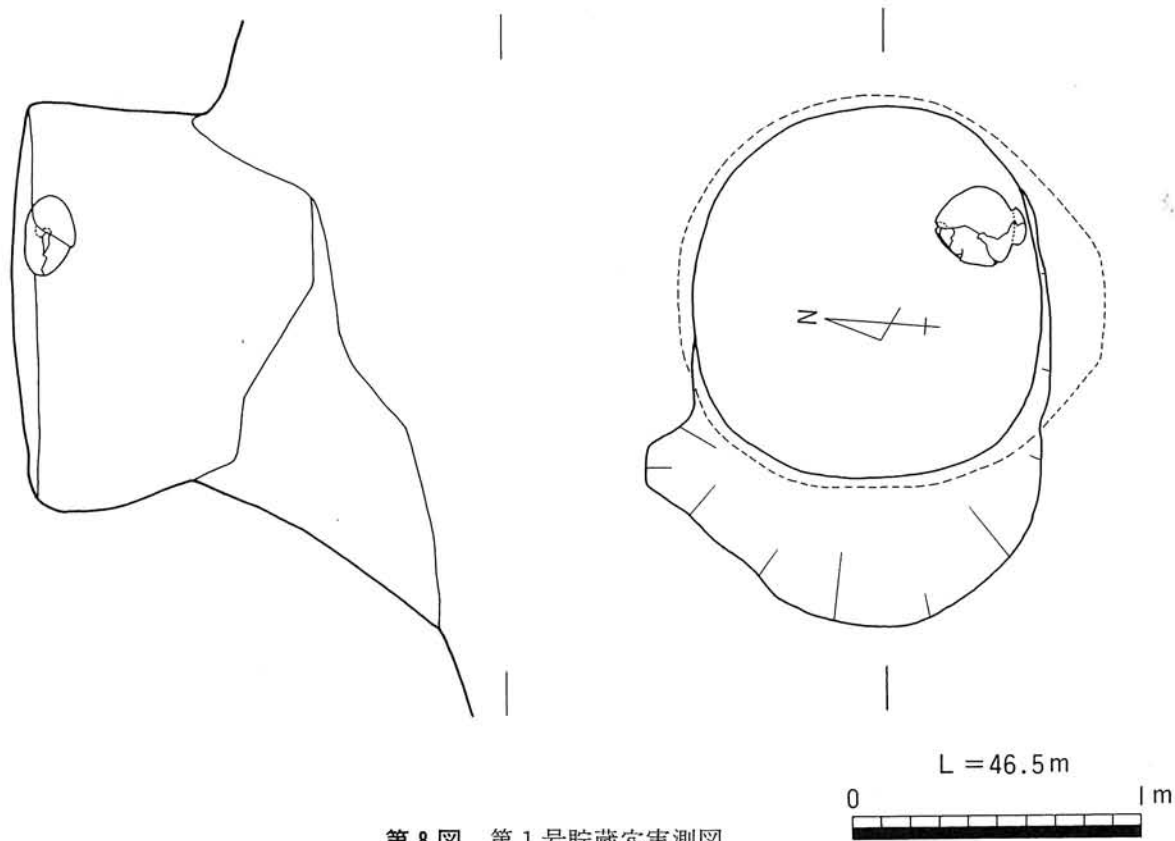
第5図 第3号住居跡実測図



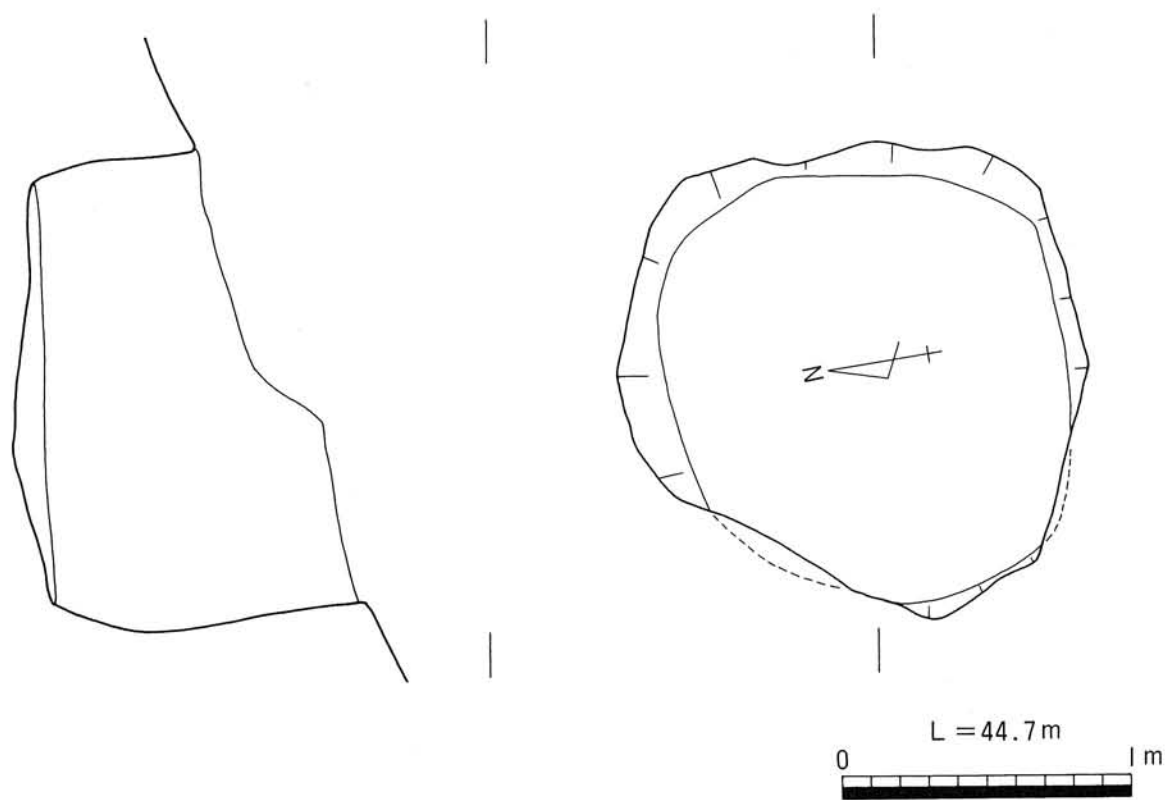
第 6 図 第 4 号住居跡実測図



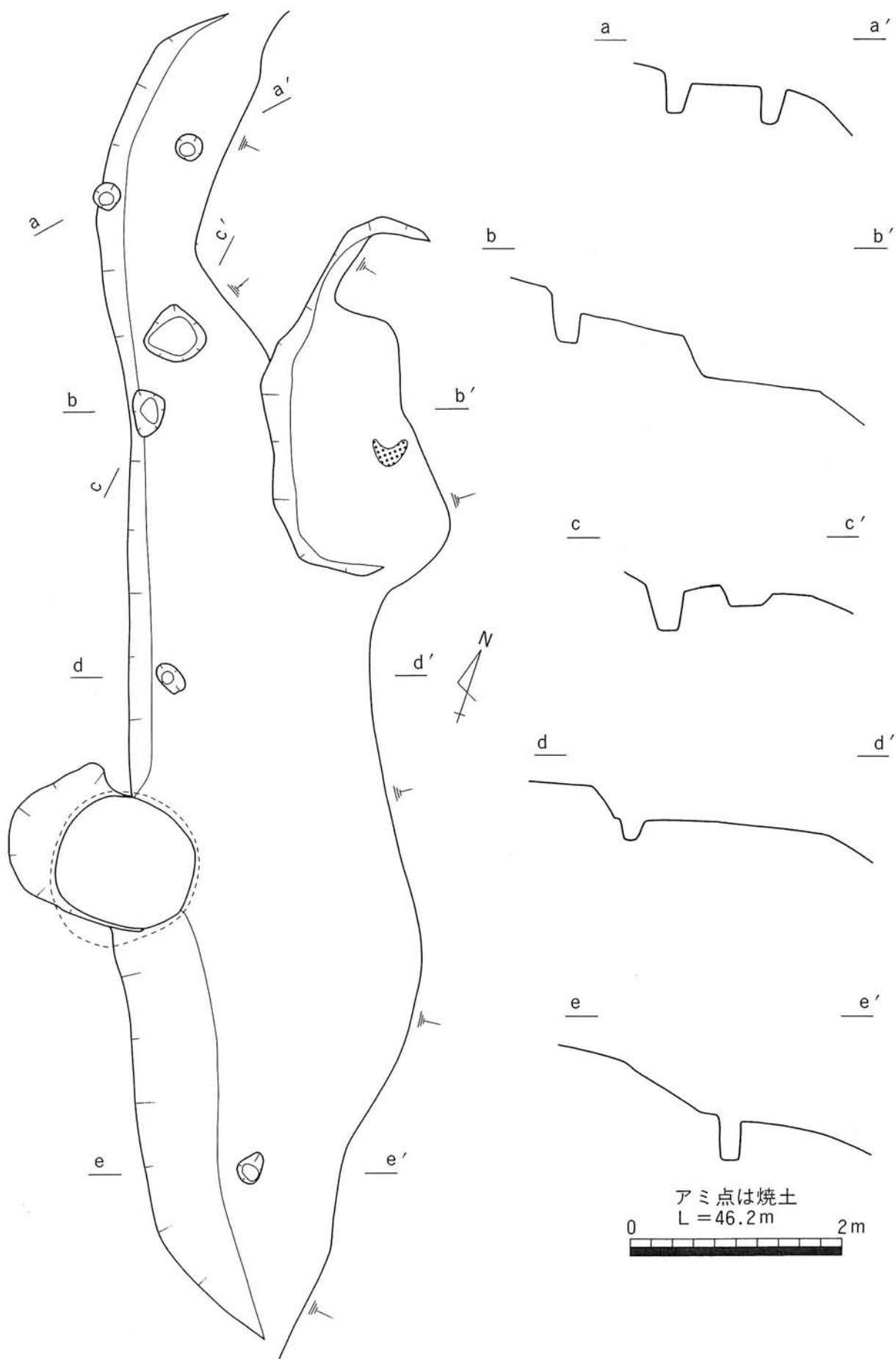
第7図 第5号住居跡実測図



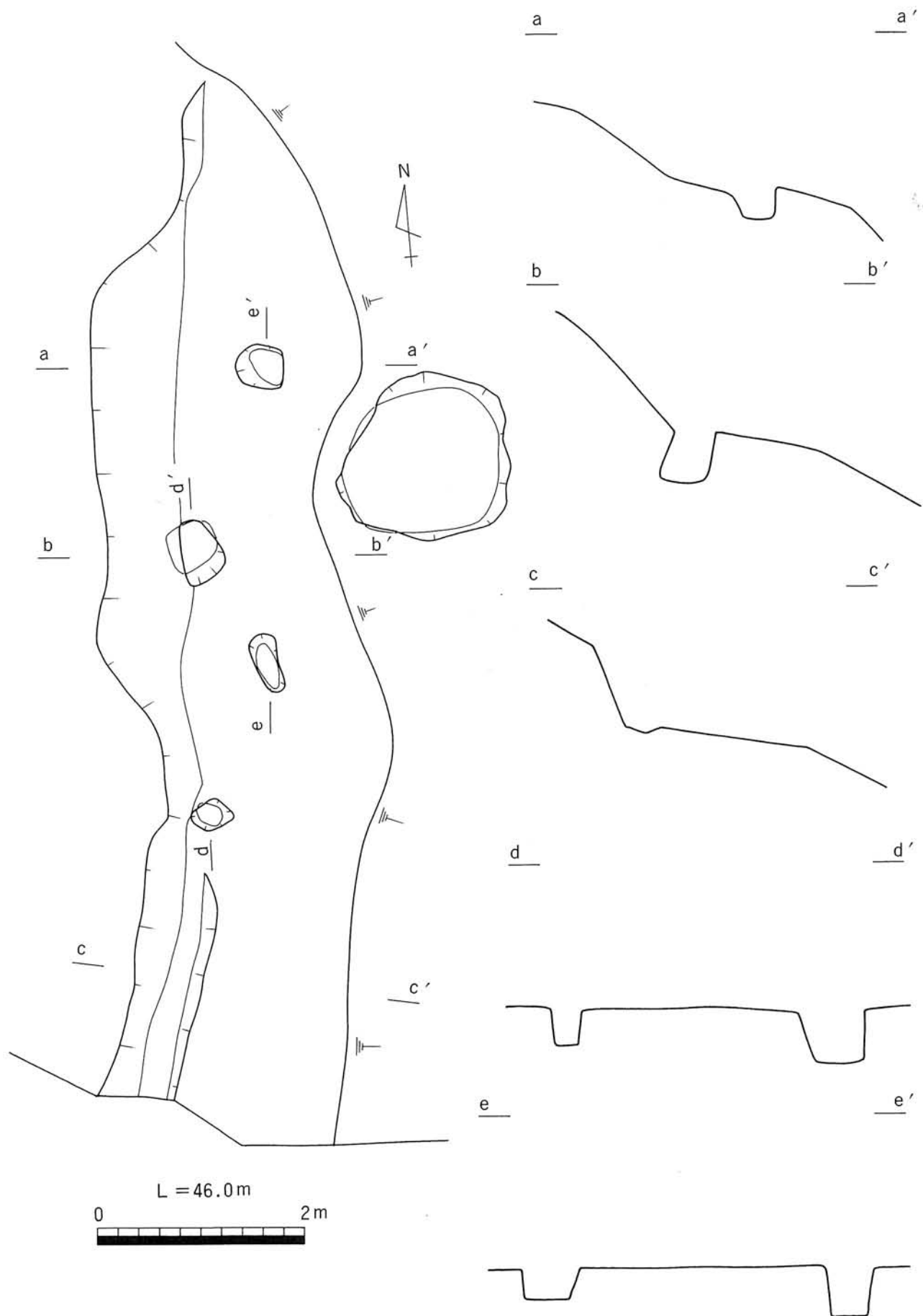
第 8 图 第 1 号貯藏穴実測図



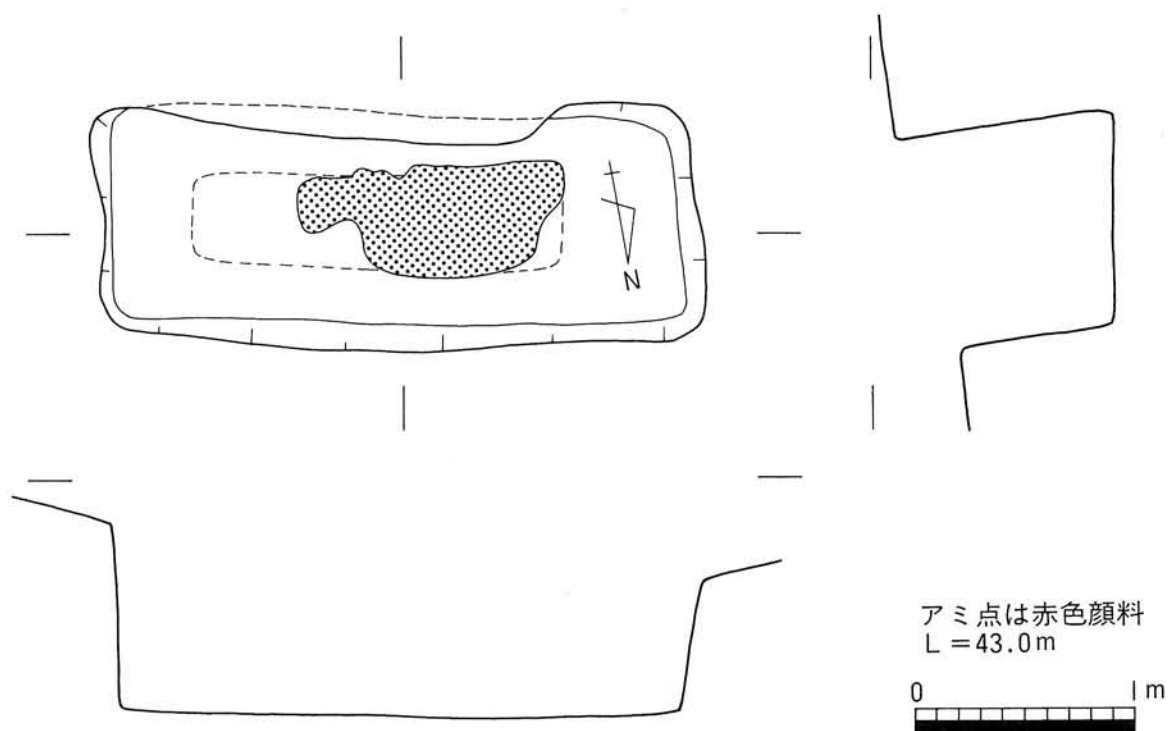
第 9 图 第 2 号貯藏穴実測図



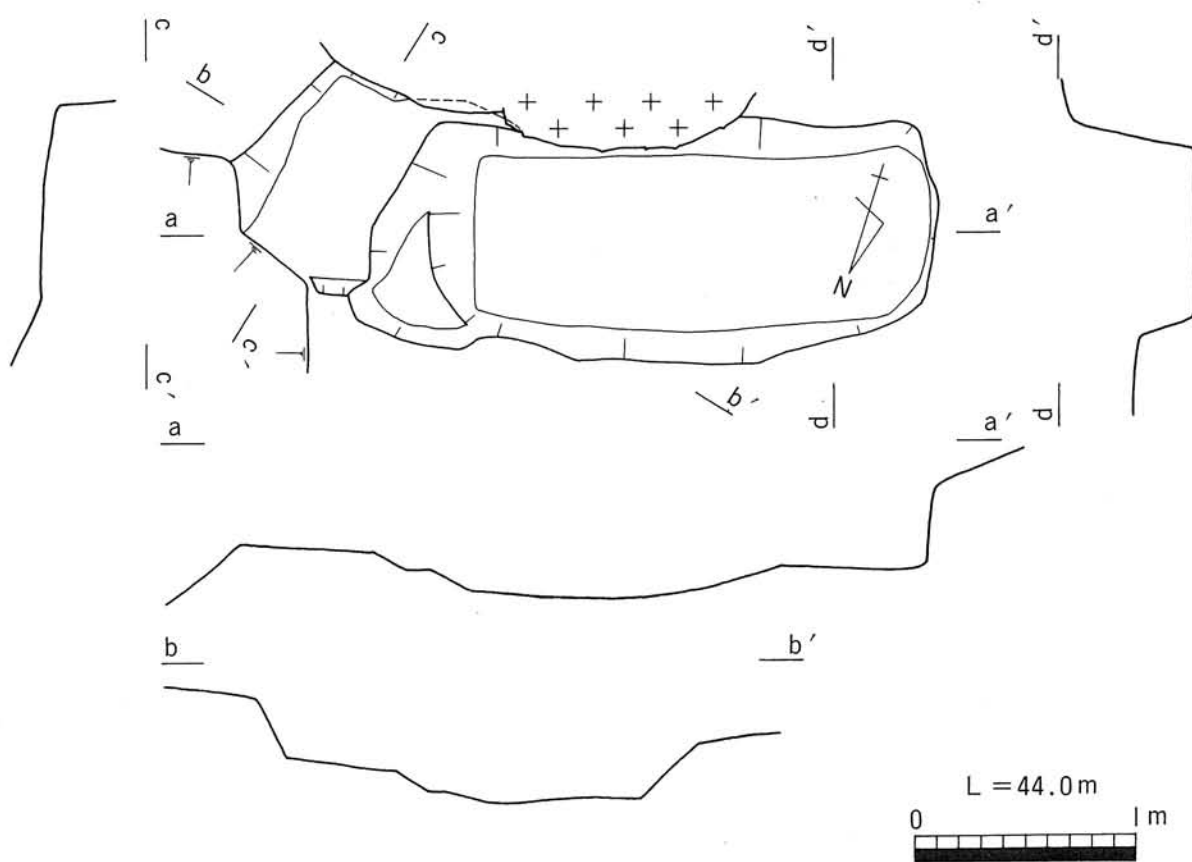
第10図 第1号住居跡・第1号テラス状遺構実測図



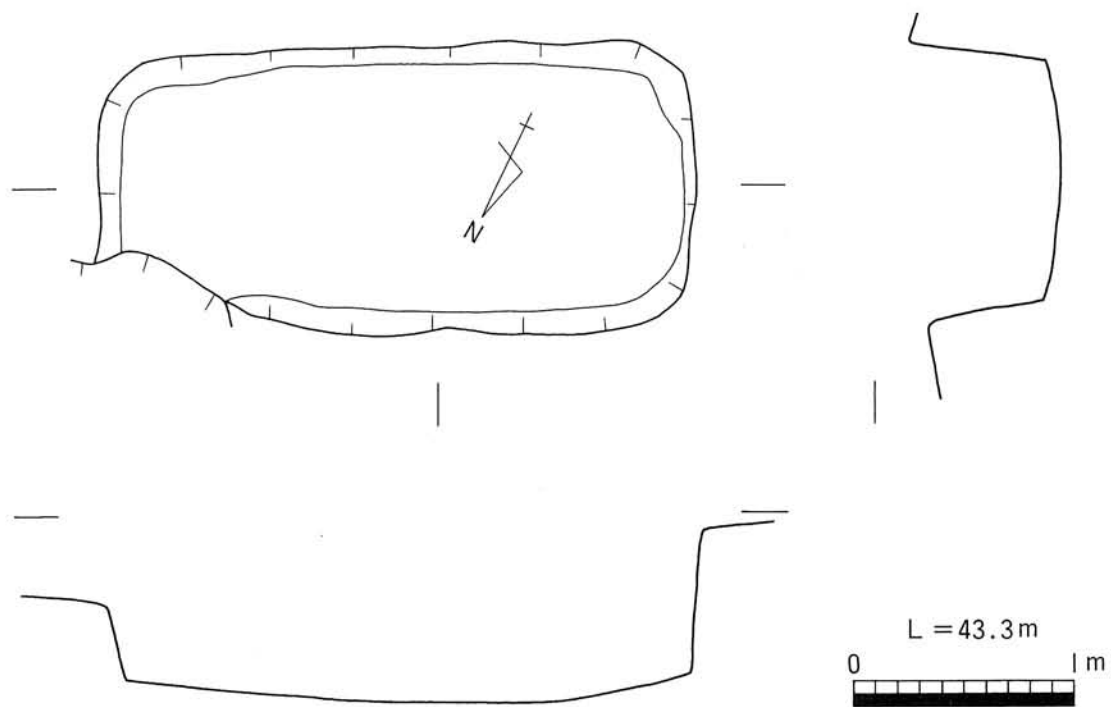
第11図 第2号テラス状遺構実測図



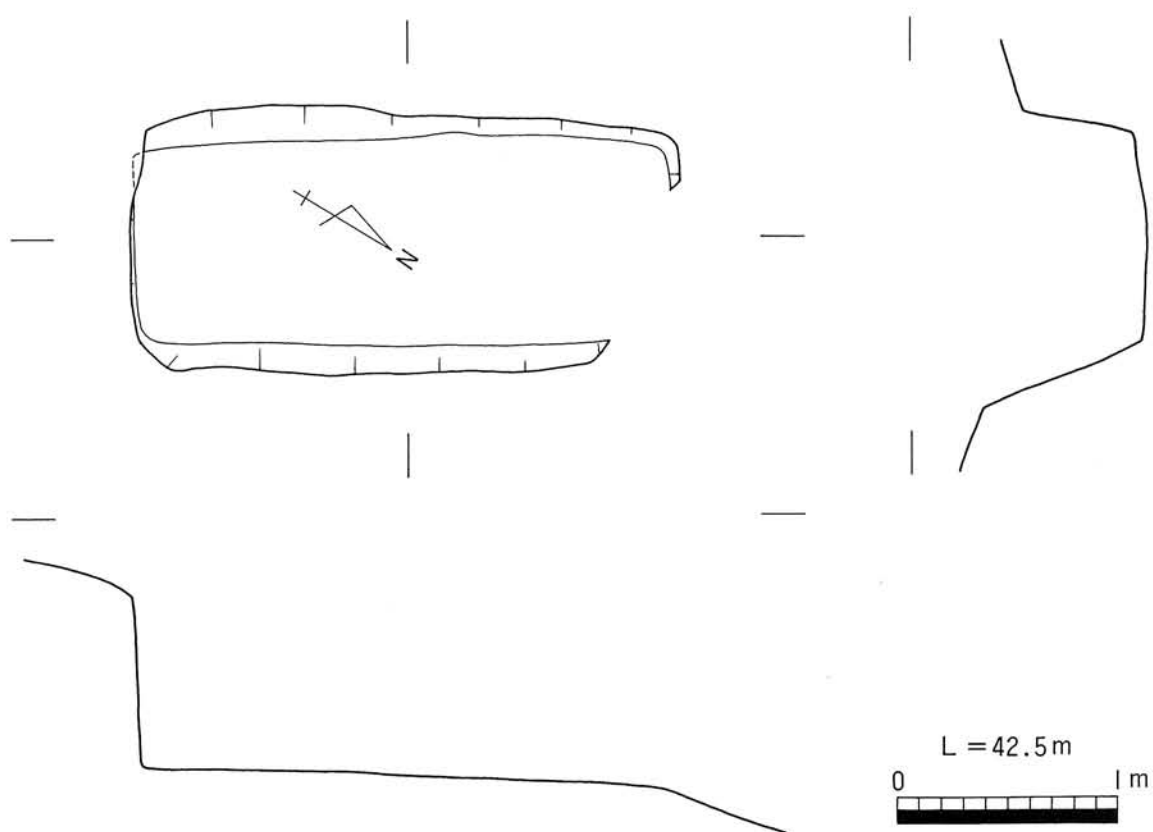
第12図 第1号土壙実測図



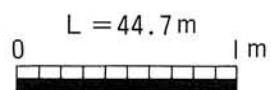
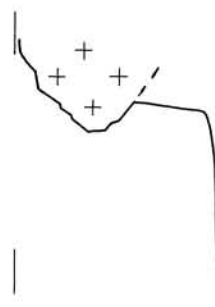
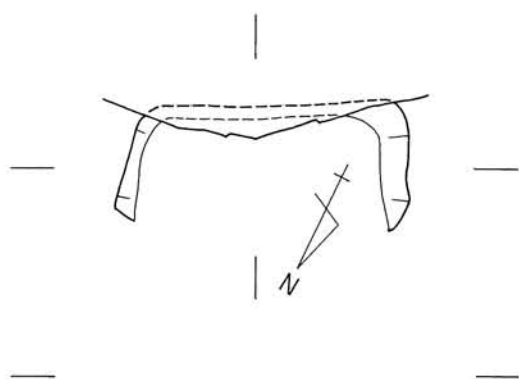
第13図 第2号土壙実測図



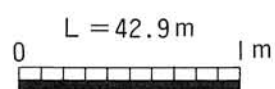
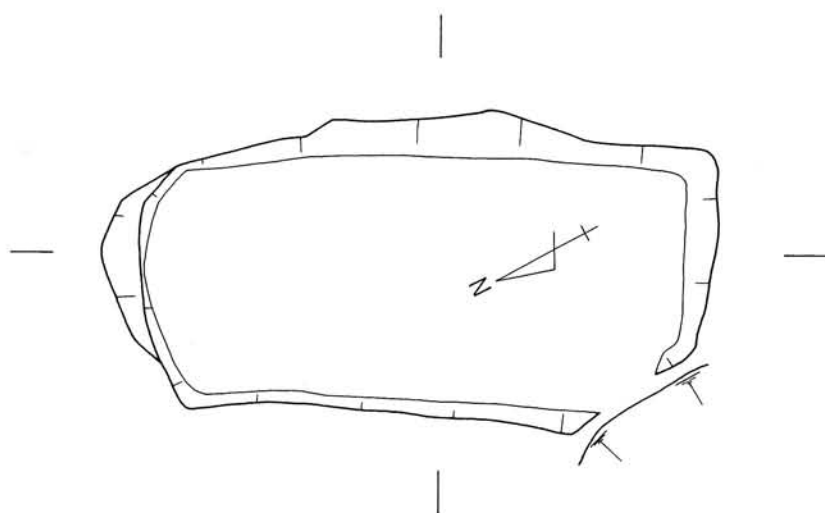
第14図 第3号土壙実測図



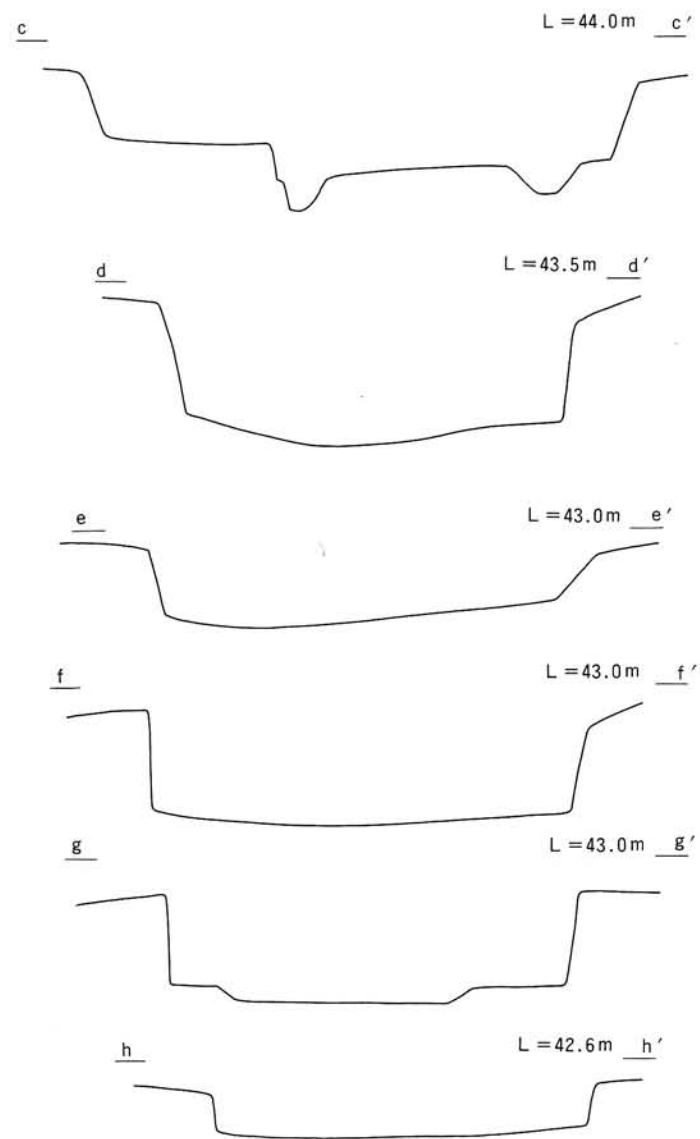
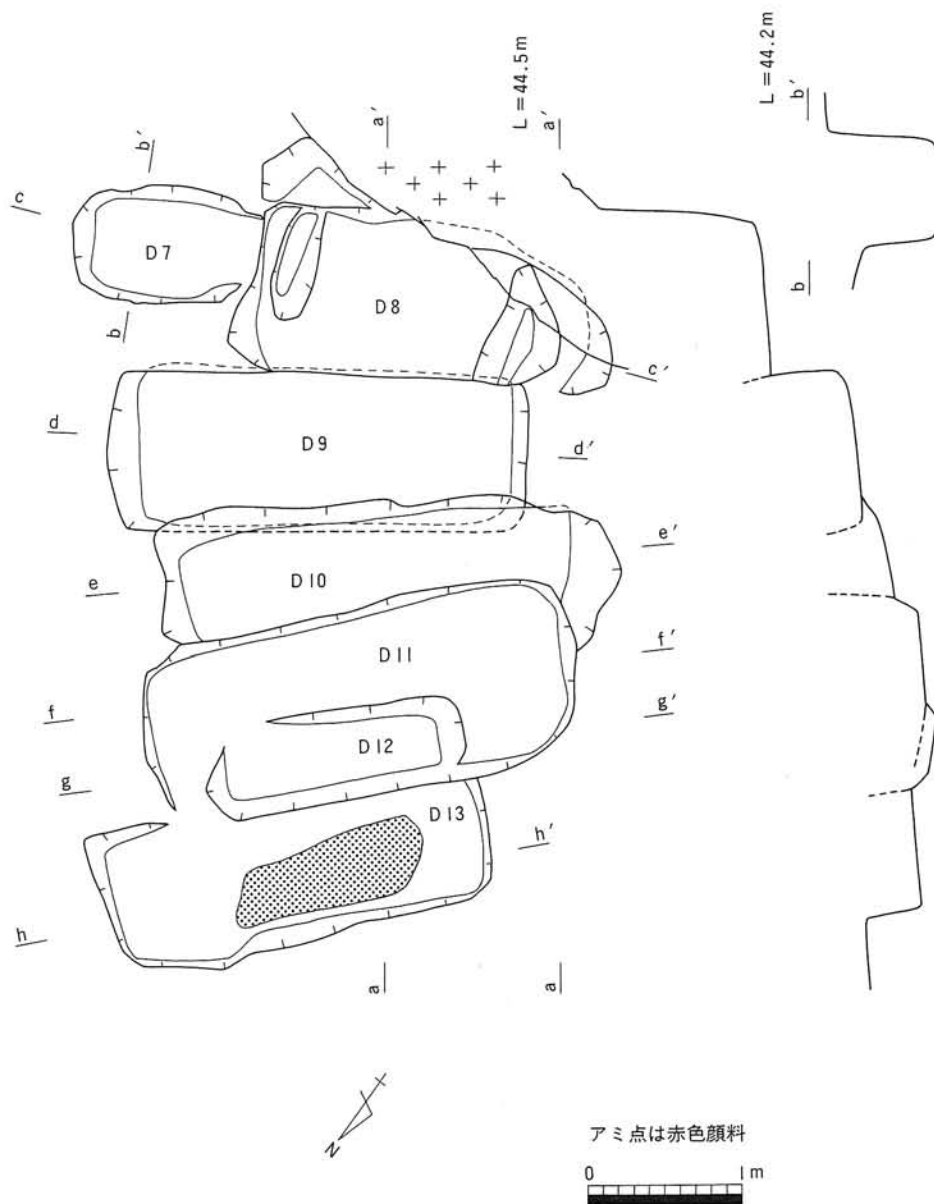
第15図 第5号土壙実測図



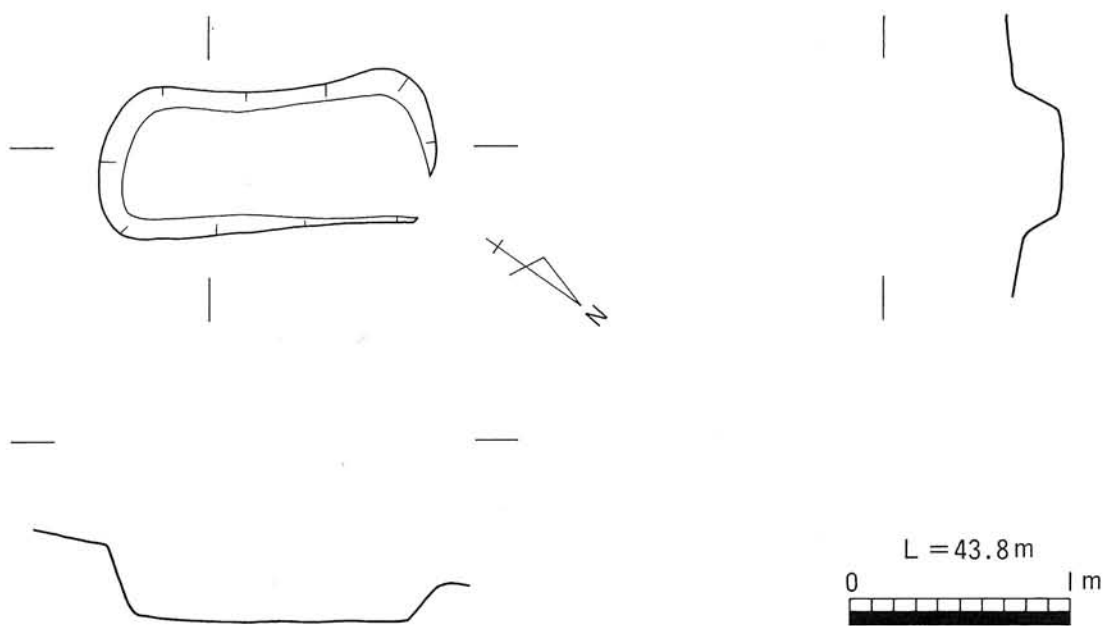
第16図 第6号土坑实测图



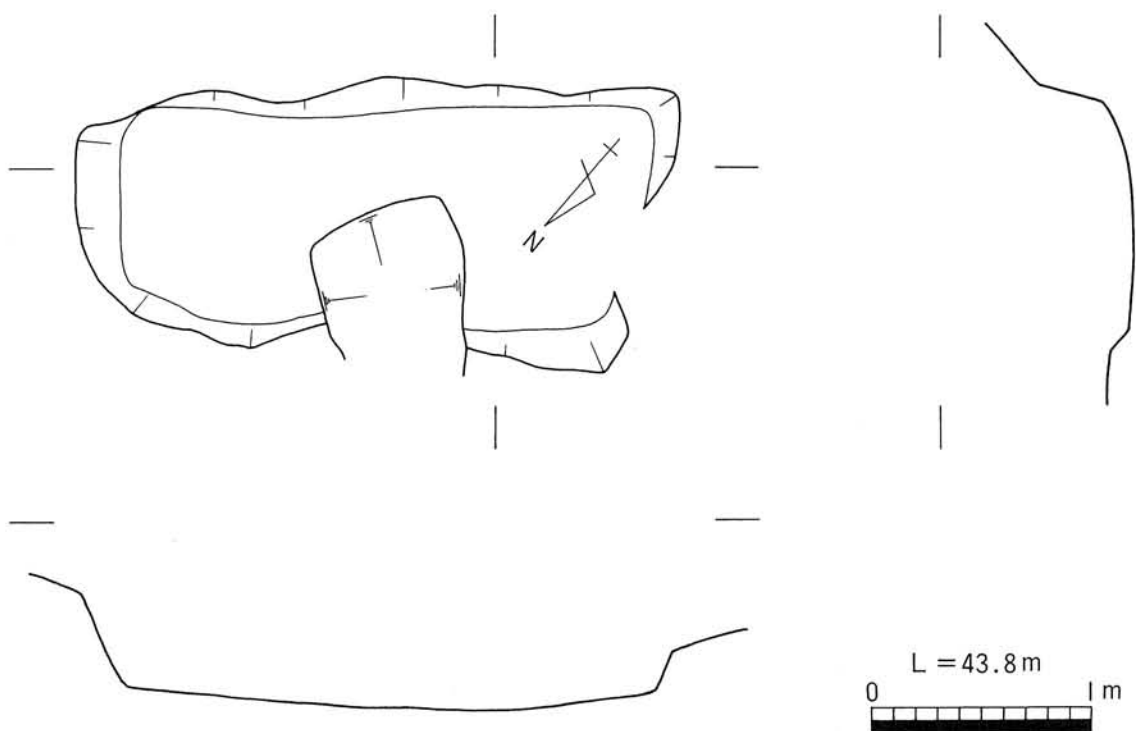
第17図 第14号土坑实测图



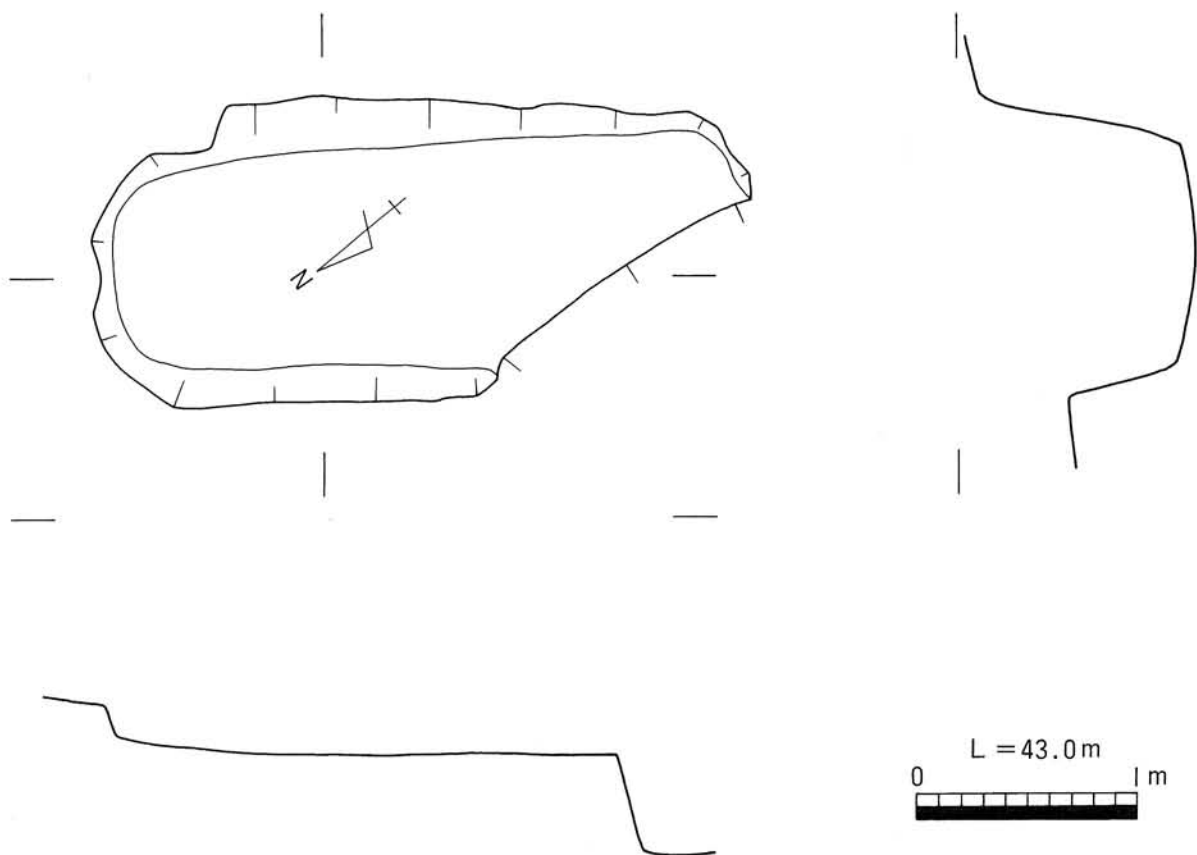
第18図 第7～13号土塙実測図



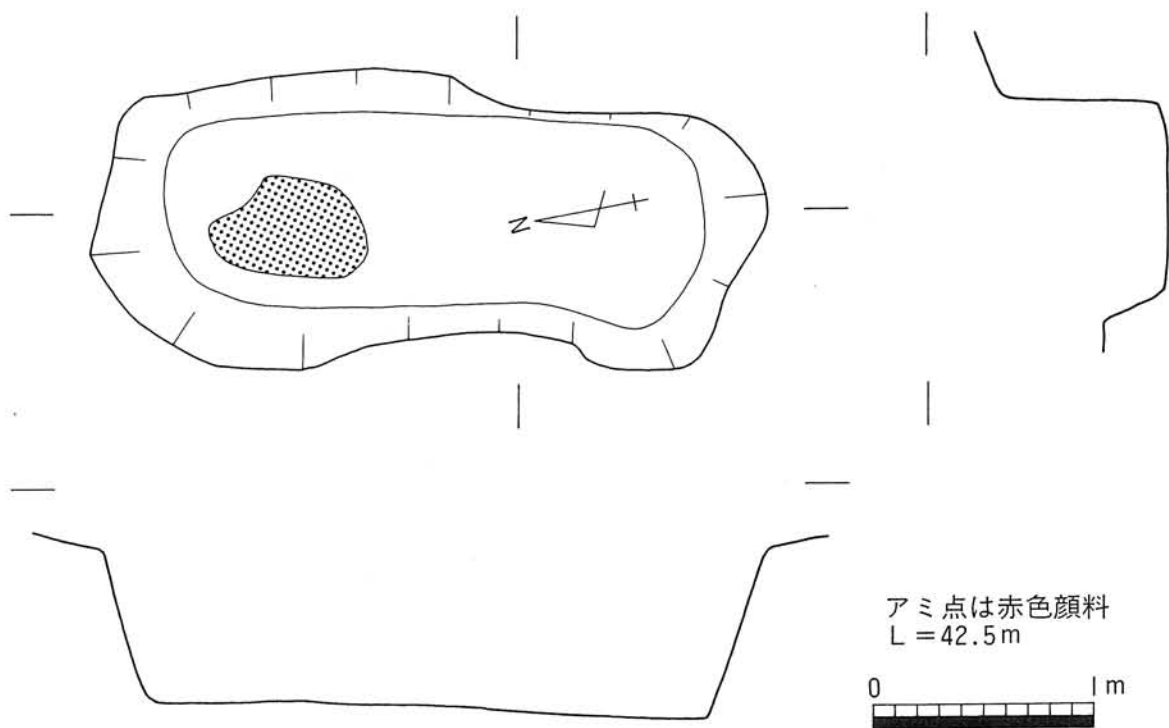
第19図 第16号土壙実測図



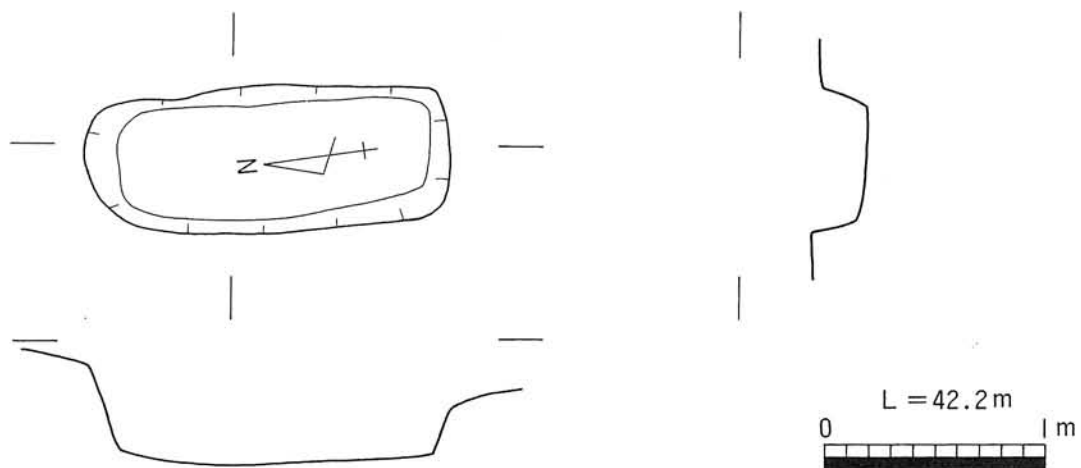
第20図 第18号土壙実測図



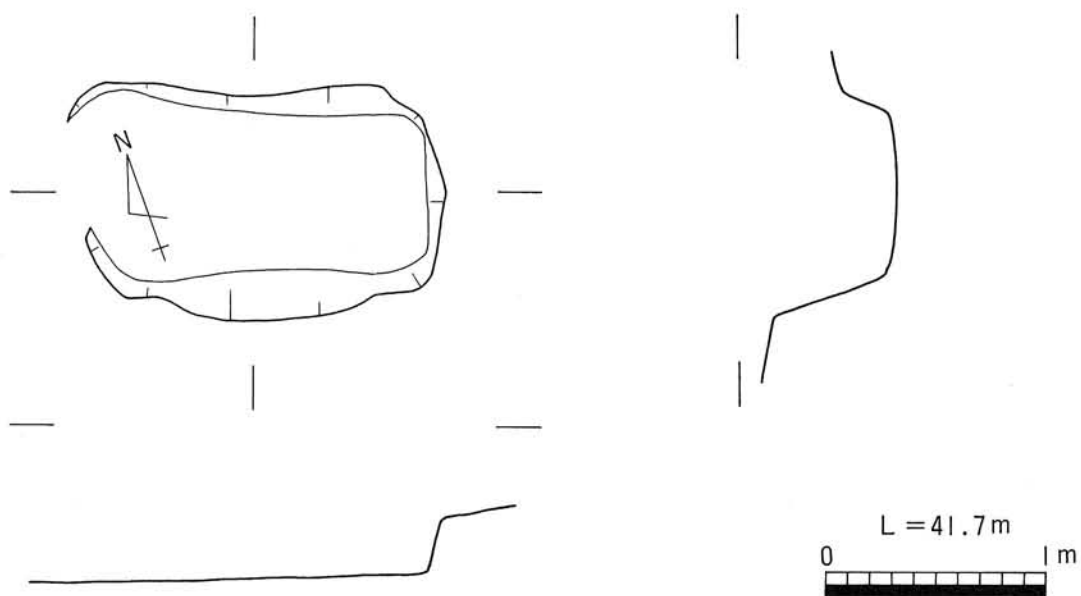
第21図 第19号土塙実測図



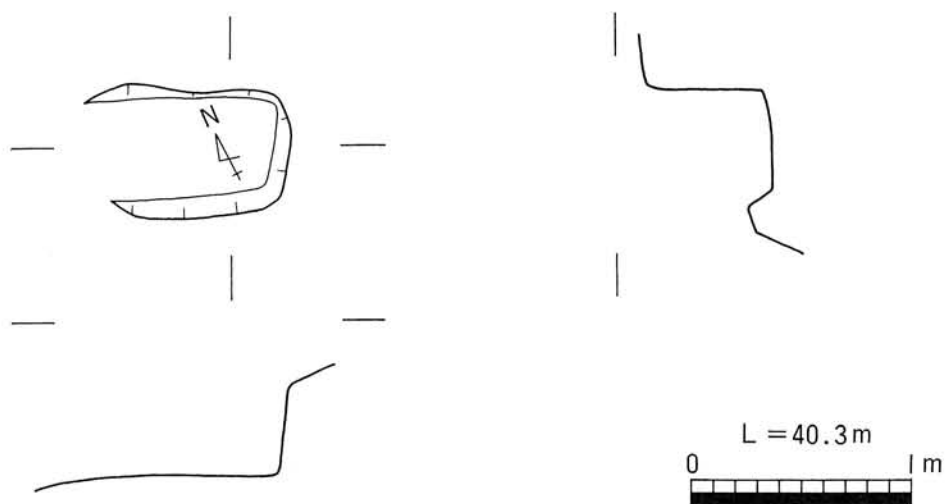
第22図 第20号土塙実測図



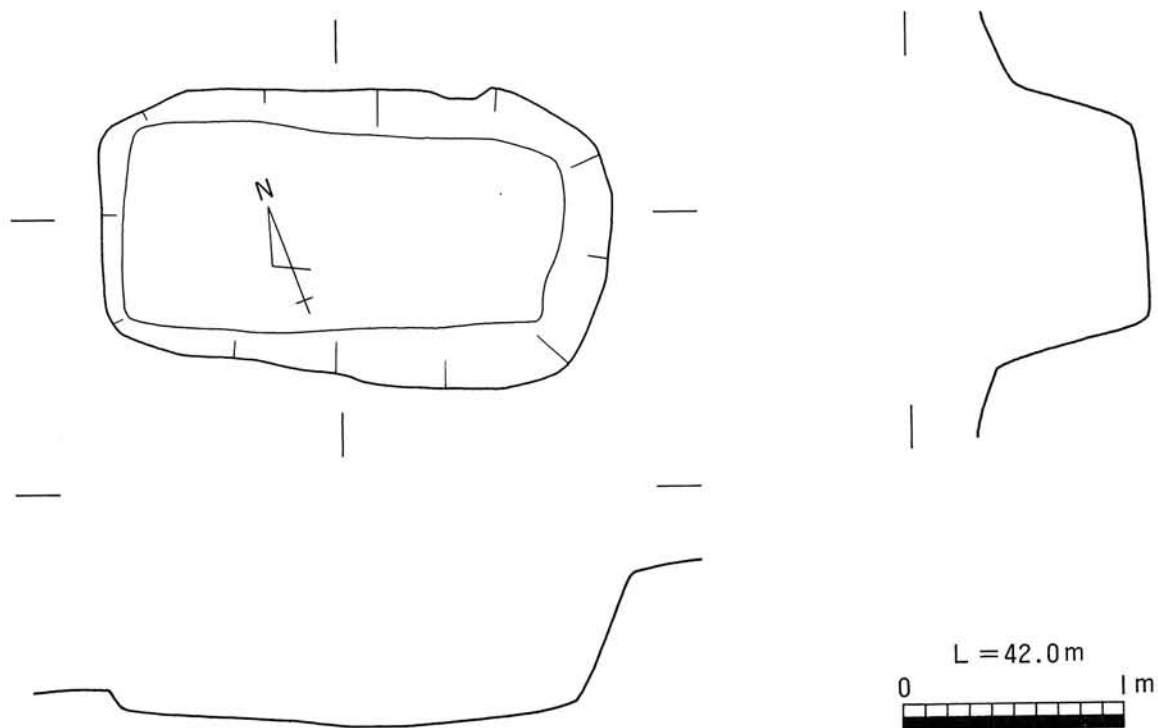
第23図 第21号土壙実測図



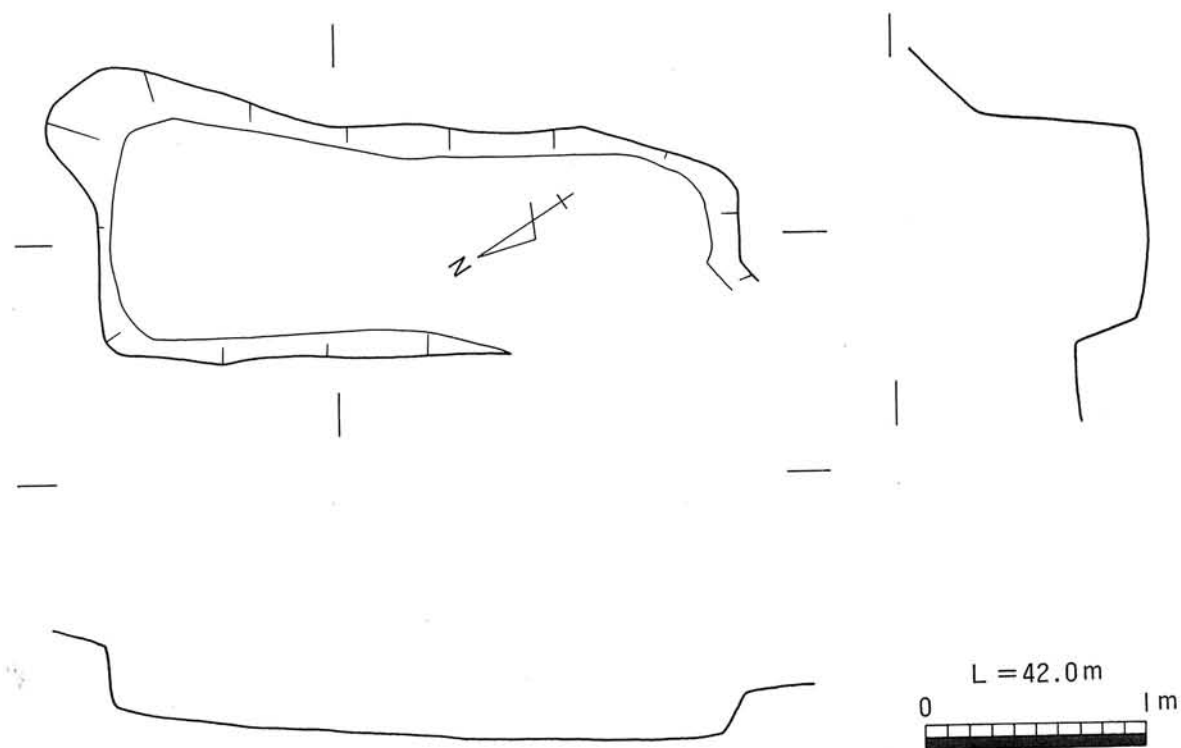
第24図 第22号土壙実測図



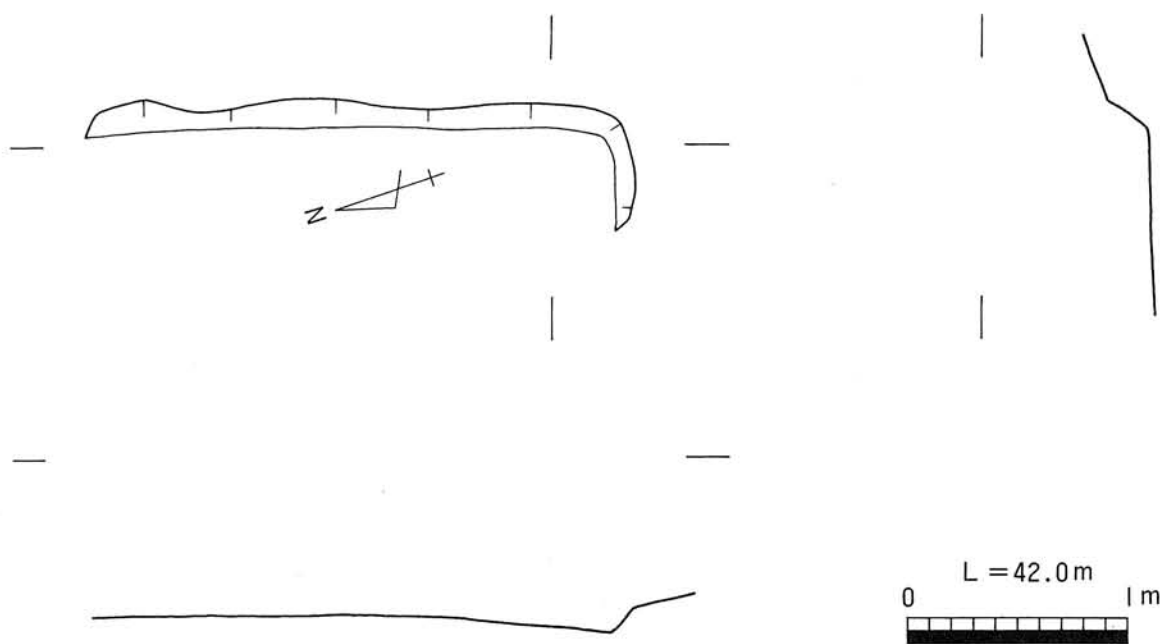
第25図 第39号土壙実測図



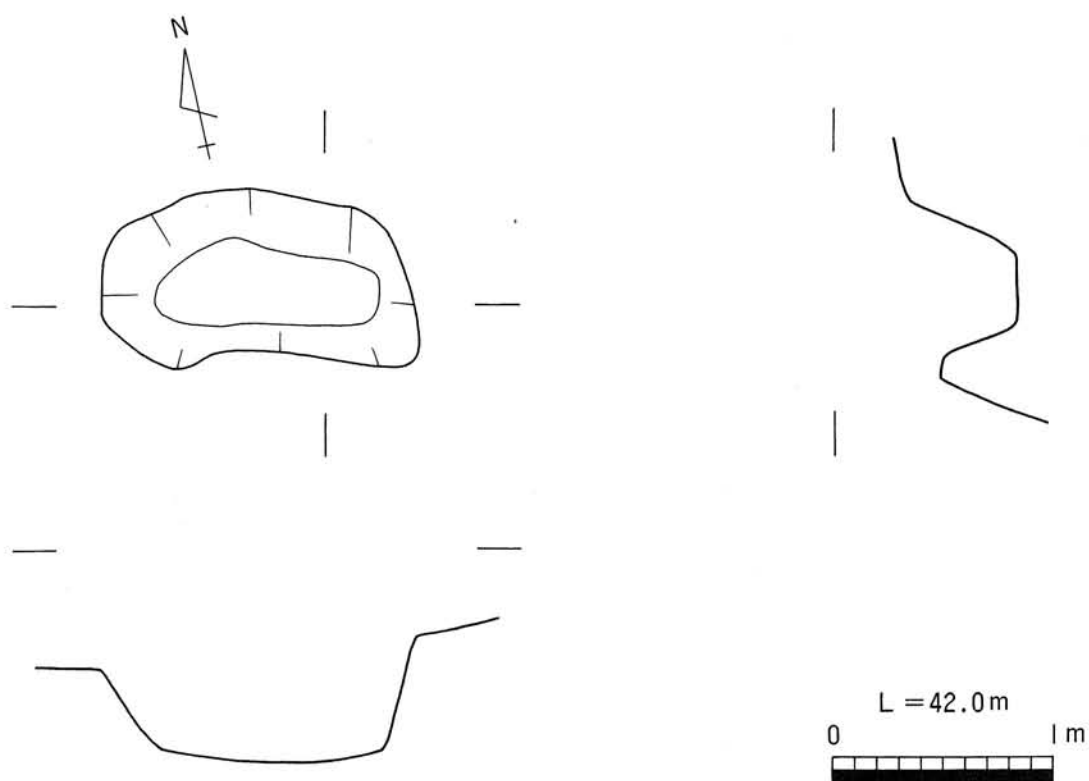
第26図 第23号土壙実測図



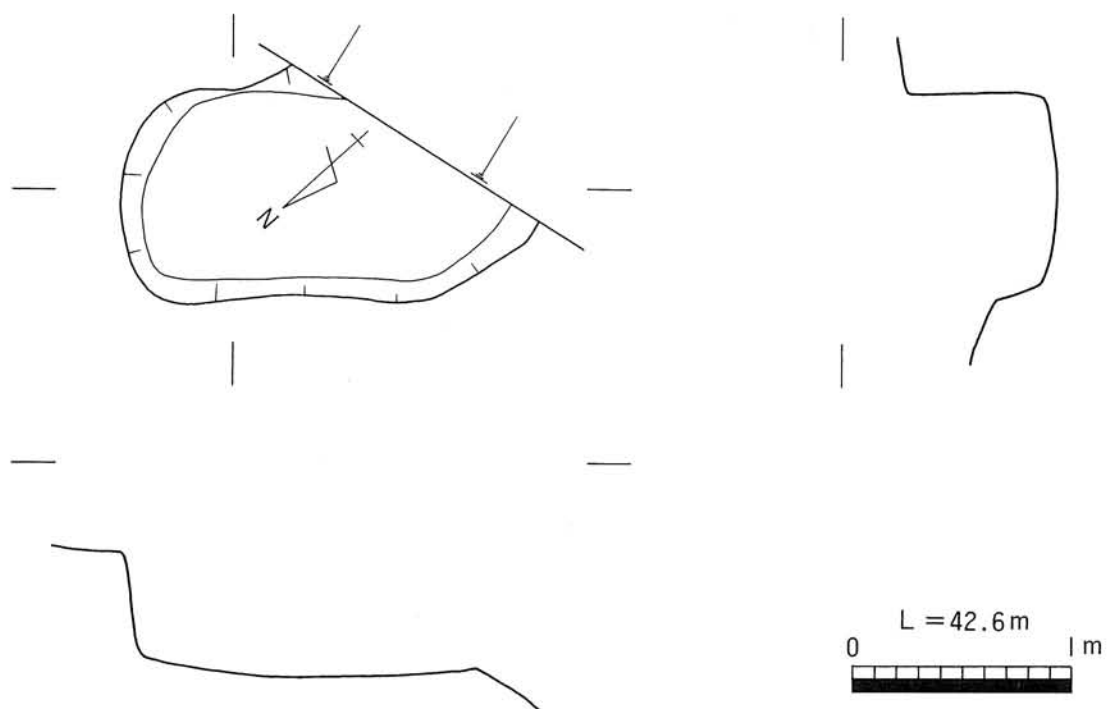
第27図 第24号土壙実測図



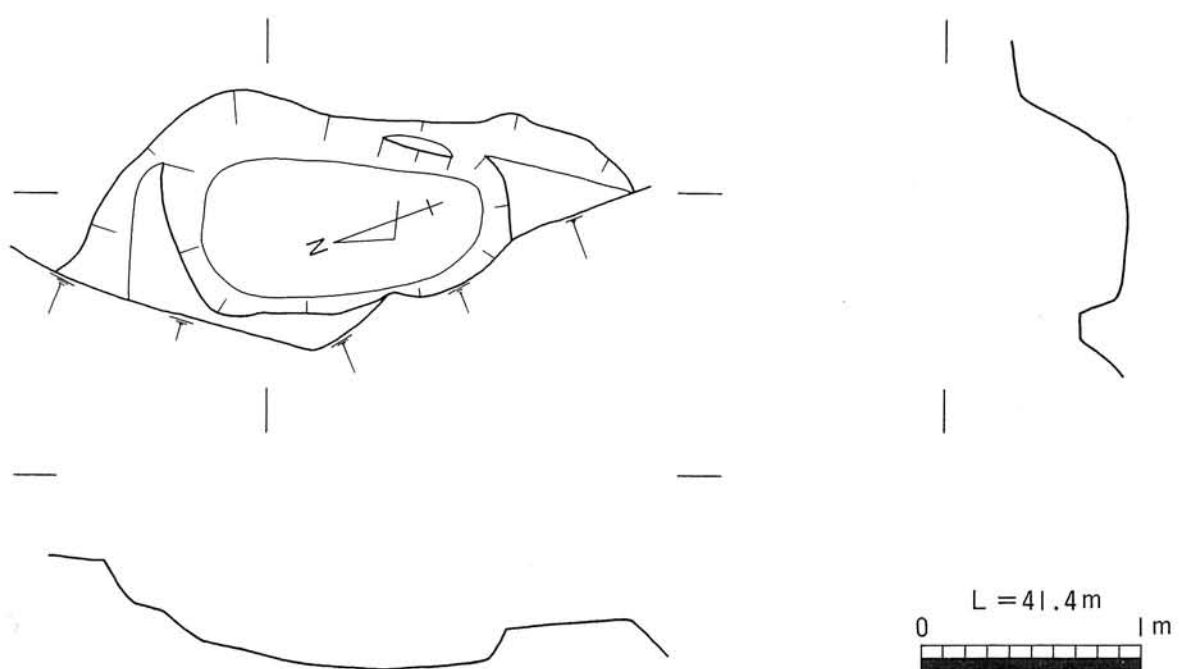
第28図 第25号土壙実測図



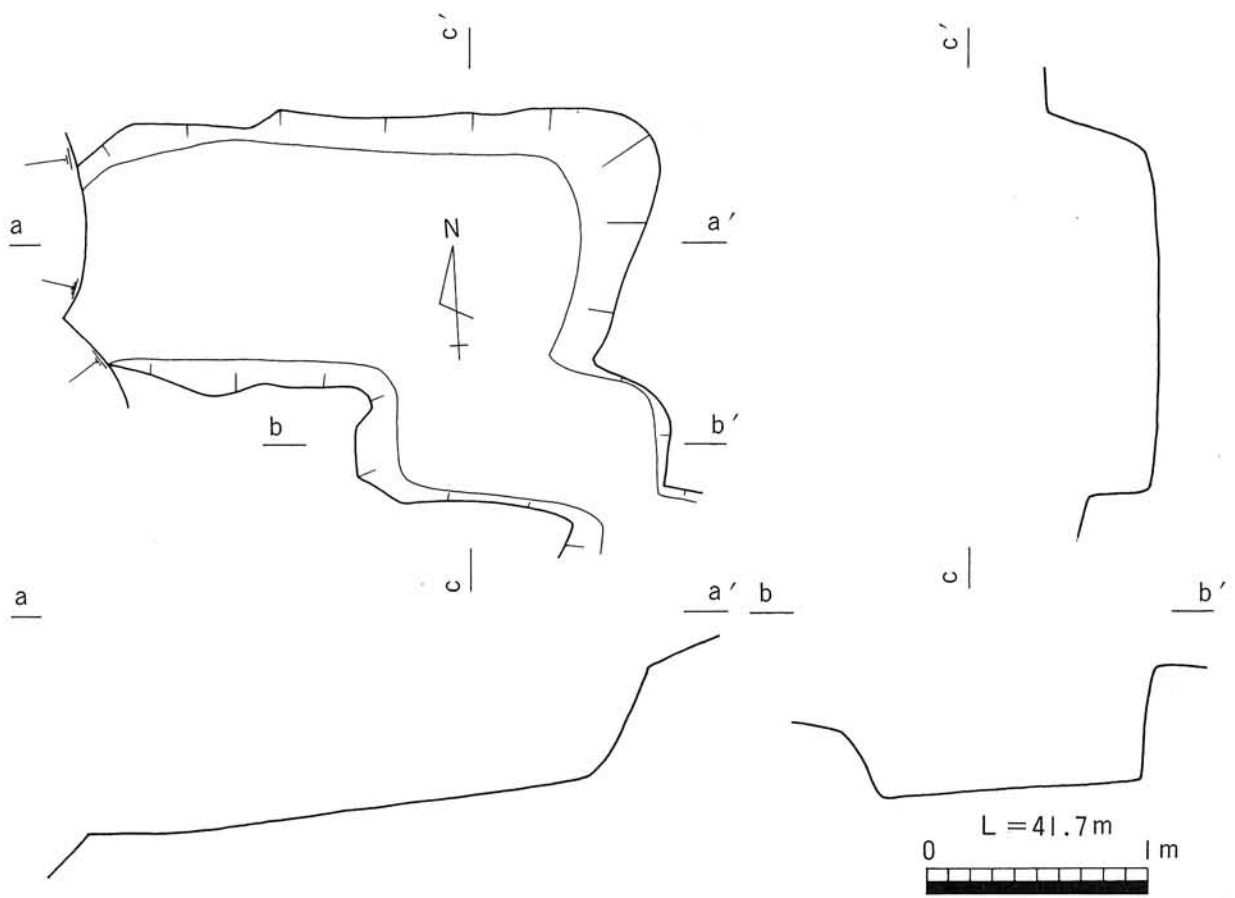
第29図 第26号土壙実測図



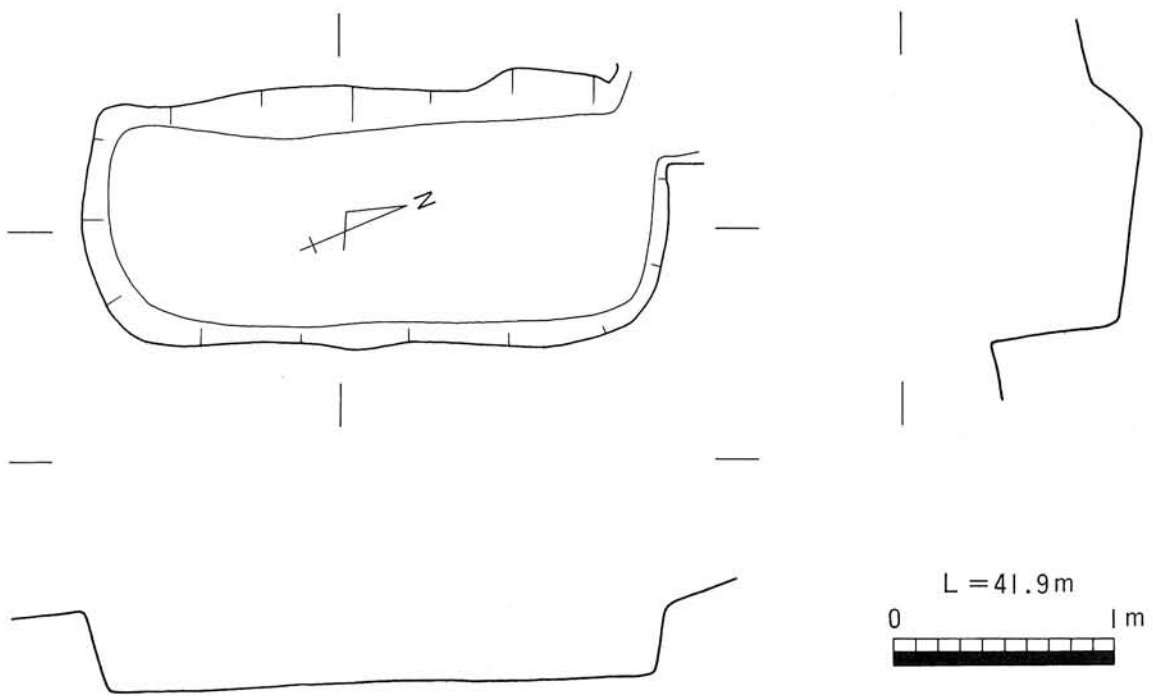
第30図 第27号土壙実測図



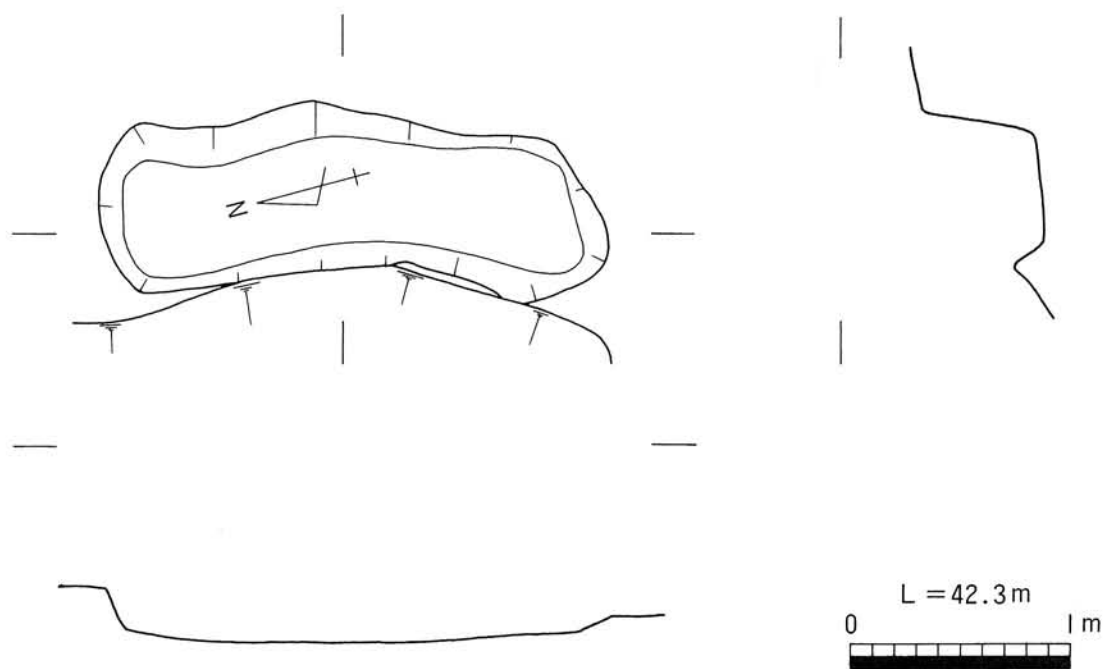
第31図 第28号土壙実測図



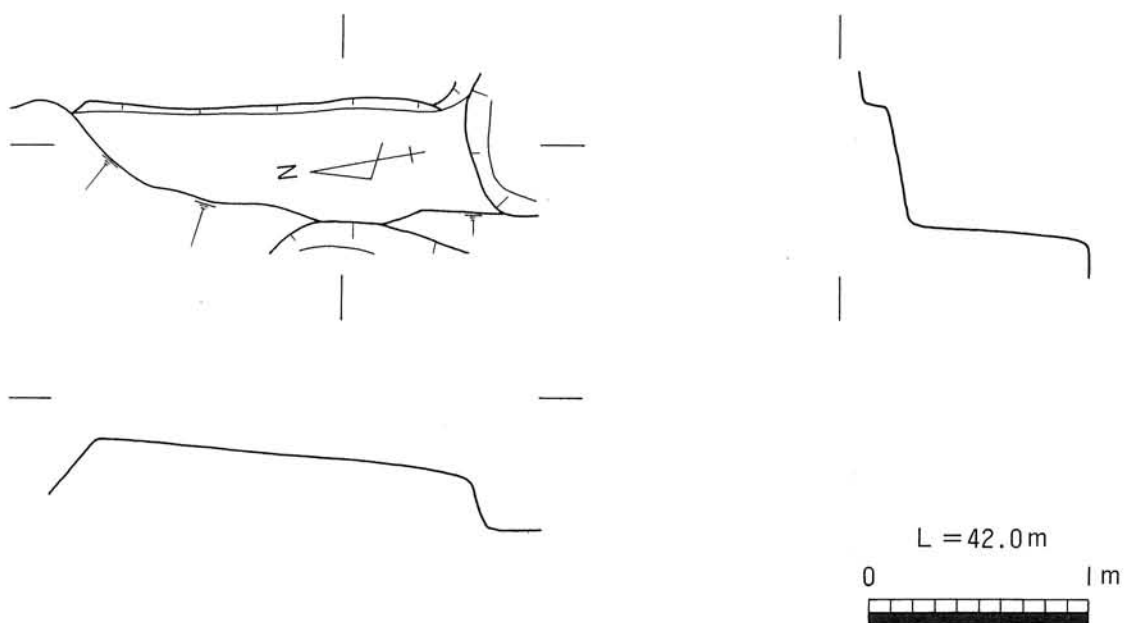
第32図 第29・30号土塙実測図



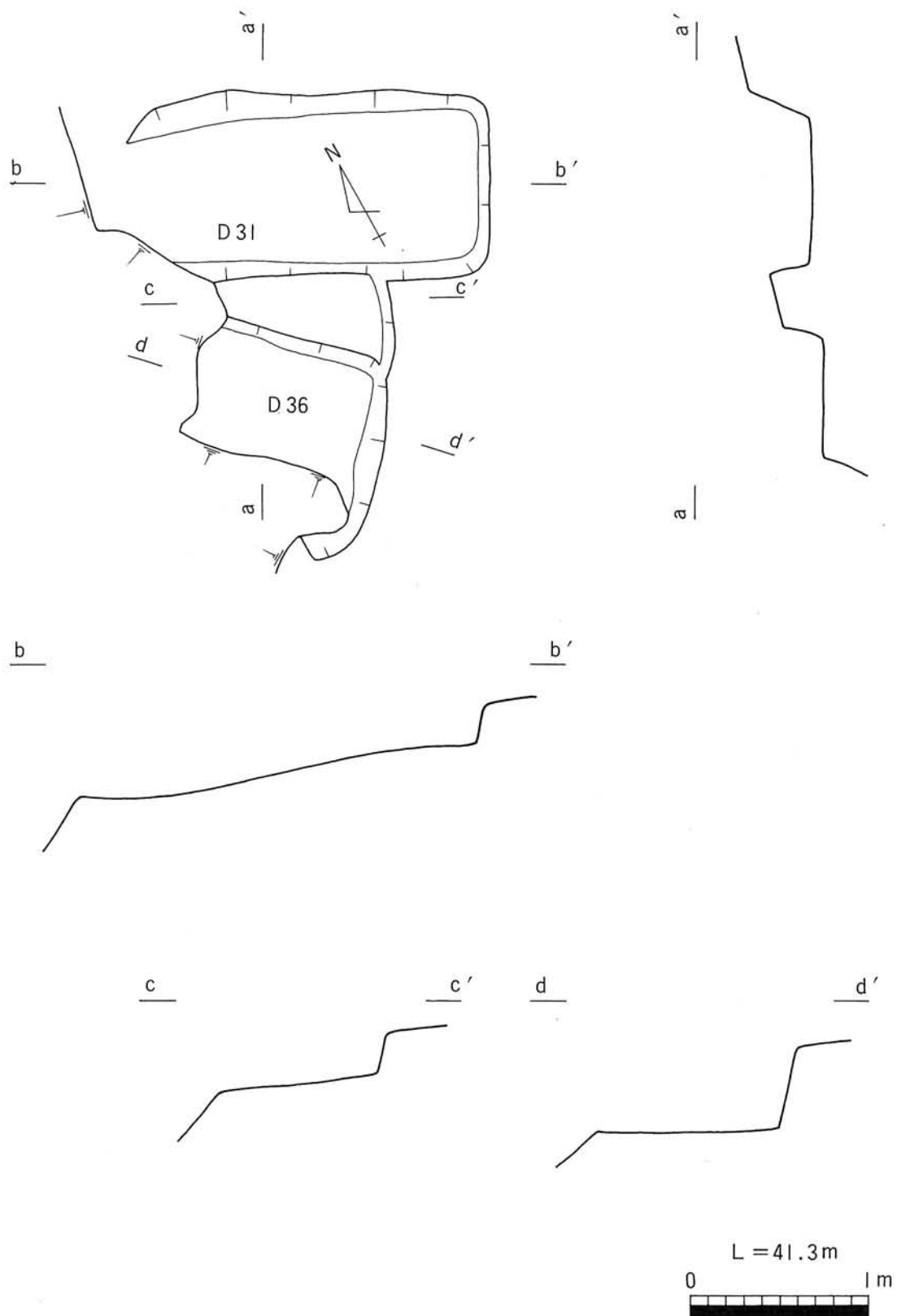
第33図 第32号土塙実測図



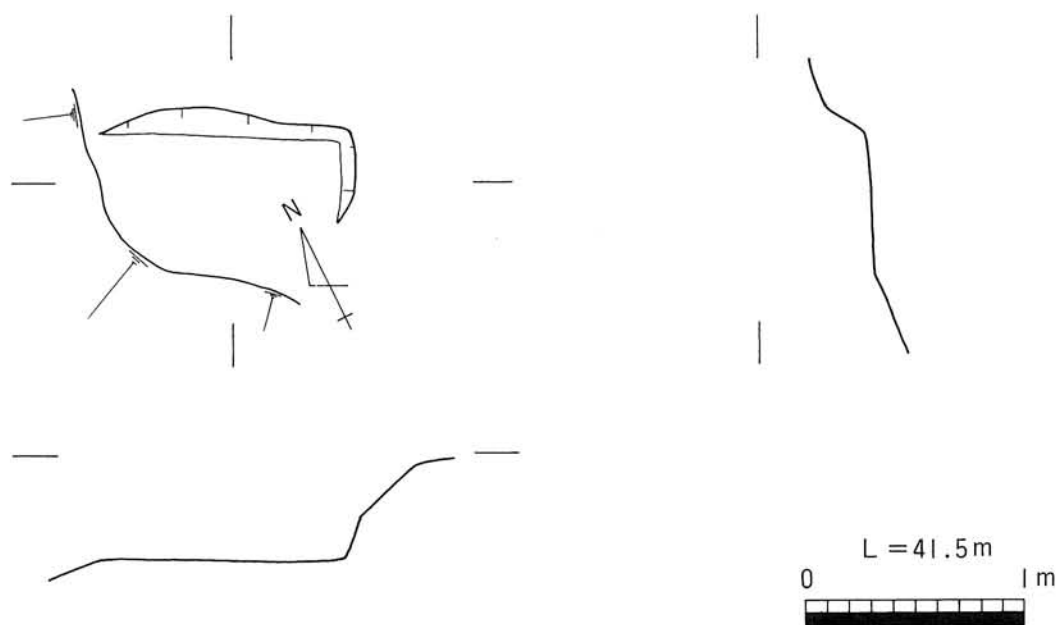
第34図 第33号土壙実測図



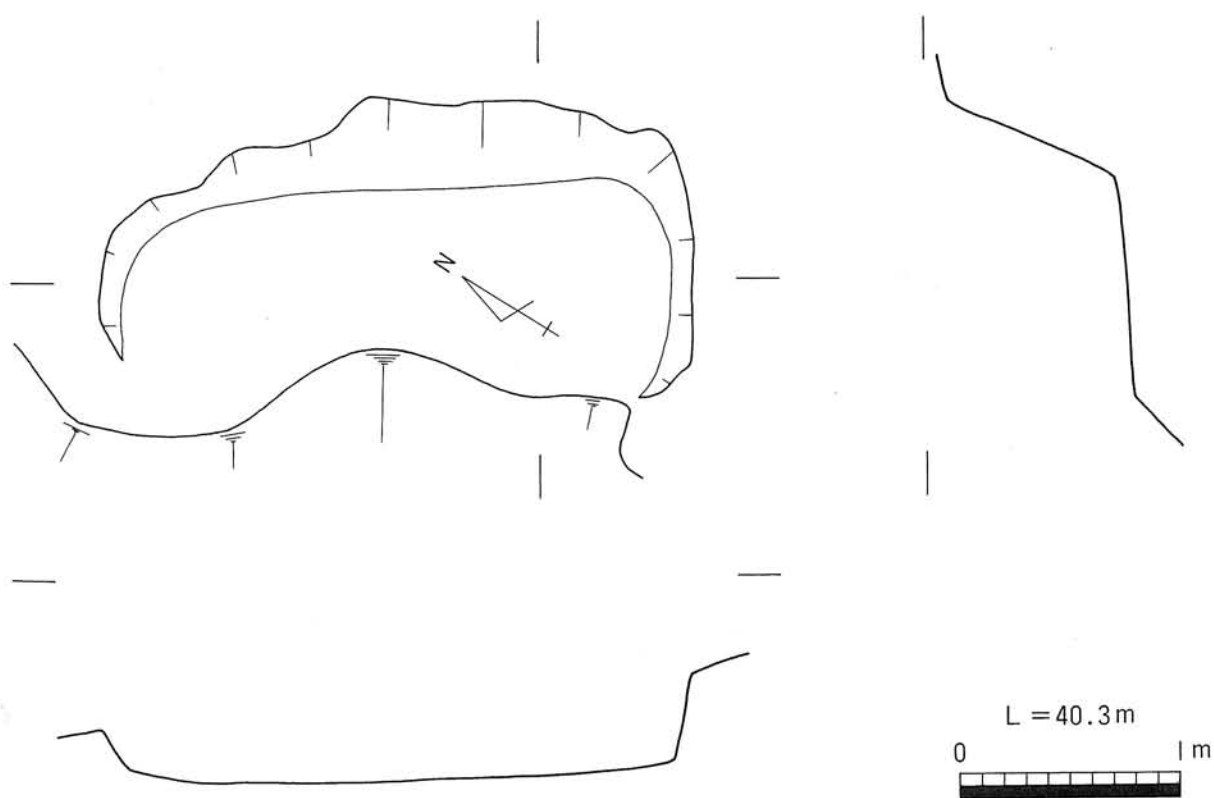
第35図 第34号土壙実測図



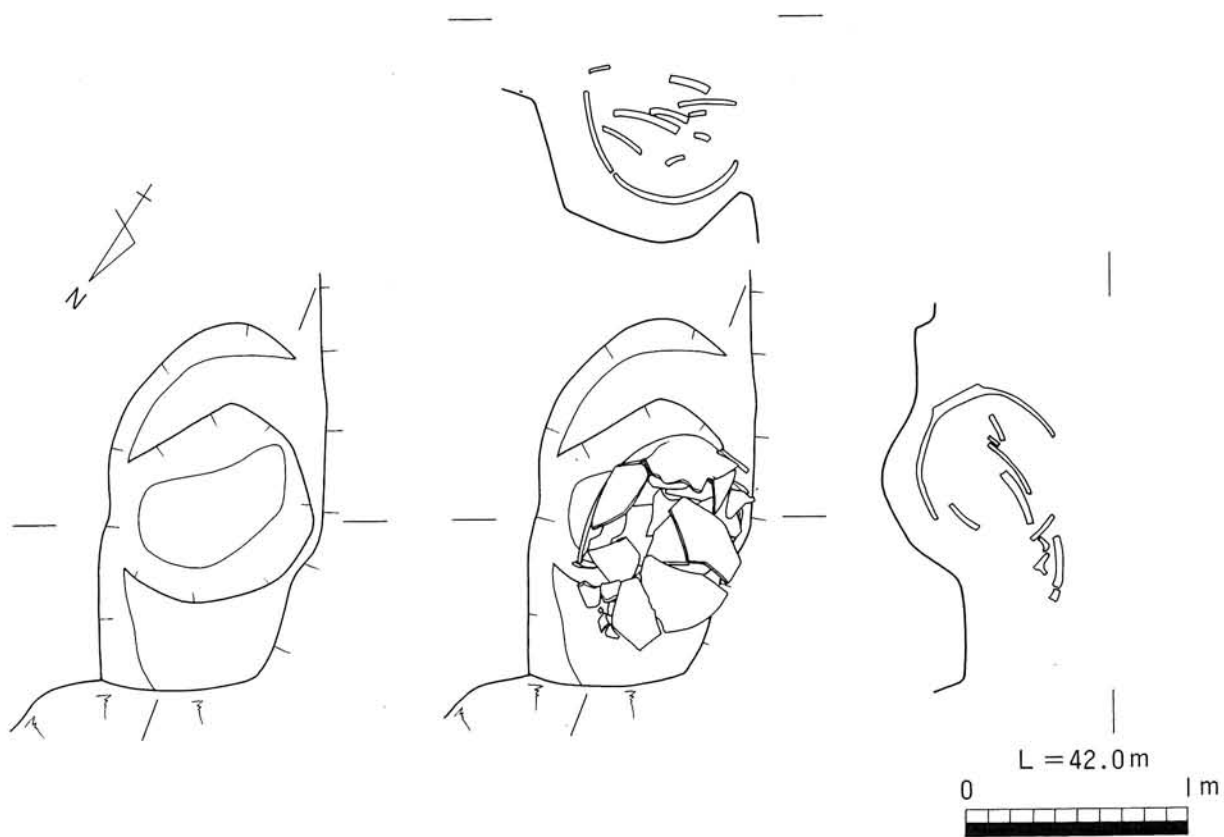
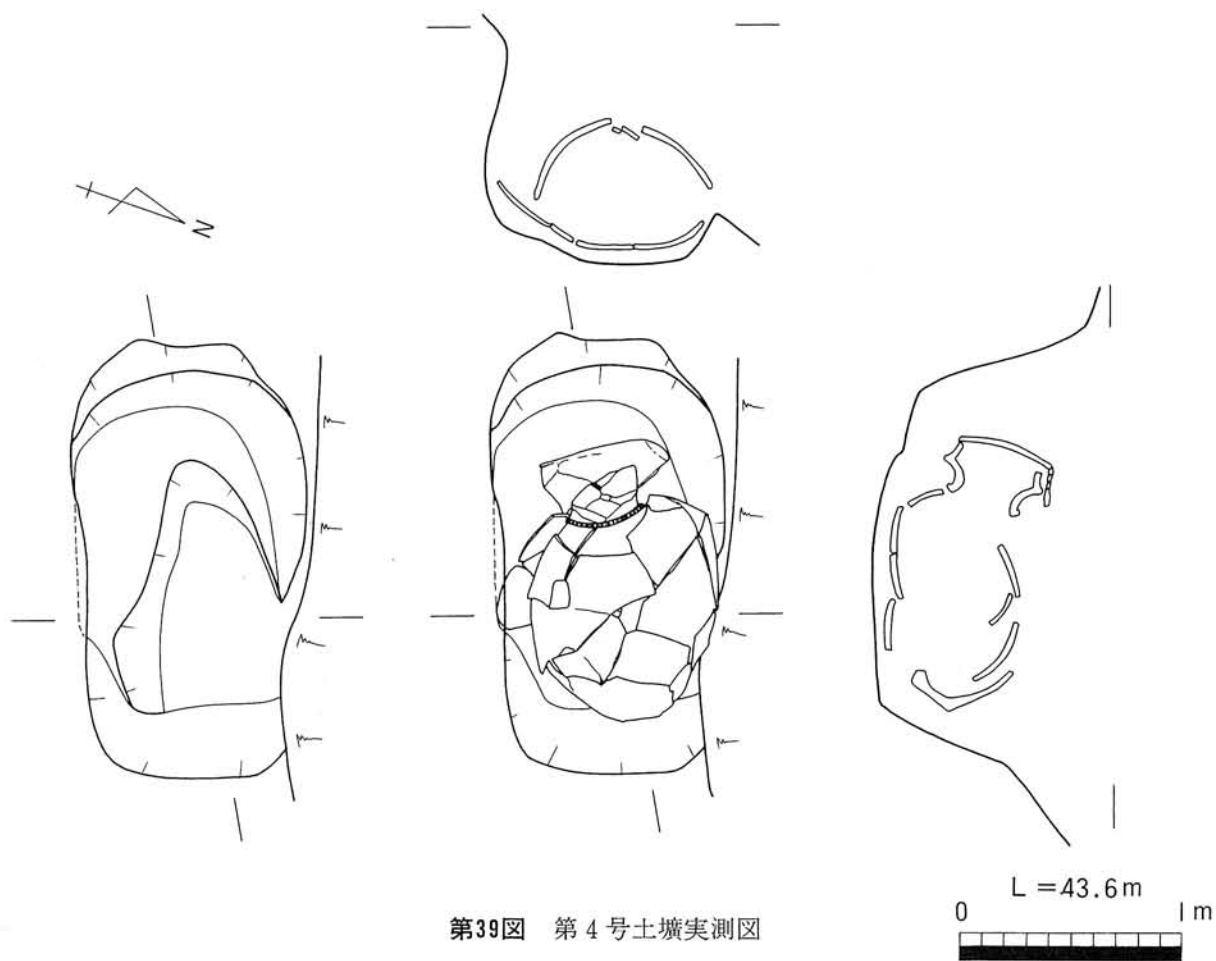
第36図 第31・36号土坑実測図

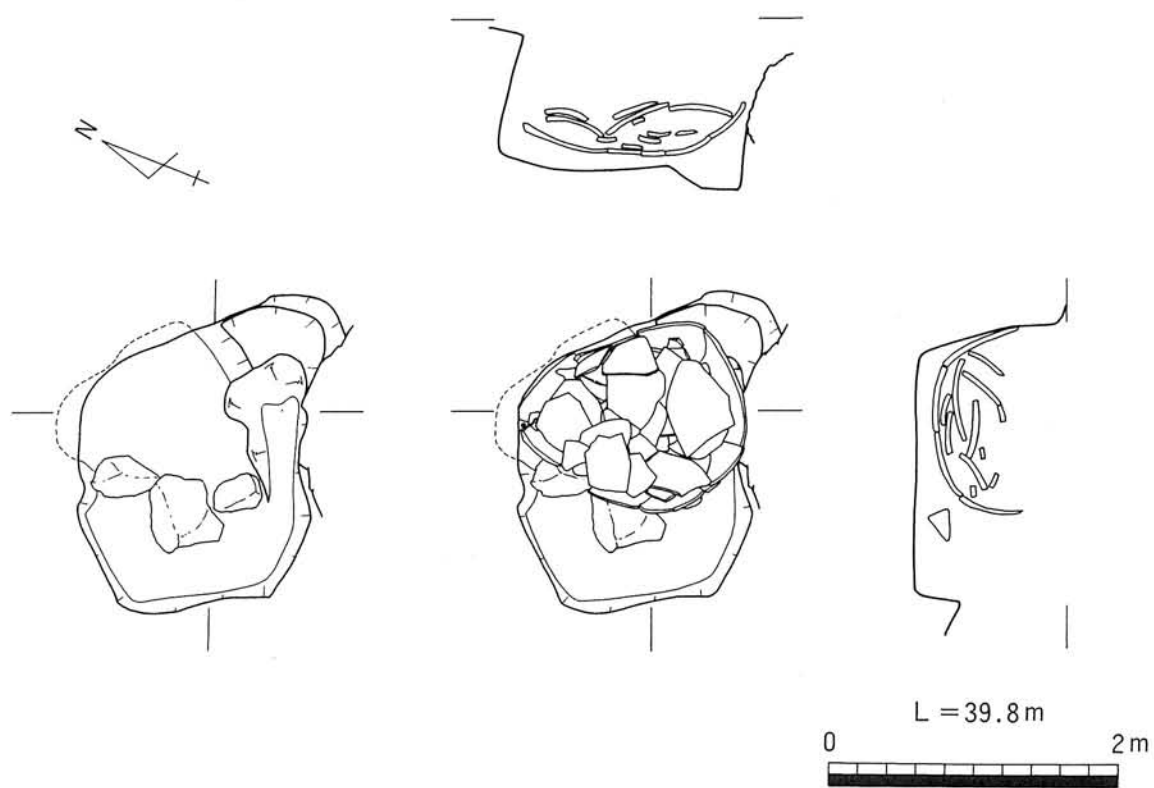
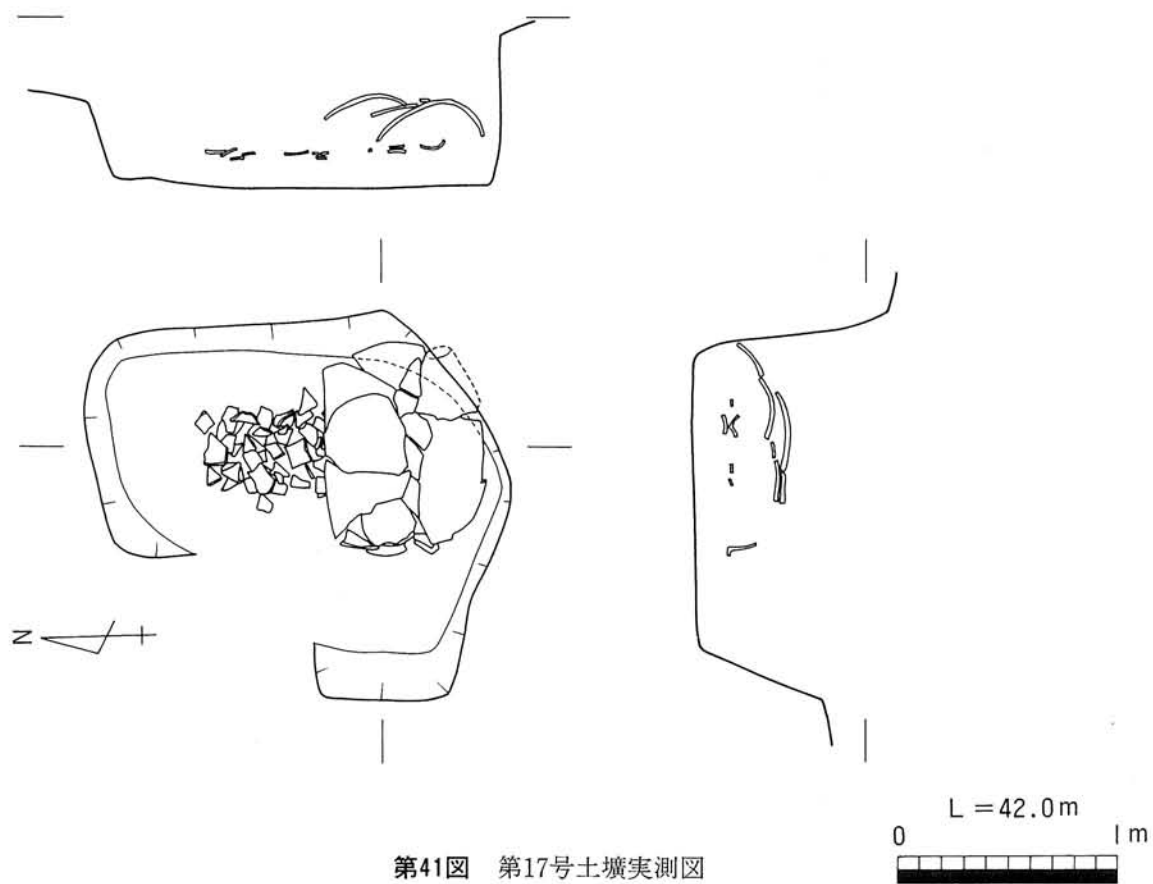


第37図 第37号土壙実測図

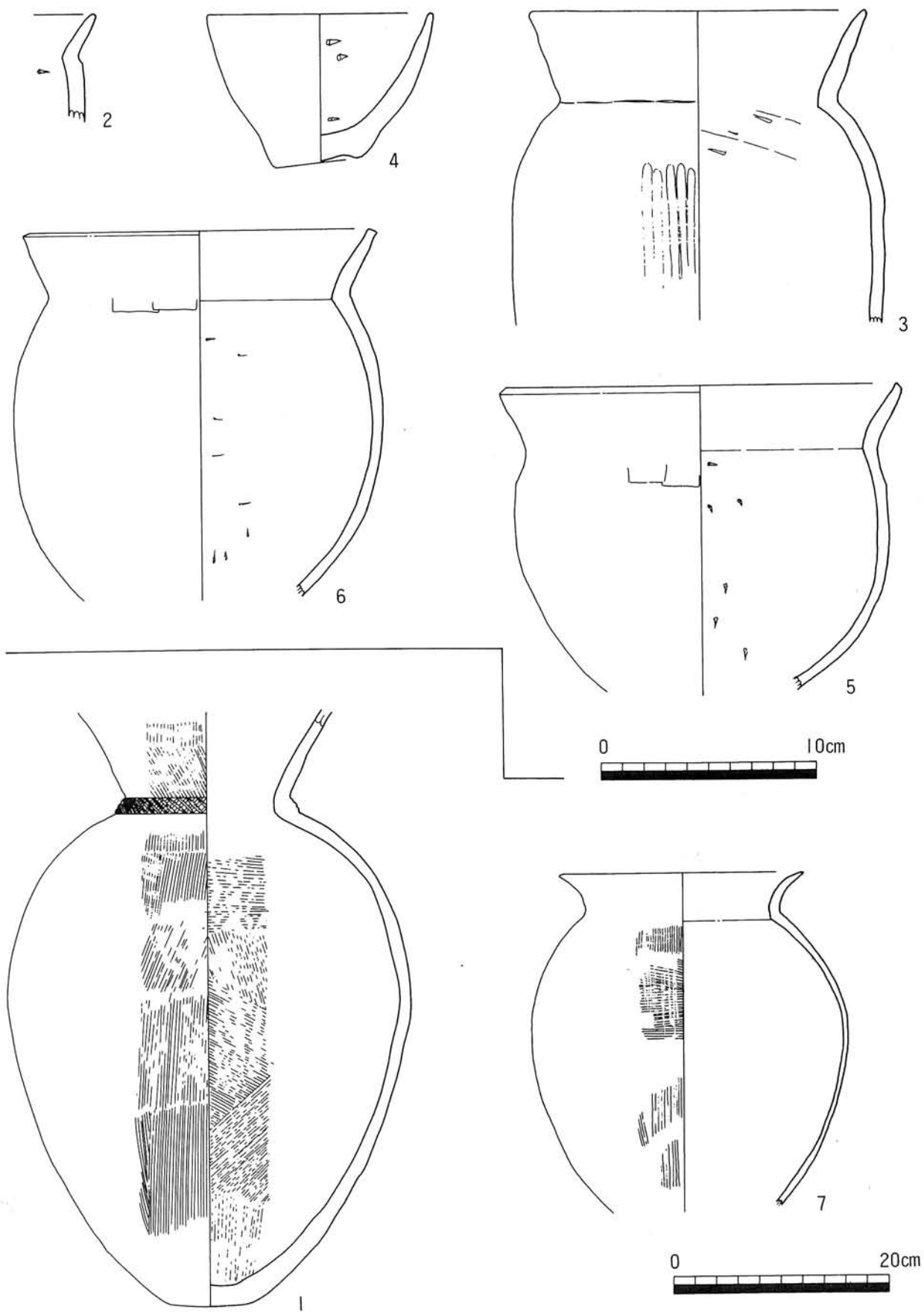


第38図 第38号土壙実測図

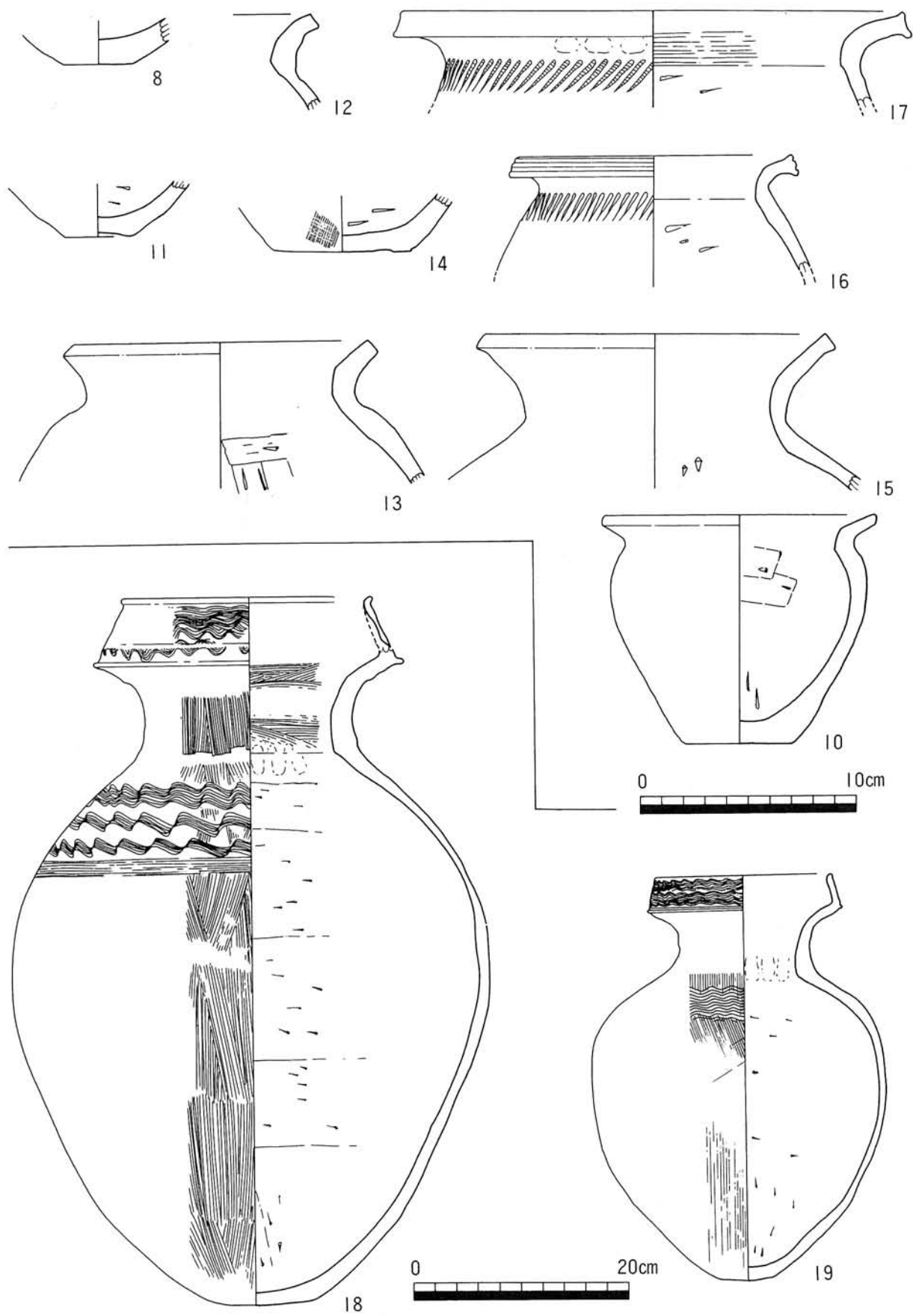




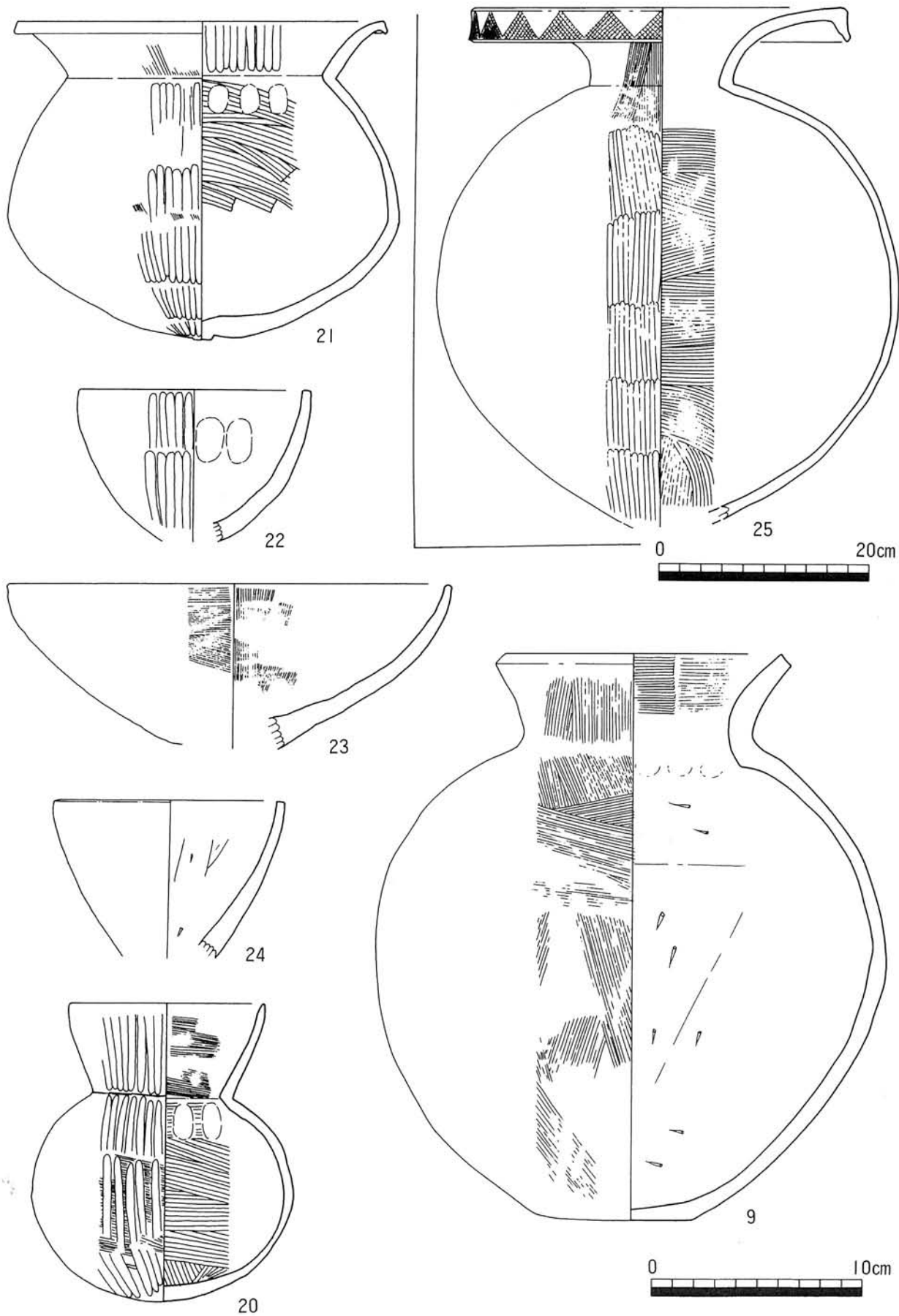




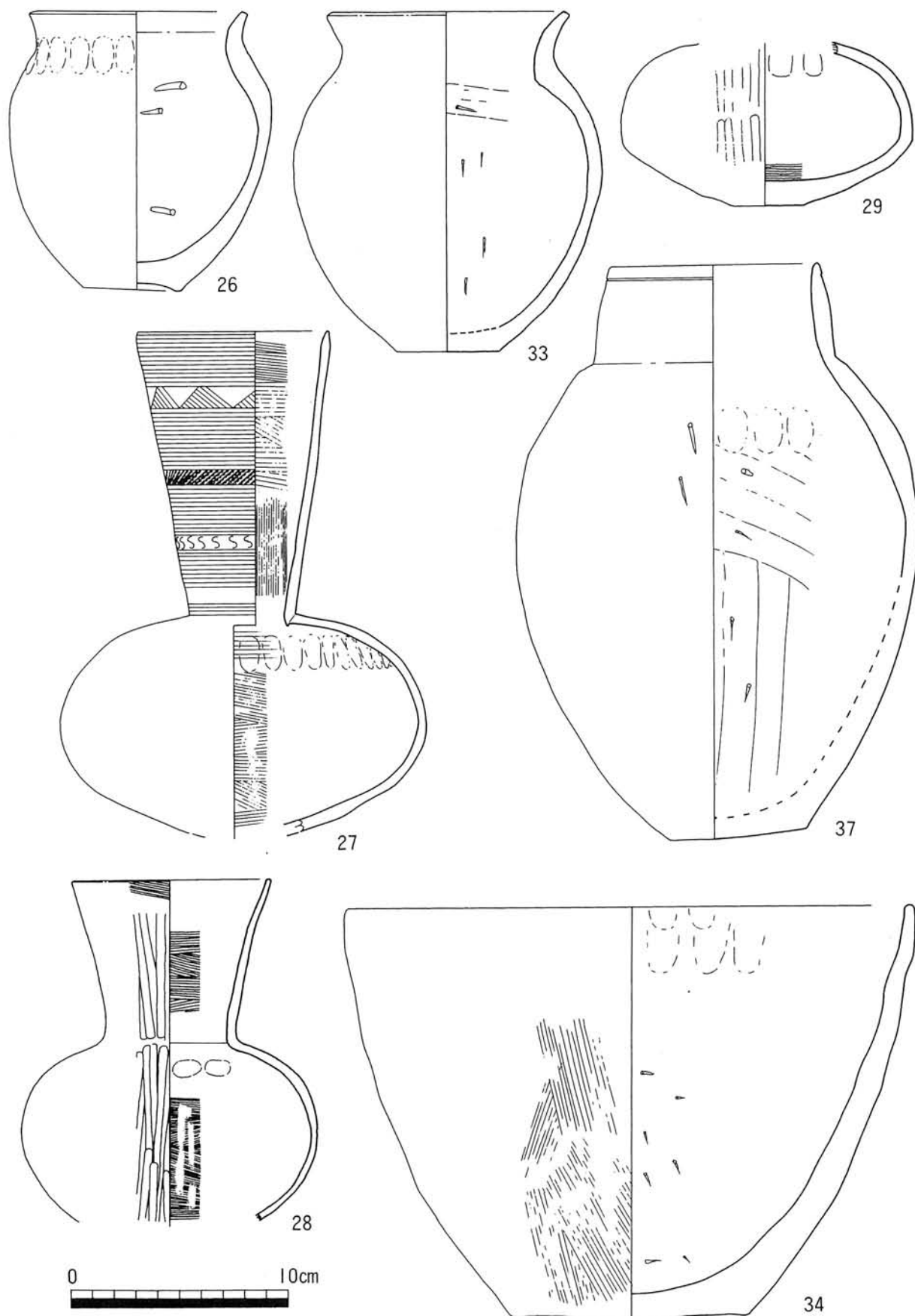
第44図 大久保遺跡出土土器実測図 (1)



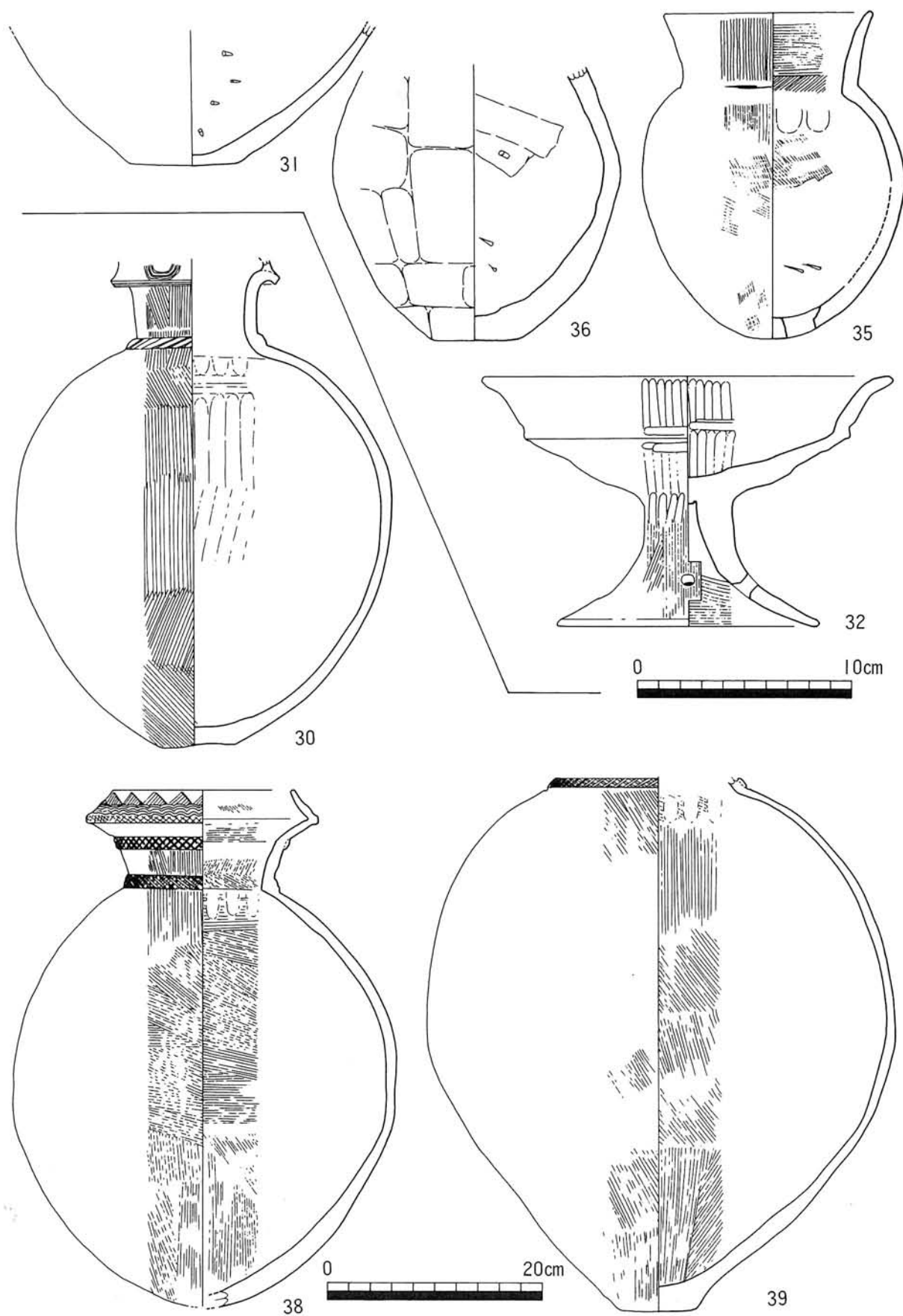
第45図 大久保遺跡出土土器実測図 (2)



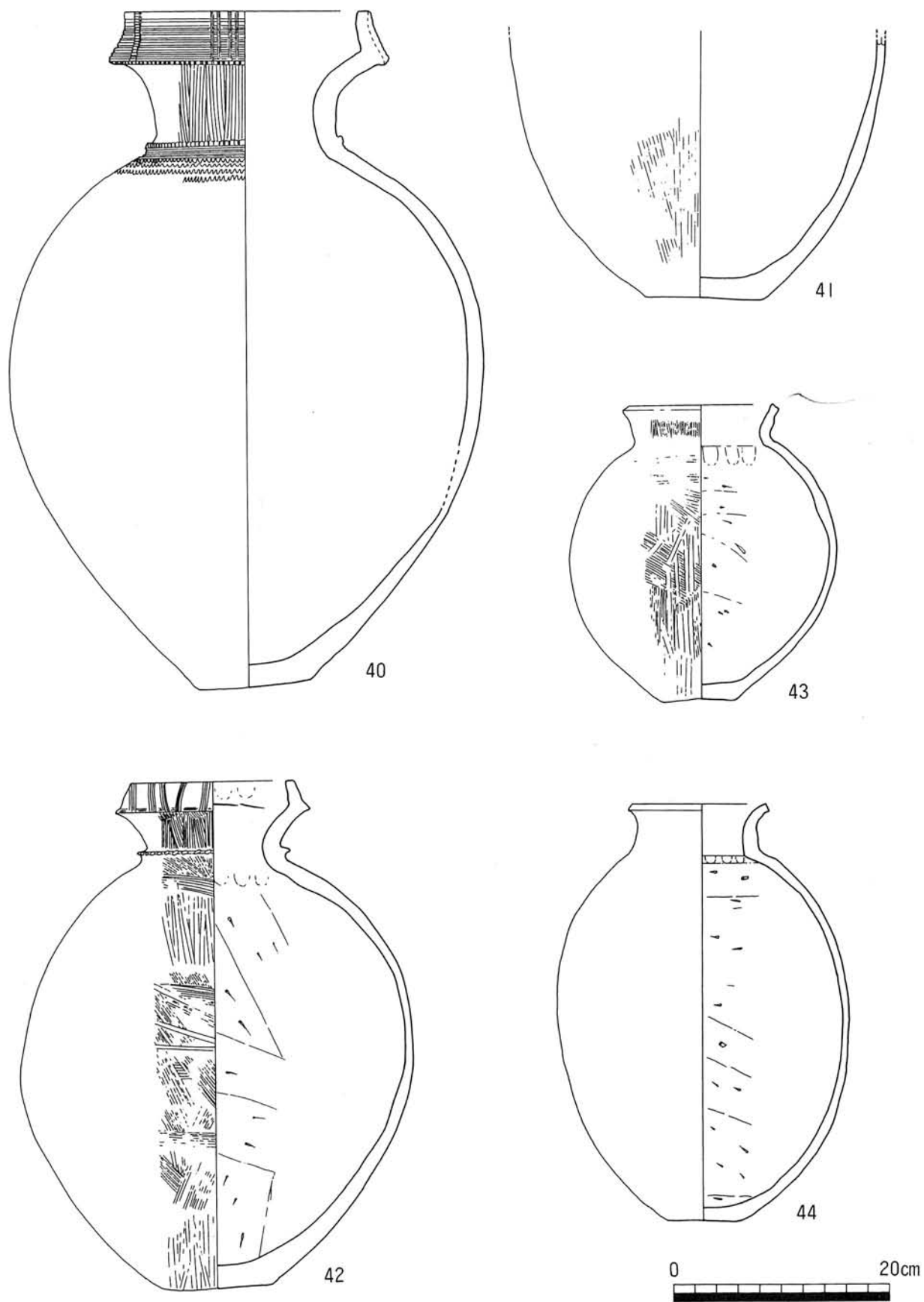
第46図 大久保遺跡出土土器実測図 (3)



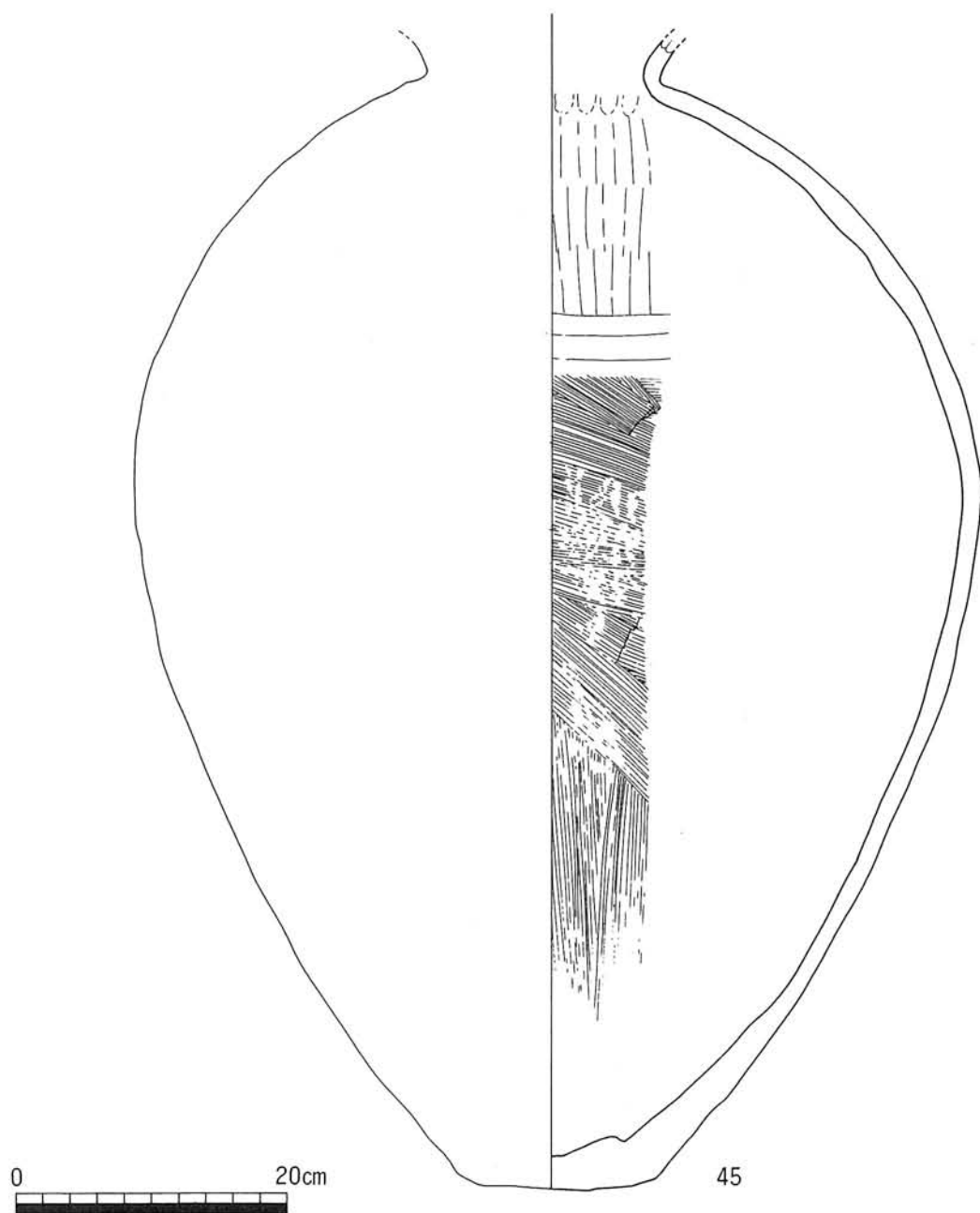
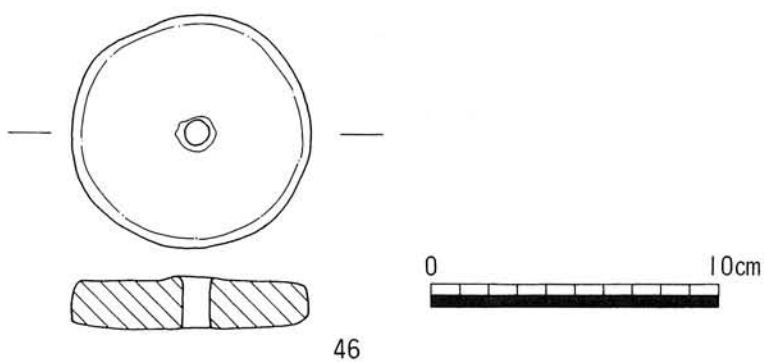
第47図 大久保遺跡出土土器実測図 (4)



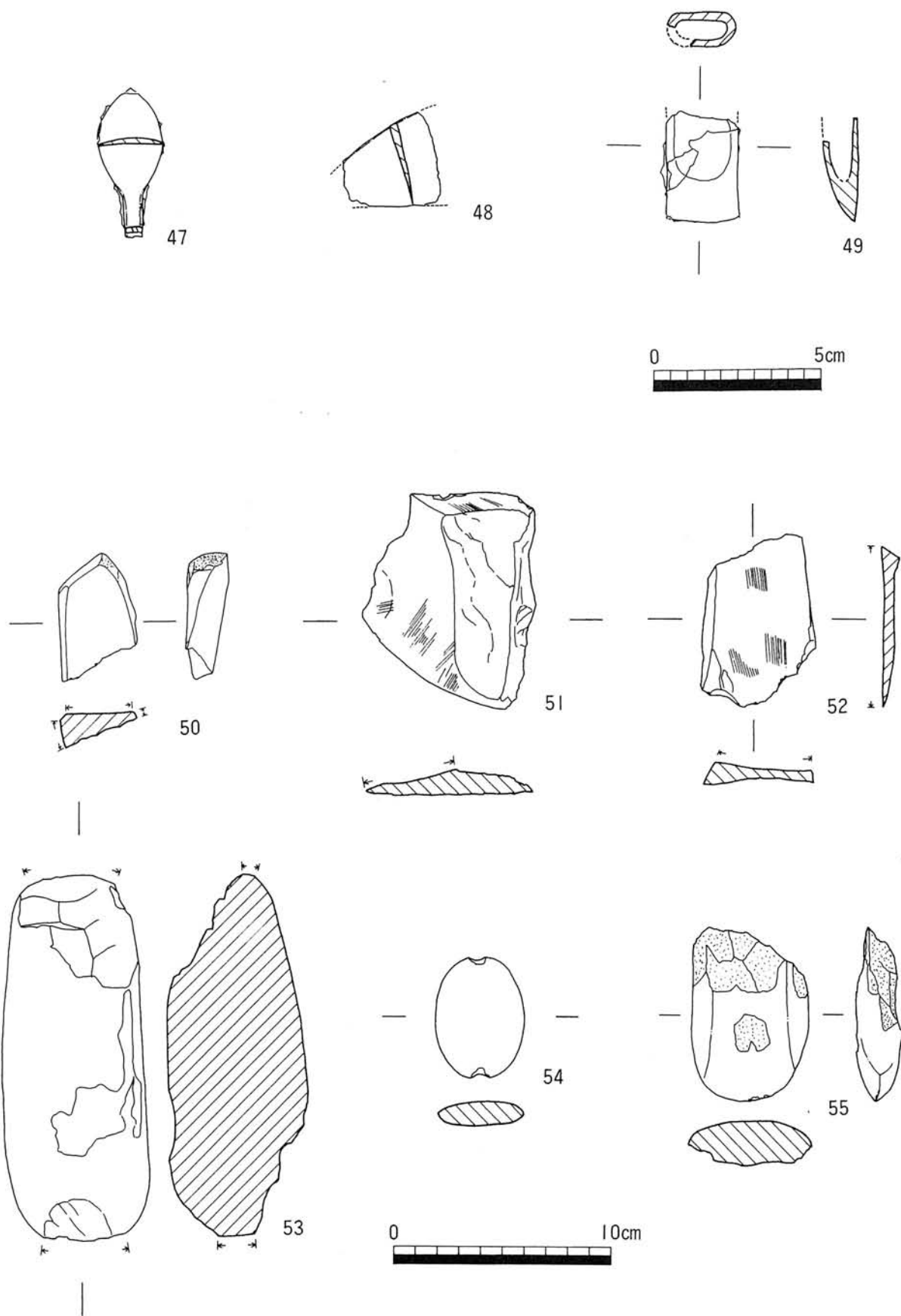
第48図 大久保遺跡出土土器実測図 (5)



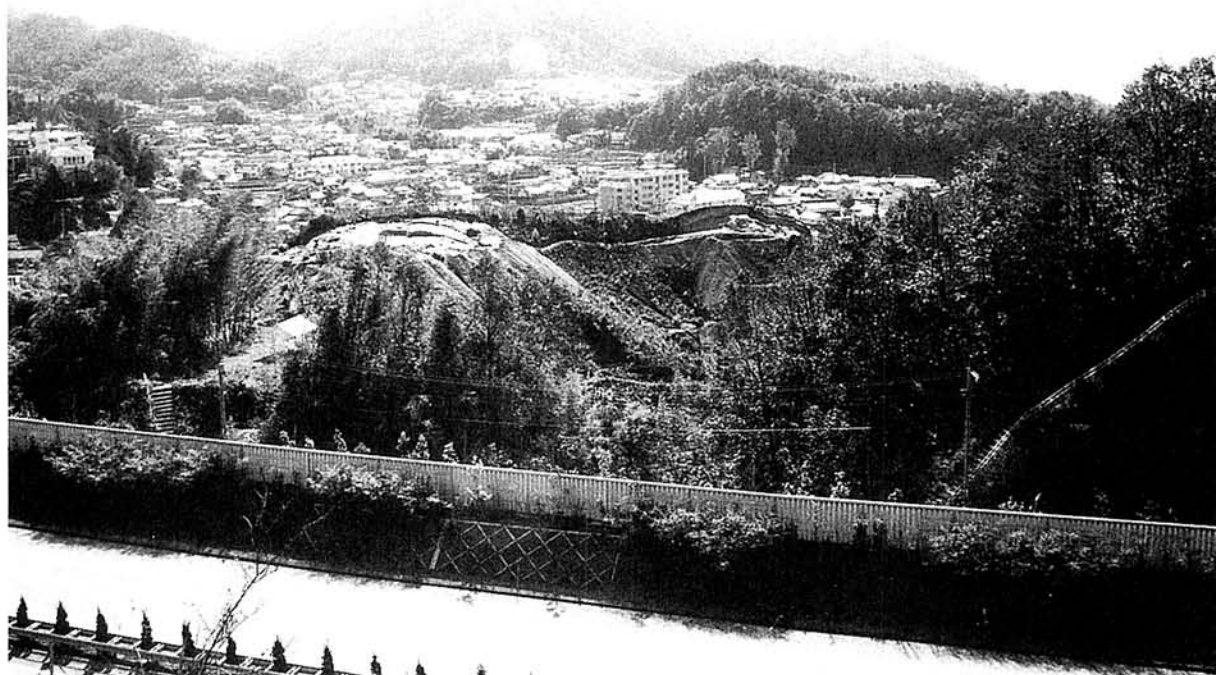
第49図 大久保遺跡出土土器実測図 (6)



第50図 大久保遺跡出土土器・土製品実測図



第51図 大久保遺跡出土鉄器・石器実測図



a. 大久保遺跡全景 ① (調査後北から)



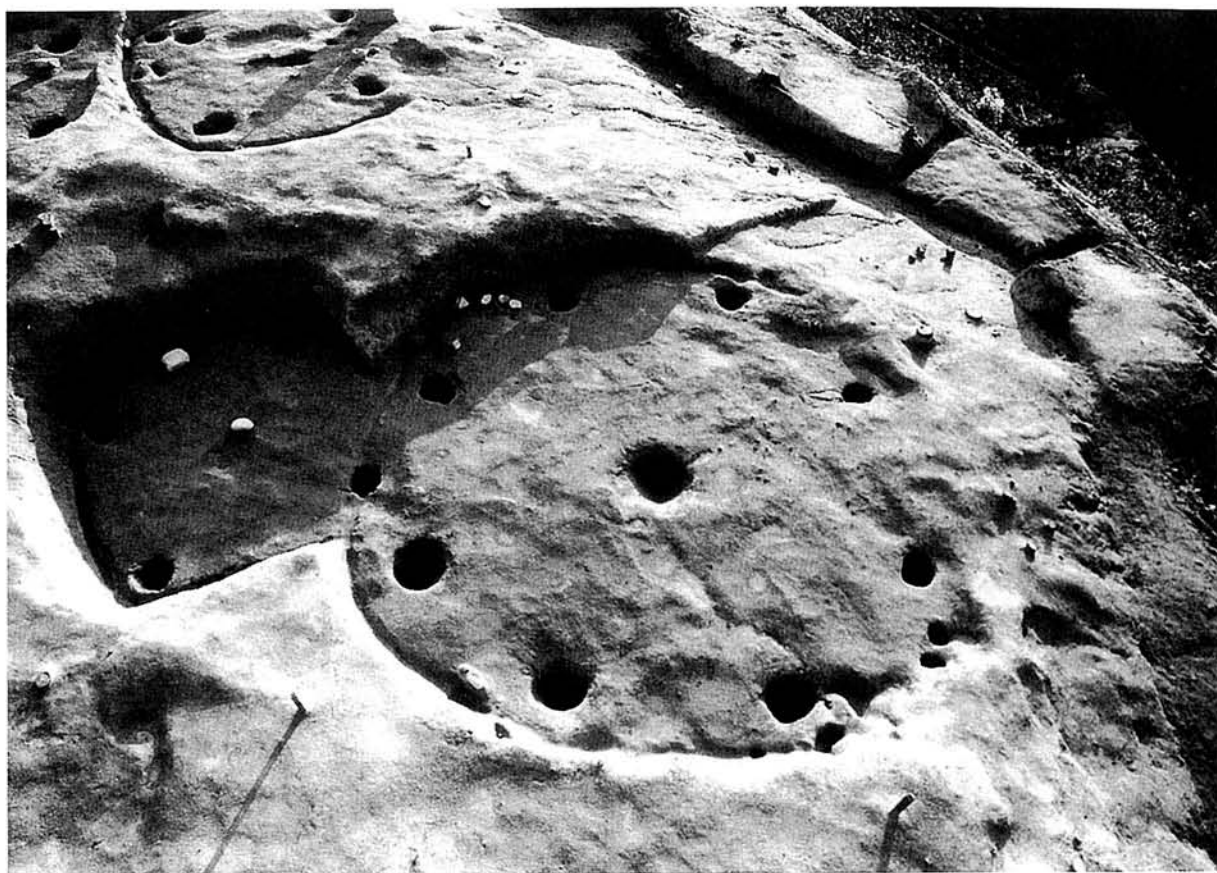
b. 大久保遺跡全景 ② (調査後西から)



a. 墳墓群全景（調査後北から）



b. 第1号住居跡・第1号テラス状遺構（調査後北から）



a. 第2・3号住居跡



b. 第4号住居跡



a. 第5号住居跡



b. 第2号テラス状遺構（調査後北から）



a. 第1号贮藏穴



b. 第2号贮藏穴



a. 第1号土壙



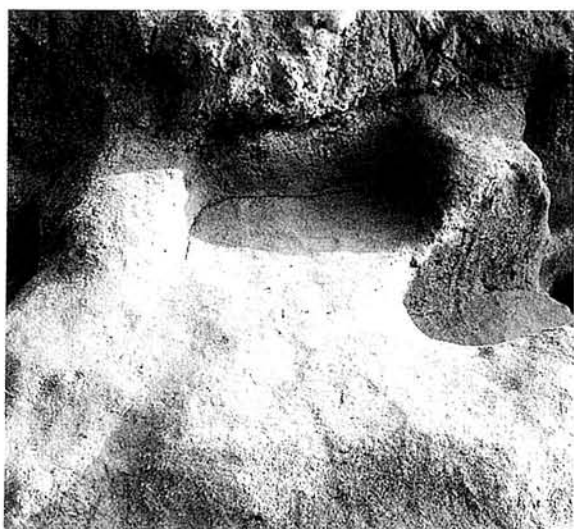
b. 第2号土壙



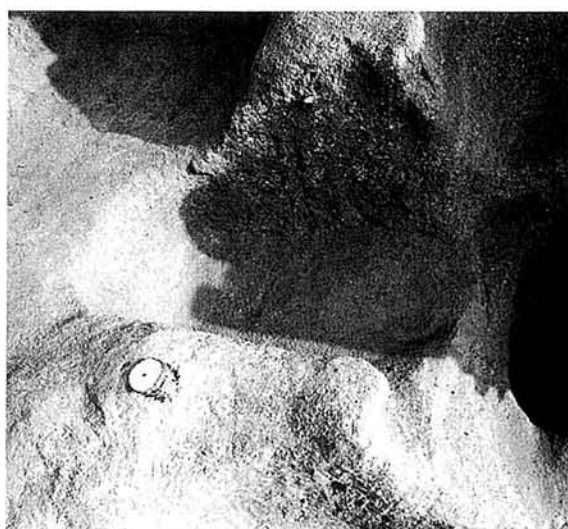
c. 第3号土壙



d. 第5号土壙



e. 第6号土壙



f. 第7号土壙



a. 第14号土壙



b. 第16号土壙



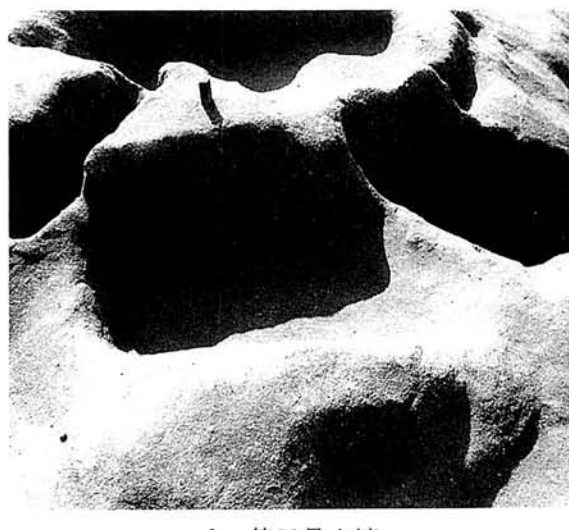
c. 第18号土壙



d. 第19号土壙



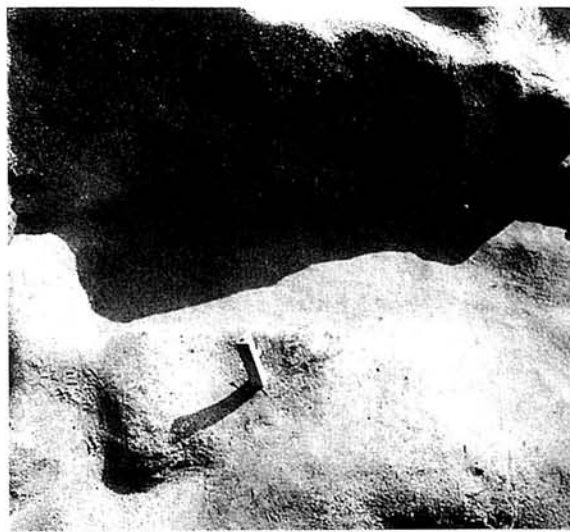
e. 第20・21号土壙



f. 第22号土壙



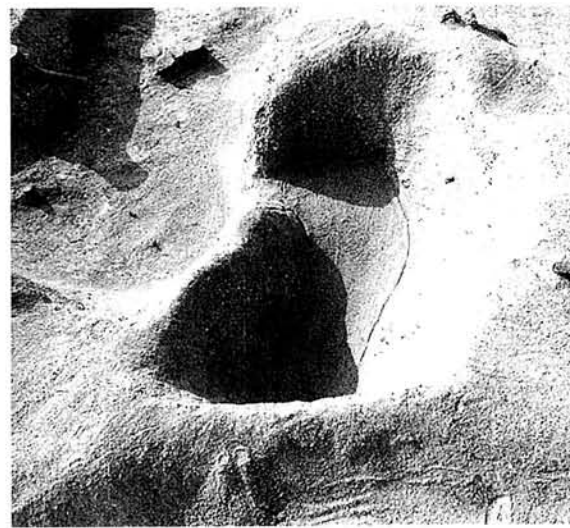
a. 第23号土壤



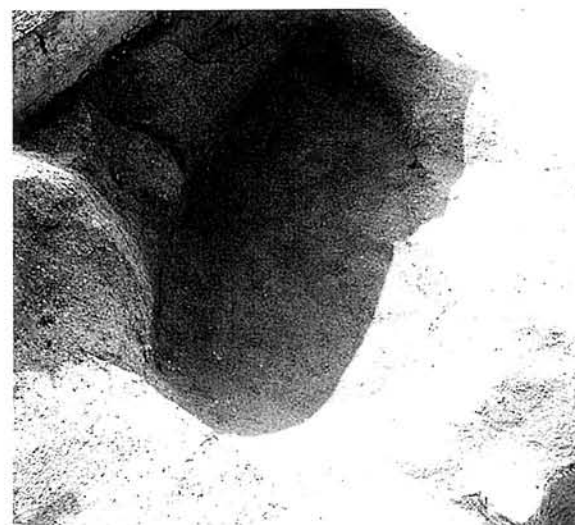
b. 第24号土壤



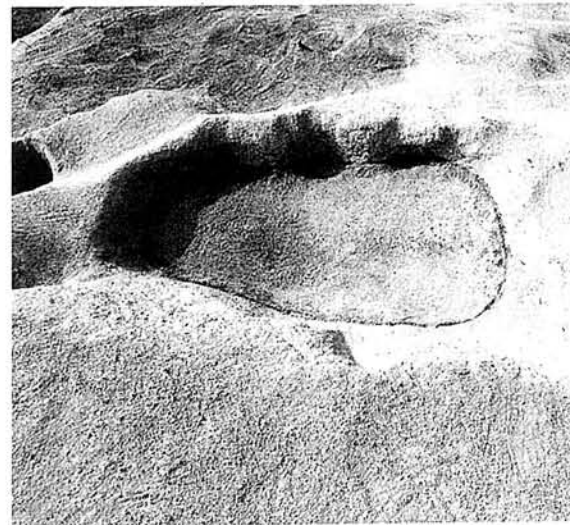
c. 第25号土壤



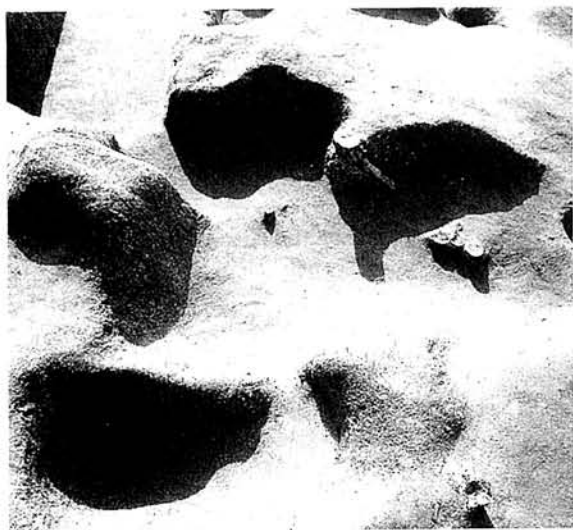
d. 第26号土壤



e. 第27号土壤



f. 第28号土壤



a. 第29·30号土壙



b. 第31号土壙



c. 第32号土壙



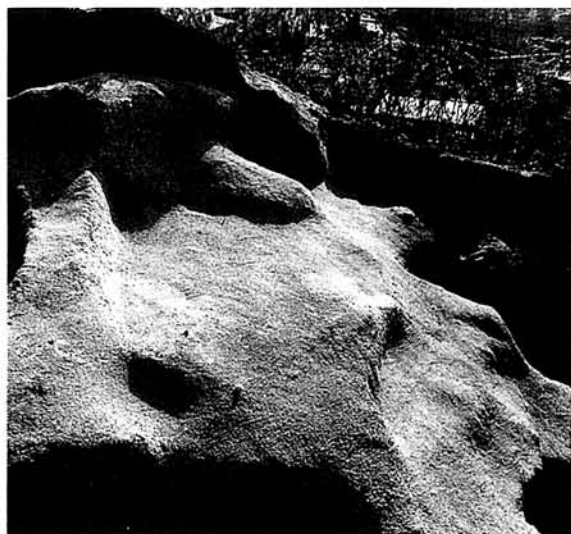
d. 第33号土壙



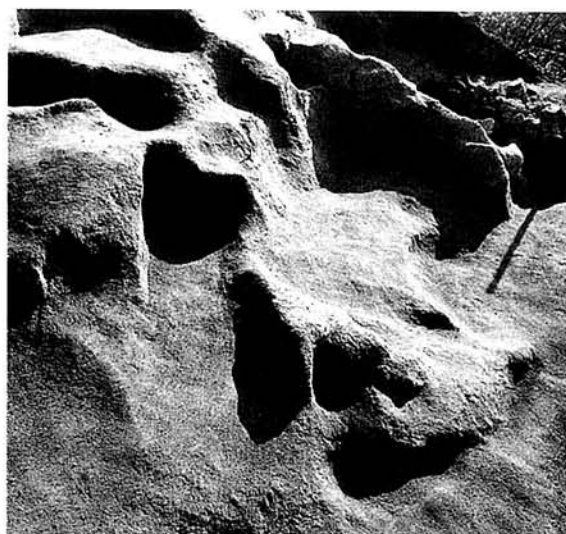
e. 第34号土壙



f. 第36号土壙



a. 第37号土壙



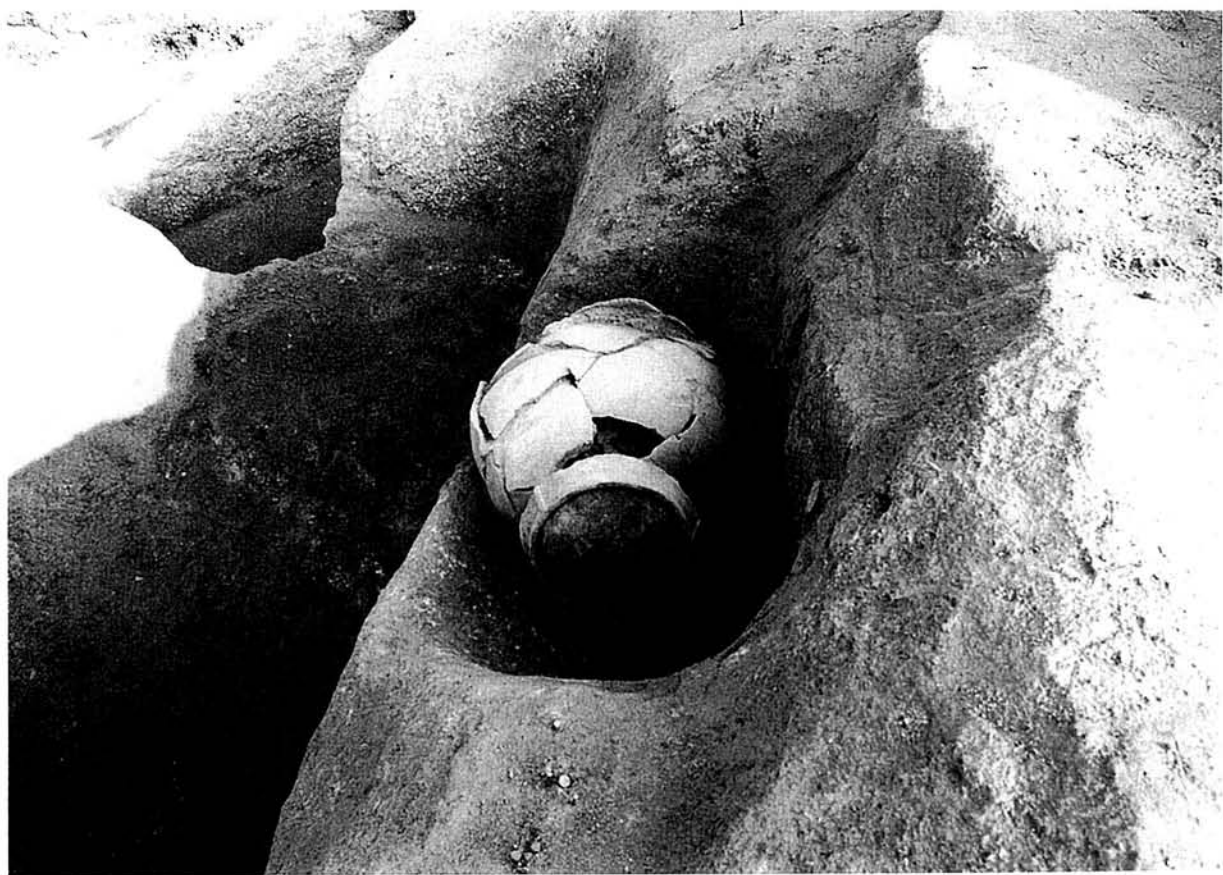
b. 第38・39号土壙



c. 第8～13号土壙



a. 第4号土坑（土器棺墓）①



b. 第4号土坑（土器棺墓）②



a. 第4号土坑（土器棺墓）③



b. 第15号土坑（土器棺墓）



a. 第17号土壙（土器棺墓）①



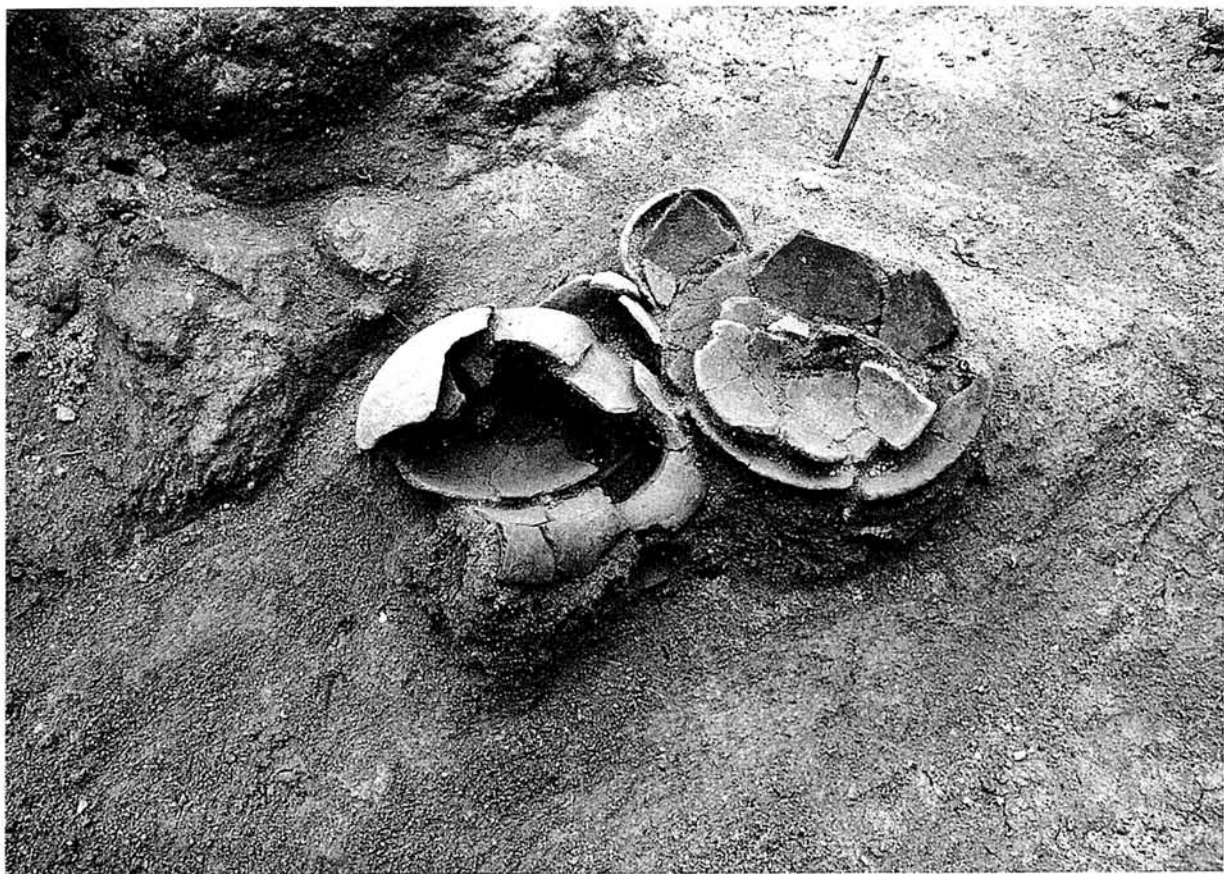
b. 第17号土壙（土器棺墓）②



a. 第35号土坑（土器棺墓）



b. 土器出土状况 ① (No. 18・19)



a. 土器出土状況 ② (No. 21・24)



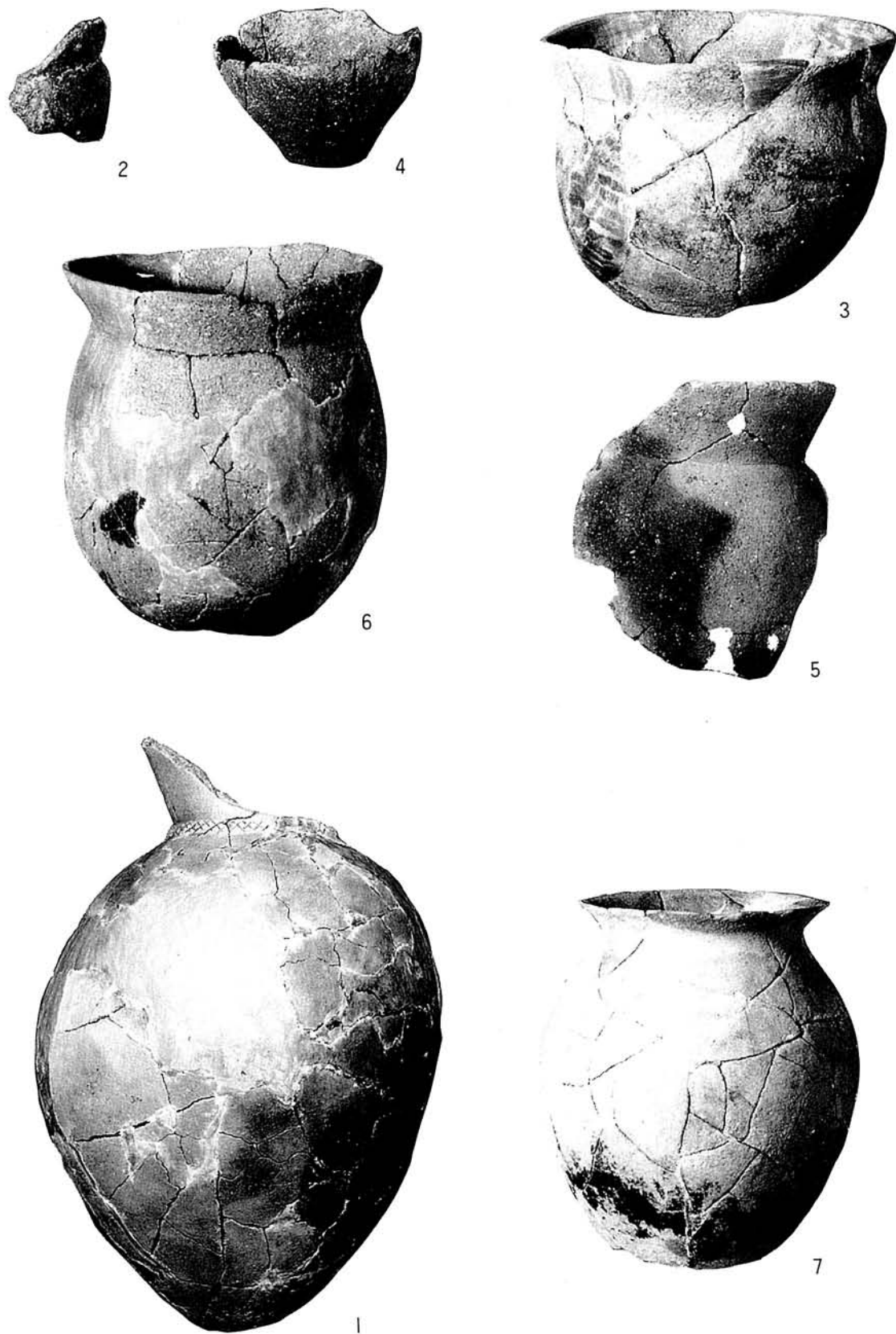
b. 土器出土状況 ③ (No. 25)



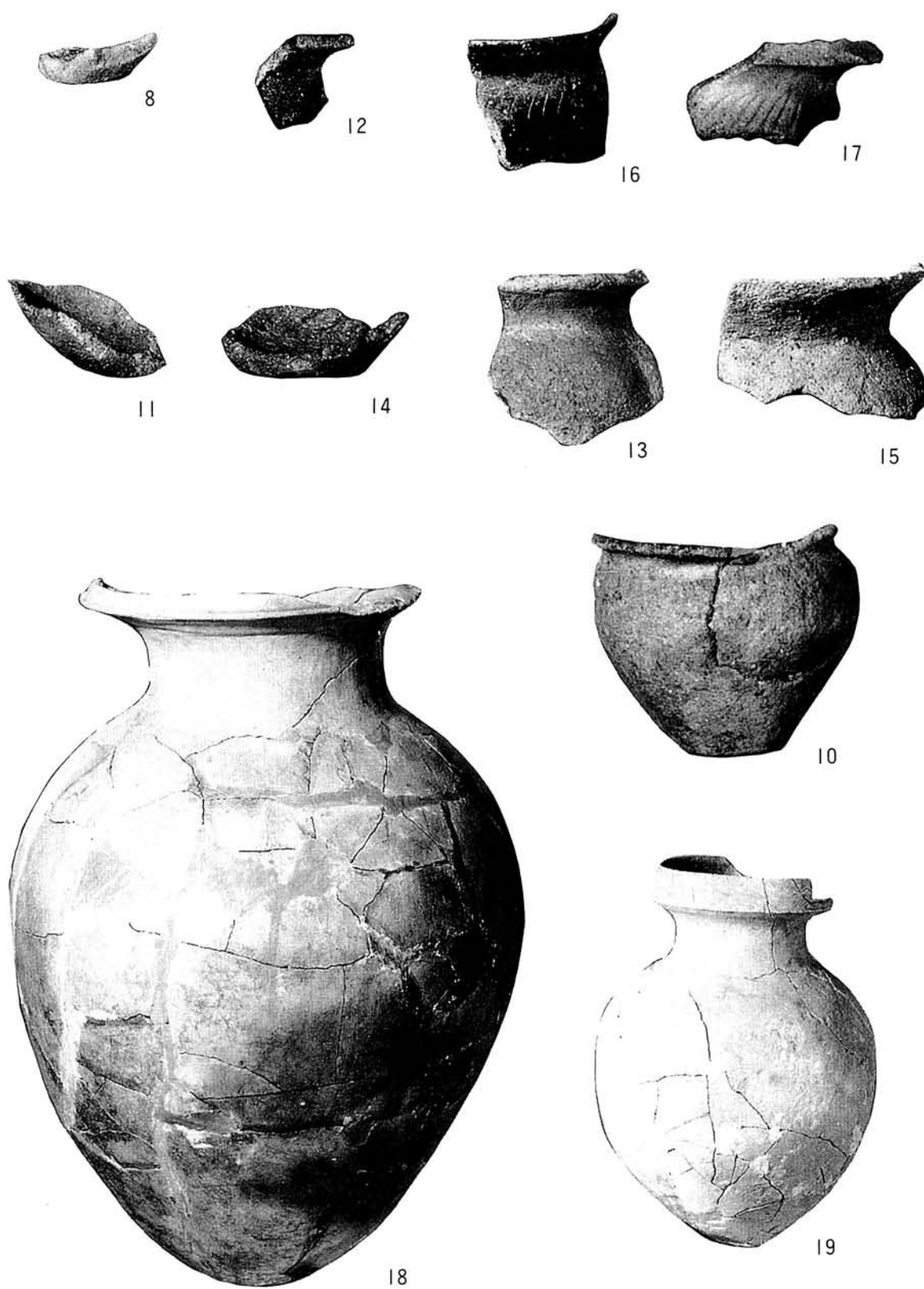
a. 土器出土状況 ④ (No. 26~29)



b. 土器出土状況 ⑤ (No. 33~39)



大久保遺跡出土遺物 (1)

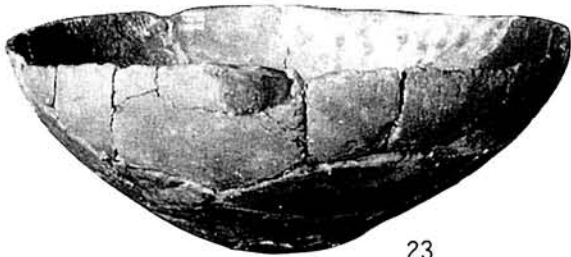




21



22



23



24



20

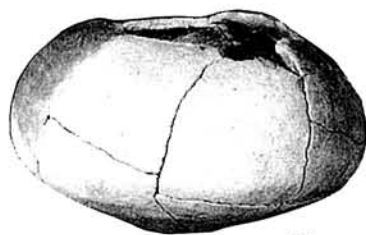


25



9

大久保遺跡出土遺物（3）



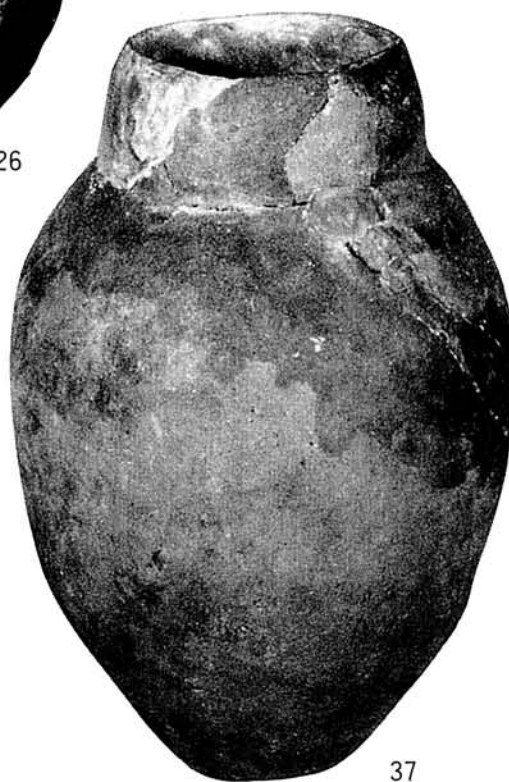
29



26



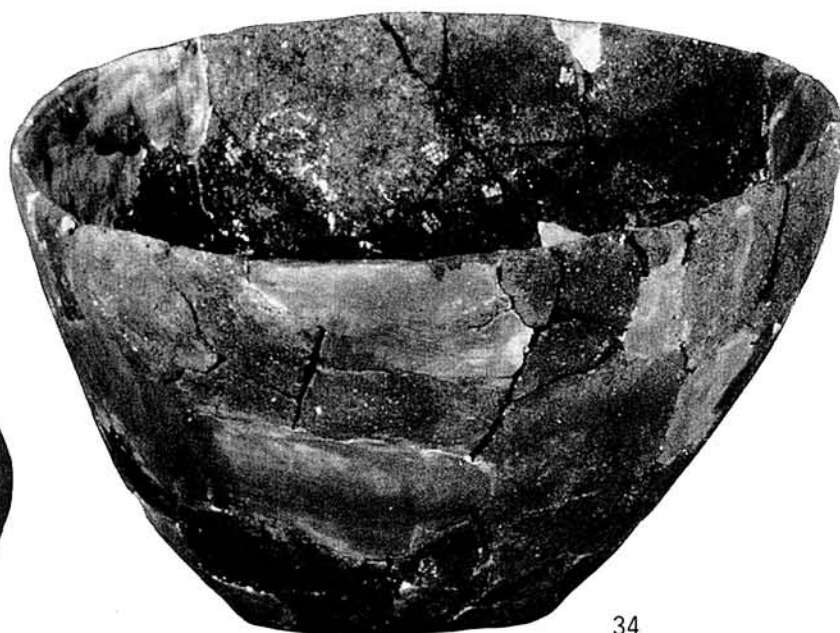
27



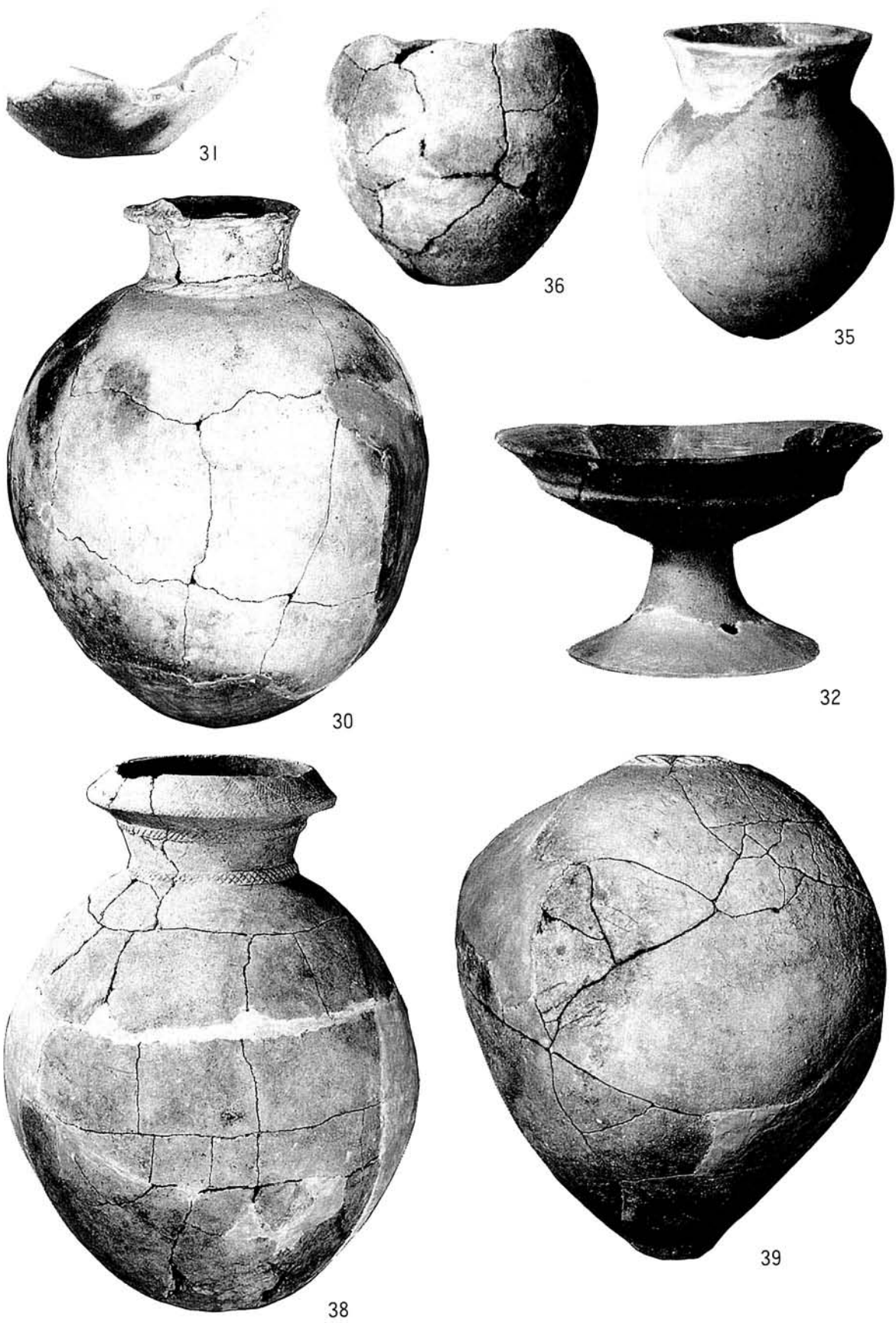
37



28



34

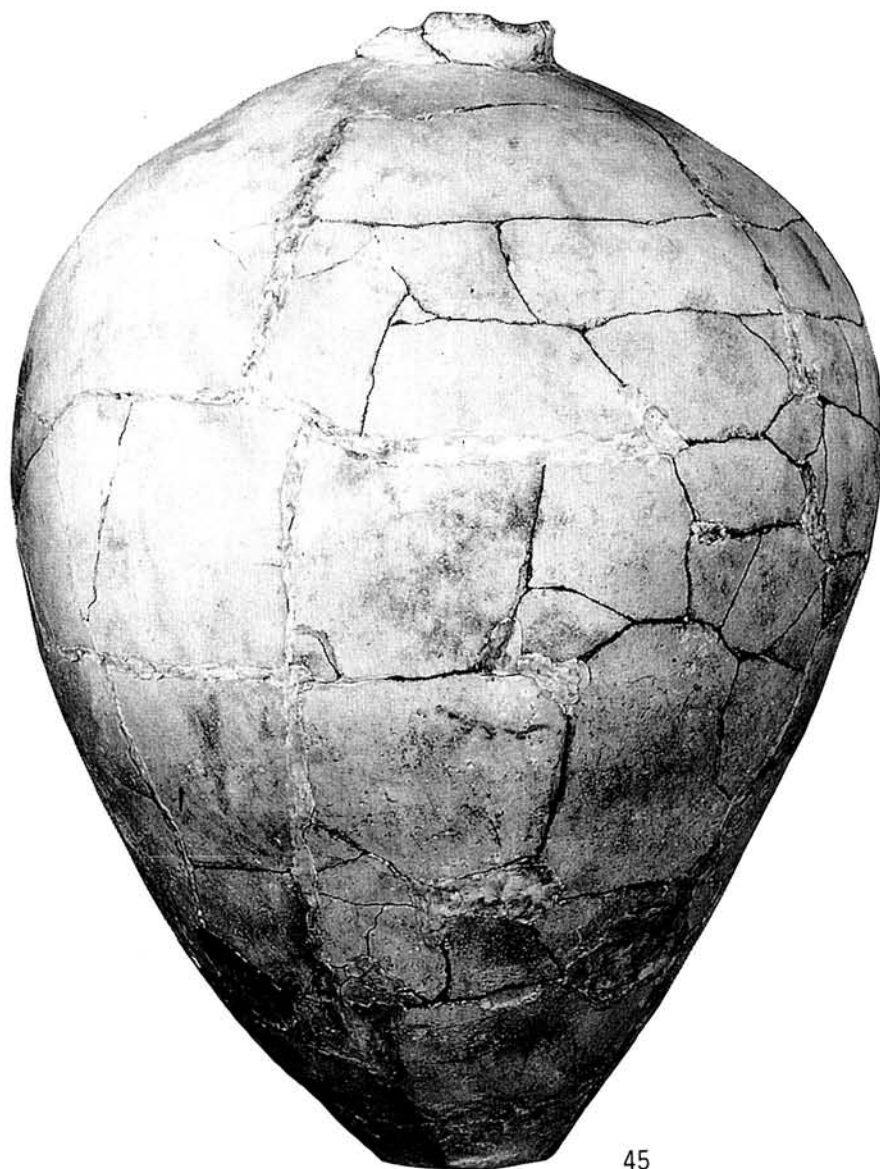


大久保遺跡出土遺物（5）





46



45

大久保遺跡出土遺物（7）



47



48



49



50



51



52



53



54



55

47~49 S = 1/1
50~53 S = 1/2

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第7集

広島市安佐北区口田1丁目所在

大久保遺跡発掘調査報告

1992年3月

編集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発行

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印刷 株式会社 中本本店

広島市中区東白島町13-15